

○池殿平賴盛卿家、

山槐記云、治承二年十一月十二日辛未、中宮御產七佛藥師法結願了、御檀所右兵衛督賴盛卿家也、○盛衰記云、安徳天皇御誕生六波羅池殿、又云、治承五年正月十四日、號池殿者御所、南一町餘也、新院高倉院崩于六波羅池殿、御歳百練抄同之、

○源賴朝卿、新亭池殿同所

東鑑云、文治六年十一月七日丁巳、二品御入洛云云、令着六波羅、新御亭、故池、大納言賴盛卿舊跡、此間被建之、○百練抄云、建仁三年十月廿九日、自六條坊門高倉邊燒亡出來、及河原院并鎌倉前、大將賴朝卿、亭、

○平教盛卿宿所

平家物語云、教盛此宰相と申へ、入道相國の御弟、宿所の六波羅の惣門の脇におりしけれり、門脇の宰相とを申ける、

○那蘭陀寺

徒然草云、入宋の沙門道眼上人一切經を持來して、六波羅のわたりやけ野といふ所に安置して、とに首楞嚴經を講して、那蘭陀寺と號す、

○寶福寺 舊跡在六波羅寺、東法園寺北、土人呼南無地藏、四條道場金蓮寺管領、本尊彌陀、像并地藏尊、今在金山、號從心上人、淨阿上人、墓在此地、清水坂寶福別院也、○他阿上人、遊行二代藤澤、開山、又人四條道場開山、
古文書 東山寶福寺證文云、金蓮寺 號四條道場申、當寺、敷地并寺領、田地、末寺東山寶福寺領等之事、任諸官評

定、文可、令下知給候旨、別當殿仰所候也、仍執達如件、

永徳元年五月廿三日 謹上大判事殿

今川左近將監範

氏在判

○涅槃堂 茶毗所也、元在南無地藏地、豊國社造營、時、被遷建仁寺、門前、又被築鴨河堤、時、移于西、野東山涅槃堂謂之乎、

雪嶺文集曰、雜之東山、下有一字、涅槃堂、傳爲靈地、頻年不葺、屋破棟撓、視者不_レ悲、咲、本無恒、産、再造惟難、唱伽陀一章、偏告宰官長者、大心、檀越、山中、耆舊、聚洛、道俗、信男信女等、云云、

○宮、辻子阿彌陀院 或云、宮、辻子、六波羅寺、東、六道、辻、邊、云云、

西山上人傳云、祖師上人入滅、後ハ、遺第處々ニ寺院ヲ建、或仁和寺、西谷、嵯峨深草、或東山、宮、辻子ナト、聞ヘシ、○蓮門宗派云、觀鏡 證入東山、元祖、專觀宮、辻子、阿彌陀院、長老、

○六條若宮 又曰、左女牛、若宮、元在西、洞院東六條、南、若宮町、今遷六波羅寺、南六條、坊門カ末、北、然猶若宮町、中、儀式、有從、正月朔日、至七日、修正、正月八日、心經會、二月初卯、御神樂、被學舍利會、舍利塔出御拜殿、八月、十六日、放生會等、昔有別當、貫首、小別當、公文、從儀師、堂達、十禪師、三綱、神主、權神主、禰宜、神人、執事、兵士等、
康富記云、左女牛若宮放生會 八月十六日 ○諸社根元記云、天喜元年、依勅願、御勸請、曩祖兼親奉行之、伊豫守賴義、御沙汰也、二十二社註、式同之、 ○東鑑云、文治元年十二月卅日、以土佐、國吾河、郡、令

寄附六條、若宮給、彼、宮者點故、廷尉禪室、六條、御遺跡、被奉勸請石清水、以廣元、弟秀嚴、阿闍梨所、被補別當、○又云、同三年正月十五日、左女牛、御地、令奉寄六條若宮、是六條、以南、西、洞院、以東一町也、○續神皇正統記云、文和元年、後光嚴院踐祚、日、內侍所御辛櫃、佐女牛若宮寶殿に置れけるを、今夜密々に内裏に渡入奉らる、○應仁記云、左女牛ノ八幡ハ、金ノ

椽玉ノ翠簾、陣頭ニ列ナル八乙女ノ、鈴ヲ手ニセヌ事ソナキ、○古文書云、七條坊門并西、洞院、地、任被申請、所有御寄附六條、新八幡宮也、可令存知給者、院宣如此、仍執啓如件、康永四年六月十五日 經頭○後深草院御灌頂、長講堂にて侍けるに、とらの時の水とらせ給はん、とて、六條若宮のあかゝに臨幸の時讀る、玉葉石清水なかれいふかき契りとも今宵や君かくみてゐるらむ 前大僧正公什○大膳大夫頼康、佐女牛の若宮歌讀侍しに、野鹿、草庵、あいつの野に音を鳴鹿いあふ坂の近きかひなく妻やこふらん 頓阿

○大谷本願寺 親鸞上人墳寺也、元在知恩院山門北、○最眞敬重繪云、長樂寺玄海、累代、遺跡モ我聖人、御座ノ敷地ノ内トナリシト云云、今遷鳥部野、

本願寺緣起云、親鸞上人 東山、西、麓鳥部野、南邊延仁寺奉葬、遺骨ヲ拾テ、鳥部野北、邊大谷納之、谷ニアリ、知恩院西邊本願寺是也、又曰、文永九年、上人、息女覺信尼、建立也、寺務、覺信ノ息覺惠法師也、文明三年二月十六日、爲山徒被破却、大谷ニハ、庶所許アリシト、云云、○洛陽德正寺舊記云、文明三年二月十六日、山徒四五百人、俄大谷ニ押寄テ、堂舎破却ス、蓮如上人防クニ無便、影像ヲ先立テ、密ニ遁去テ、三井、別所近松寺ニ潜居、于時越前國荒井ノ住人井、上筑前ト云者、薙髮ノ願知ト號ス、此僧踏止テ捨身命堅ク防ク、故ニ山徒窟ヲ掘發ク事ヲ不得退散ス、因茲蓮上人送狀云、今度本願寺依破滅、山頭之惡黨等、開山聖人、遺骨欲掘返所、願知依一身之才、覺全御番仕不移轉條、一世之満足、末代之名譽神妙也、云云、爲褒美、内木佛令授與候也、難有存仕、子々孫々迄御座所、御番可仕者也、 文明八年正月十八日 蓮如在判願知 文明八年、此寺跡道場ヲ建立

シテ號勝久寺、開山願知、後寺ヲ於移洛陽改德正寺云云、慶長八年十月八日、准如上人座所ヲ被遷鳥部野、今號大谷本願寺、○曆應二の年八月十五夜、大谷にて講し侍る歌の中に、暮歸繪「逢生のまけるを月のかことにて露分わふる影のさひしさ 法印宗昭○日野故亞相、東山の花瞻望の爲とて、法印坊に入來ありて、くるゝまで御遊の時しも、向寺速成就院の入相の聲聞え侍るを、花間鐘、暮歸繪、暮かゝる梢の空にひゝくなり花よりいつる入あひの鐘 于時前中納言大納言俊光○同、くれやらぬ夕日の影霞めて花に木たかきいりあひの鐘 于時兵衛佐大納言資名

○鳥戸 和名云、鳥戸郷、愛宕郡云云、○山野、

性靈集云、天長四年五月、勤操大德、於中京西寺、北院奄然而化、茶毘東山鳥部、南麓、○顯昭拾遺抄云、鳥戸山いあみたか嶺也、その裾を鳥部野といふ、○山家「なき跡を誰とあらねと鳥へ山をのくすきつかの夕暮 西行○保延元年のとなるへし、七月九日故人 故、中納言玉葉、俊忠云云、の忌日に、とりへの、墓所の堂にまいりて、懺法にあひて、夜更てかへるに、草の露まけかりければ、長秋詠藻玉葉、入「わけきつる袖の雫かとりへの、なくくかへる道芝の露 俊成

○南鳥部

河海抄云、風土記云、南鳥部、里ヲ稱鳥部者、秦公伊呂具的、餅化鳥與飛居其、所、森、今、鳥部云云、○諸社根元記云、風土記云、伊呂具秦公用餅爲的者、化成白鳥、飛翔居山峰、伊奈利生遂爲社、名、云云、○按、右二本ノ故事、大同小異ニシテ、其所異也、故ニ又載伊奈利ノ條下、後人可詳之、

○寶皇寺 拾芥抄云、法皇寺

今昔物語云、鳥部寺、寶頭盧コソ、極ク驗ハ御スナレ、○文德實錄云、天安二年四月庚子、是夜寶皇寺火、俗名鳥部寺、金堂禮堂盡爲灰燼、○內藏寮式云、造五月五日、件、昌蒲オヒモクハ、佩、供御并人給料、外十五條、內堅爲、使供、諸寺、東西、焚釋、崇福、常住、東名、出雲、聖神、法觀、廣隆、東藥、珍皇、佐比、嘉祥、寶皇

○皇后定子陵 一條院后、道隆女

榮花物語云、長保二年十二月十五日、みこむまれ給、熾子同夜崩、とりへの、南のかた二町ばかり、たまやといふものをつくりて、ついひちなとつきて、こゝにおいしませんとせさせ給云云、みやいことし廿五にならせ給ふ、

○恒世親王墓

日本後紀云、天長三年五月丁卯、恒世親王薨、今上第一、皇子、母贈皇后、丙子、葬、恒世、親王、於山城國愛宕郡鳥部、寺、以南、山、

○實仁親王墓

扶桑略記云、應德二年十一月八日戊戌、皇太弟實仁親王薨、年十五(九)、歲、廿八日戊午、葬、於鳥野、百練抄云、實仁親王、戶、野、後三條院第二皇子

○中尾陵

請陵式云、贈皇太后藤原氏在山城、國愛宕郡鳥部、郷、陵、戸、五、烟、山、四、町、五、段、四、至、東、限、谷、南、限、田、西、限、障、北、限、谷、有、山、○贈皇太后藤原氏、光孝天皇母、總繼朝臣女、三代實錄云、仁和三年五月十六日己丑、勅、以、山城國愛宕郡鳥部、郷、榛原村地五町、賜、施藥院、其四至東限、德仙寺、西限、谷并公田、南限、內藏寮支子園并谷、北限、山陵并公田、施藥院使等奏、

院、所領之山、元在彼村、即是藤原氏之葬地也、依元慶八年十二月十六日詔、被占入中尾山陵之内、

○拜志墓

請陵式云、贈正一位太政大臣藤原朝臣繼、在山、○三代實錄云、藤原朝臣繼、繼、光孝天皇外祖父、

○清閑寺

在清水寺、南澗谷、北、

寺記云、清閑寺者、千手千眼觀自在菩薩垂應之道場、高倉、上皇陵、廟之陳迹也、云云、當時(カシ)有、

法花三昧堂及寶塔、今呼塔壇者寶塔之焦燼、○拾芥抄云、清閑寺佐伯、公行建立、○東鑑云、清閑寺爲台嶺、末寺、○以波字類抄云、清閑寺伊豫、守正四位下佐伯、朝臣公行、往年上奏奉爲鎮護

國家、下所以利益衆生、王城、東清水、南結構一院、勤修法花三昧、號清閑寺、去長保二年、寄

進於御願寺、○百練抄云、大治四年十月四日、東山清閑寺炎上、○無題詩、遊清閑寺、去長保二年、寄、藤周光、梵宮幽趣、人

寰、李日、放遊屬、素閑、巖樹、春風、花落處、洞門、暮雨、鳥吟間、○清閑寺花百首に原花、草庵、山風の

さそふもあるくまきもくの檜原くもりてちる櫻かな 頓阿

○高倉院陵 在本堂、北

百練抄云、養和元年正月十四日、太上天皇崩于六波羅賴盛卿、亭、御歲廿一號、高倉院、奉葬、清閑寺、○吉

記云、壽永二年六月廿一日、被立山陵使清閑寺、高倉院使右中辨親宗、○高倉院昇霞記云、治承

五の年の春のはしめ、十四日の曉、ね覺の御枕をきたになして、たまの御あらかも西にうつら

せ給云云、そのゆふへ、六はらより清閑寺にうつし奉る、殿上にてまつのちの御名の定めあ

るにつけて、高倉いかなる大路にて、憂名の御形見に残り、ひむかし山いかなる嶺にて、限り

の御栖とされめらるらむと思ふもかなし、云々、たゝをくりをく山の中に、御わざのとはて

にしかの、ゆくりなき三昧僧にあつけをき奉りて、法花道場をたておさめ、をのくゆきわかれにき云云、法華堂にまいりて、おもひさりし御すみかかなと思ひつゝけて、「思ひきや人めまれなる山中に君かありかをうつすへし」とい、大御門内府源通親○治承五年四月十四日、新院崩御、清閑寺にて煙となしたてまつるとき、新吉「常にみし君か御幸をけふとへ」歸らぬたひときくそかなしき 法印澄憲

○六條院陵

帝王編年記云、安元二年七月十七日、新院崩御、御年十三、號六條院二條院御子、同廿三日乙丑、奉葬東山邊、○山

槐記云、治承五年正月十四日、新院高倉已崩御云云、今夜渡御邦綱卿、清閑寺、小堂、抑是六條院、御墓所、堂、○三長記云、美作、國久米庄、清閑寺法花堂領、

○三寶院僧正山庄、藤氏系圖、賢俊、醍醐大僧正、東寺長者、日野俊光卿男、資朝卿弟、

花の比、三寶院僧正、清閑寺の山庄によると、まりて、明て後、朝花といふ事をよみ侍し、續草庵「此さとの朝ある雲もひとつにて軒端をうつむ山さくら哉 頓阿○文和四年十二月、清閑寺坊にて百韻興行侍に、菟玖波集「有明のことしの月の名殘かな 前大僧正賢俊

○權僧正道我坊、藤原系圖、道我、東寺權僧正、無動院、住八坂、日野從四位下俊業朝臣曾孫、權律師聖譽息、

東へまかり侍しに、清閑寺に立よもて、道我僧都にあひて、秋にかへりまうてくへきよし申侍しかの、僧都、兼好集「かきりある命なりせいめぐりこん秋をもせめて契をかまし 返し「ゆくすゑの命もあらぬ別こそ秋とも契る頼みなりけり 兼好

○歌、中山按、滑谷道、北從清水通、清閑寺路、西有、小山、是則歌、中山ナラ、歟、

清閑寺々説云、昔此寺に眞燕僧都といふ人住侍ける、ある夕暮門外にたゝすみて、行かふ人を見わたる折ふし、髪かたちめてたき女の、たゞひとりゆくを見て、たちまち染心おこりけれど、物いひかくへき便りなくて、清水への道いつれそとひけれの、女、「見るにたにまよふ心のはかなくてまとの道をいかてあるへき」といひすて、やかて姿を見うしなひけるとそ、女の化人にて侍りけるにや、その歌よみし所を、歌の中山といふとなん、歌中山、清水大谷本願寺の東にあり、○盛衰記云、山門、大衆搦手ハ、大關小關四ノ宮川原モ打過テ、苦集滅道ヤ清閑寺歌中山マテ責寄タリ、○伊勢守記云、寛正六年八月、今出川殿簾中安産、伊勢守爲納胞衣考吉方、當年巽、方吉ナリ、依テ東山滑谷ヲ經テ歌、中山へ出玉フ、典藥、頭狩衣ニテ參向ス、歌、中山ニテノ處ハ、清水ヨリ清閑寺へ通フ路ヨリ、弓杖十四丈許ナリ、河原者先テ土ヲホリ、先臺ヲスヘテ、御胞衣ノ桶、赤白ノ絹ニテ二重包ム、典藥、頭是ヲ取テ壺ノ内へ入テ蓋ヲシ土ヲ掩フ、其上ニ松ノ長三尺許ナルヲ裁テ歸ル、清水寺ヲ經テ直ニ御産所へ參、

○南池院源仁僧都住院也、

或書云、南池院東山清閑寺邊云云、源仁、弘法大師法孫、實惠、附弟、聖寶益信等、師也、

○苦集滅道今、滑谷越也、

下學集云、洛陽東山清水寺、南、清閑寺之麓也、三井、開山教待和尚欲往城南山崎、別業、及經此地、其木履之響鳴、作苦集滅道之音云云、故呼此道云若集滅道也、○智證大師年譜云、世

傳、教待、與清水、行睿居士善、憧々來往、足着木履、其履音如唱、苦集滅道、○保元物語云、檢非違使、皆關々へ向フヘシトテ、宇治路へハ安藝判官基盛、淀路へハ周防判官季實、粟田口へハ隱岐判官惟繁、久久目路へハ平判官實俊、大江山へハ新藤判官助經承テ向ケリ、○太平記云、四五町打延テ、跡ヲカヘリミレハ、早六波羅館ニ火掛テ、一片ノ烟ト燒揚タリ、五月闇ノ比ナレハ、前後モシラズクラキニ、苦集滅道ノ邊ニ、野伏ミチノテ云云、又云、苦集滅道ヲ經テ勢多ヲ通、○應仁記云、二十三間ノ北、シル谷越ニ山科ヲ經テ、云云、○武家雜記云、文書警固久々目路阿彌陀峰、可致軍忠也、上下署 建武三年六月八日 清閑寺衆徒申 清閑寺執行御房 等持院殿 御判

○若松亭

盛衰記南都合戰云、治承四年十一月廿一日、藏人頭重衡朝臣大將軍トシテ、五條、大納言邦綱卿山庄東山若松亭ニ勢汰アリ、○百練抄云、安元二年七月十七日、新院崩御、御年十三、號六條院、日來御院、御所、而依病病出御邦綱卿、東山亭於件、所有此事、

○若松池

宗長日記云、大永六年十月十日、下京に出て、あすは天津までといふ申署、若松の池ある谷あら浪さはくなどいへは、送の人あまたきて、三井寺勝藏坊山科花山迄むかへとて、人おほくくして、若衆誘引、先こゝろをのへしなり、京よりの人をかへし、神なしの森を過、關屋の軒端みゆ、

○若松殿

東鑑云、寛元四年七月廿八日、入道大納言家鎌倉將軍賴經卿經粟田口御入洛、云云、經祇園大路、着御于六波羅、若松殿、

○小松殿 按、滑谷道北、今、大谷本願寺、間、平家物語長門本云、小松殿六波羅ノ東大道ヲ隔テ辰巳角ト云云、

日戊申、入道内府所惱猶重シ云云、法皇密々有臨幸彼亭小松、○盛衰記云、大臣重盛常ニ居給ケル所ニ、四方ニ四十八間ヲ點シ、一方ニ十二光佛ヲ一体ツ、奉立タリケル、其御前毎ニ常燈ヲ燃サレケレハ、四十八ノ燈爐アリ、故ニ此大臣ヲハ、異名ニ燈爐、大臣トツ申ケル、○小松内大臣家に菊合し侍けるに、人にかはりて、風雅「うつしうふる宿のあるしもこの花もとも老せぬ秋をかさねん 右京大夫

○後京極攝政墓

在、小松谷、極長經公御墓也、土人誤テ源義經ノ墓ト云トッ、

三長記云、建永元年九月六日甲申、今日大僧正於故殿、御墓所、令供養如法經給、即被奉埋御墓、傍、仍參、小松谷、導師聖覺僧都、○九月七日故殿の小松谷の墓所にて、五部大乘經供養と聞て、法眼のさうそくをくりたてまつる、次に前攝政の御もとへ、拾玉「あどふりて神さひわたる小松原けふやみにしむ秋の谷風 慈鎮○承久二年三月七日、故殿忌日、小松谷令修佛事之次思出云、同、何とこはこまつの谷の春風にちりても花は又にはひつゝ、同

○小松殿 在小松谷、月輪殿、御所、法然上人此殿、御堂、暫ク居スト云云、

黒谷上人傳云、月輪殿ノ御所ヲ小松殿ト云、上人小松殿ノ御堂ニオハシマシケル、○同傳「千

年ふる小松のもとをすみかにて無量壽佛のむかへをまつ 源空○又云、建永二年二月官人小松谷ノ御房ニ向ヒテ、急キ配所へ移リ給へキ由ヲ責申ケレハ、遂ニ都ヲ出給フ、月輪殿御餘波ヲ惜ミテ、法性寺ノ小御堂ニ、一夜留メ奉ラレタリ、○應仁記云、小松谷殿寺光寺、異本ニ小松谷○等光寺不知其在所、今滑谷路ノ西、石塔町北側民家後園ニ有ニ石大塔二基、土俗曰繼信、忠信墓、一墓、銘云、永仁三年二月二十日、願主法西云云、又一基、無銘、按、古此邊多寺、而何寺寄附塔ナレバ不知、亦有曰小松谷律院、左載之、

○小松谷律家

薩戒記云、永享九年八月廿四日、小松谷ノ房主、聖芳西堂、故養德院贈左府ノ息也、可レ爲泉涌寺ノ新命、聖芳上人後改之眞宗律師廿五日、泉涌寺補住持職云云、○二水記云、永正十七年七月廿八日、小松谷菊亭公典、死去云云、藤原系圖、小松谷公範律權大納言季彥息、

○松谷按ニ小松谷同所歟、

後京極攝政らせ給て後、夫木 東林吟「松たにの風いかはかりいたむらん夜半の煙の心ほそさを 慈鎮

○小松谷本願寺開基善鸞上人、

永享日録云、永享八年十月十二日、來口日小松谷本願寺御成伺之、

○稱名寺幻居山人隨筆云、先覺禾上滑谷、

○阿彌陀峰今、豊國、後山也、慶長三年、豊臣秀吉公葬於阿彌陀峯云云、其跡在于今、枕草紙云、峰はあみたか嶺、○顯昭拾遺抄云、鳥戶山はあみたか峰也、そのすそを鳥部野といふ、無常所也、○小世繼云、御ともには、むつましく召仕けるをくして、あみたかの嶺こえにおはしぬ、○後拾遺往生記云、上人隆選者台嶺ノ人也、云云、求無常處、登阿彌陀峰、○盛裏記云、

或ハ木幡大道醍醐路ニ掛ツテ、阿彌陀ノ麓ヨリ攻入ルモアリ、或ハ小野ノ庄勸修寺ヲ通テ、七條ヨリ入ルモ有リ、○太平記云、阿彌陀ノ陣取タリシ、阿波淡路ノ勢千餘騎ハ、未ダ京中へハ入ラス、泉涌寺新熊野邊迄下テ、○無題詩、山家範月釋蓮禪阿彌陀ノ嶺幽棲ノ地、月屬佳期明也明、云云、○藤氏系圖、資基從五下散位出家、法名蓮禪、木工ノ頭正五下通輔ノ男、○家集、今よりはあみたか嶺の月影を千代の坂まで頼むへきかな 公任○懷中「道えけくさはりおほかる身なれどもあみたか嶺はゆかんとを思ふ 讀人不知

○妙法院在滑谷道ノ南大佛殿東天台日吉門跡、

妙法院門跡次第云、相命法印、妙法院又妙香院、權大納言藤原俊宗卿ノ息、○釋家官班記云、二品親王尊性、後高倉院、御子、山妙法院、承久三年十月三日叙、○或記云、妙法院者後白河、法皇皇居之地也、其、後法住寺御所時、被附妙法院昌雲大僧正、故號皇居御門跡云云、後高倉第一ノ皇子尊性法親王初叙ニ二品、是山門初例也、○太平記云、妙法院白河殿門主ハ、御心早ク、後、小門太平記西源院本ニ北門云云、ヨリ徒跣ニテ、光堂ノ中へ逃入セ給フ、云云、○按、妙法院白河殿、建仁寺東光堂邊歟、○妙法院三品法親王家、八月十五夜十五首歌合に、待十五夜月、草庵「かねてよしまたる、秋の半かはちりてや月の出かてにする 頓阿○妙法院月次會に、園塵「野へにぬる小萩やをのか草枕 兼載

○日嚴院在妙法院西、開基山門西塔相顯、

康富記云、日嚴院、妙法院之脇門跡、○新日吉今坐妙法院南側、或曰當社、應仁中過半破壊、又豊國ノ社勸請ノ時、悉以破壊、其後妙法院變然法親王再造之、舊地、豊國ノ社、中門石壇、南云云、

公事根源云、永曆元年十月十六日、後白河院日吉の御体を、東山の新宮にうつし申さる、諸社肥前是を新日吉といふ、應保二年四月卅日始て祭有、○續世繼云、ひえなどをいはいはひすへたてまつらせ給、○妙法院門跡相承次第云、昌雲大僧正、新日吉檢校、此時○百練抄云、承元々年四月廿七日、上皇御幸新日吉社、○明月記云、建永元年五月廿八日、今日新日吉小五月云云、○帝王編年記云、文永五年五月九日、新日吉小五月會、兩院御幸、○百練抄云、寶治二年四月卅日丁未、新日吉祭也、○新日吉社の松屋のまへのかえての木の、右兵衛督光能植置て侍けるに、競馬のことをこなふとて、思ひつゝけ侍けり、後拾遺「うへをさし昔をさらに頼むかな残る梢のけふの下かけ 從三位光成

○新日吉社にて詩歌合し侍ける時、山居夏興、新千載「空にのみ猶をとつれて時鳥我るる山の雲に鳴なり 祝部行親

○今比叡 新日吉同所歟、○著聞集今比叡、辻、梅松論云、敵木幡山稻荷山ヲ經テ、今比叡ノ上河彌陀カ峰ニ陣ヲ取ル、

○諏訪社

普光院殿御元服記云、正長二年三月九日御元服十一日、諸社神馬 上七社 伊勢内外、石清水、鞍馬、賀茂下上以下馬計

大原野 諏方 新八幡 六條、篠村、御所、鎮守 五靈社

此外、日吉七社神祇官以下、神馬目錄、別帶有、○應安元年(義滿公)御元服、記、此外加北野、祇園、吉田

難太平記云、其比大御所尊氏卿ハ東寺ノ御陣ナリ、先皇ハ山門ニ御座也、四方ノ口々ヲ宮方ヨリ閉シカハ、味方兵糧難儀ニテ、東ハ關山阿彌陀カ峰、南ハ宇治路、西ハ大江ノ山、北ハ長坂口ナ

トニ、連々大將ヲ遣テ破ラレシニ、故入道殿範國阿彌陀カ峰ニ向テ、諏訪新比叡ノ前ニテ戰有、

○得長壽院 拾芥抄云、鳥羽殿三十三間、十一面千一體、

帝王編年記云、長承元年二月十三日、太上天皇、御願、得長壽院 三十三間、御堂、二千一、體、觀音、(十一面、像) 供養、○得長壽院供養次第云、上皇御幸入、御自北門、經堂、北面、○百練抄云、上皇臨幸、備前守忠盛進之、○盛衰記云、得長壽院鳳城、左、鴨河、東、導師天台、座主東陽房忠尋僧正、土佐守忠季男、保延、四十四入寂、云云、彼寺、異名ヲハ平愈寺 平家長門本、云、平愈堂、ト申也、導師祈願、句、衆病悉除身心安樂、ト唱へ給タリケルカ、其聲京白河ニ響キケリ、洛陽ニ上下男女二萬三千人、病愈タリケルニ依テナリ、○東鑑云、越後國佐味庄、鳥羽院十一面堂領、同國大面、庄鳥羽、

○十一面堂領

兵範記云、仁平三年四月廿三日、於得長壽院有楊柳觀音供養、御幸、兩院御同車、大僧都有觀爲導師、○朝野群載云、太上天皇、鳳城之左鴨水之東、建三十間之精舎、安一千軀之觀音、殊擇良辰、設齋會、天承二年三月十三日

○蓮華王院 拾芥抄云、後白河院、御願、千手千一、體、號新千手、云云、在鴨河、東七條、南、○堂、長六十四間、一尺八寸六分、緣幅三尺三寸、

帝王編年記云、長寛二年十二月十七日、上皇、御願、蓮華王院供養、三十三間、御堂、○元亨釋書資治表、千一、體、千手、云、十二月廿二日、導師尋範云云、○百練抄云、准御齋會、有行幸、○平家物語長門本云、白河院、蓮苑、僧正行慶、皇子、三井、門流無雙、有智德行、人也ケレハ、法皇眞言ノ御師ニテ御坐マシケルカ、此御堂、蓮苑、千體ノ中尊ノ丈六、御面像ヲハ、手自顯サレタリ、○續世繼云、千體の千手觀音の御堂、蓮花、建させ給て、天龍八部衆など、いきてはた

らかすといふ計こそ侍なれ、鳥羽院の千體の觀音たにこそ有難聞え侍しに、千手の御堂こそおほろけの事ともきこえ侍らね、○佛工系圖云、中尊、大僧正行慶、小佛師康慶法眼、康永法橋也、左右、一千體、内三百體、餘二人彫刻、其餘、六條萬里小路七條大宮、佛所等奉造、又二百餘體並廿八部衆、東寺佛師職備中法印運慶定朝六代孫、康慶子、造之、寶治炎上之後、建長三年七月廿四日、法印大和尚位湛慶奉詔、奉造中尊、○增鏡云、建長元年三月廿三日、百練抄、帝王編年記等、寶治二年閏十月二日云云、火いてきて蓮花王院の御塔に燃つきけり、三十三間の御堂の千體の千手、一時にはのはにたくひ給へば、不動堂、北斗堂も残らず、寶藏鎮守はかりをからふしてうちけちにける、云々、文和二年卯月百練抄云、建長三年八月十日、上棟也、云云、に蓮花王院供養、行幸龜山御幸一院、後嵯峨、新院、後源草、女院、大宮、あり、御導師聖基僧正、御願文の清書、經朝の三位、額のかの建はしめられし長寛に教長かきたりけるか、燒さりけり、此度もそれを用られける、

○塔

帝王編年記云、治承二年十二月十七日、上皇、御願蓮華王院、中建立五重塔、供養有行幸、百練抄云、治承元年十二月十四日云云、

○不動堂

兵範記云、仁安二年六月十六日壬午、今日院、御所法住寺殿、不動堂供養、御導師公顯法印、讚衆一十口、百練抄、同之、系圖、慈俊蓮華王院不動堂、執行、

○北斗堂

百練抄云、壽永二年十一月一日、蓮華王院、内、北斗堂供養、

○惣社

諸社根元記云、仙洞法住寺殿御鎮守、號蓮華王院、惣社、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生、貴、原野、大神、石上、大和、廣瀬、龍田、住吉、布禰、日前國掛、熱田、伊都岐、氣比、已上廿五社、○百練抄云、安元々々年六月十六日、蓮花王院、惣社鎮座、八幡已下廿一社、其、外日前、宮、熱田、嚴崎、氣比等、社、本地御正体、圖繪、像、但日前、宮、熱田、御本地、無所見、仍唯被用鏡、又云、同十月三日、蓮華王院、惣社祭、公卿侍臣僧綱等、騎進馬長有相撲御神樂、自今年所被始行也、試樂後宴、

○寶藏

百練抄云、建保元年九月十六日、上皇御幸蓮華王院、爲御覽、寶藏、御佛等也、○位の御時、蓮花王院寶藏より、あしたつといふ筈を出されて、年久しくをかせ給へりけるに、正安三年の夏の比、法皇へ奉らせ給ふとて、思召つ、けさせ給ける、玉葉、雲より年へてなれし蘆たつのかへる別れに音をそへつる、院御製

○醴泉

元亨釋書云、永萬元年六月七日、醴泉涌蓮花王院、西、砌、今尙爲甘井、○百練抄云、永萬二年八月、云云、○著聞集云、永萬元年六月八日、蓮花王院承仕か夢に、後戸の坤の角より北へ、第四の間に黒き山ありけり、岑よりやんとなき老僧出來て云、抑此水を何の料に堀そ、此水の細みゆれども、八功德水、甘露利益、含識方便水にてあらむすると、よく、精進して汲へきなり、と云と見て

夢覺にけり、去程に、件、後戸の石切の下に、現に水ありけり、貴賤汲けれども盡さりけり、又くまぬ時もあまらさりけり、不思議なりける事なり、當時その水見えず、いつころ失けるにか覺束なし、

○七條殿

山槐記云、永曆元年七月十三日己丑、今日仁和寺、宮院御子、高倉、三位、出家、之後、始參院給、七條河原山院、御所、座主、房爲○又云、應保元年八月六日丙午、參院、七條末上院、御所、御所○吉記云、安元二年四月廿七日壬寅、今日院登山御幸也、午、刻出、御七條殿、女院、御棧敷爲、御見物、出、御馬場門、供奉、公卿侍臣或南殿或於、蓮華王院、邊騎馬、○百練抄云、治承元年四月八日、法皇、御所、七條殿、内、小御堂供養、○寶物集云、建春門院、七月八日に隠れさせ給ひしかり、法住寺の七條殿のありさま、あらぬ事になりて、

○新御所 吉記云、中之新御所

吉記云、壽永二年二月廿一日、丙辰、今日朝覲、行幸也、其、路中畧至于七條大路東行、至河原更北行、至于北小路末、東行、至于新御所、西大路、本御所、馬場也、今爲大路南行東折、院於御棧敷、御見物至于法住寺、西大路、口馬允列、北門、南程也下馬入西南門、

○齋藤カ辻

太平記金勝院本云、貞範則祐六騎、法性寺大路へ掛通、齋藤カ辻ヲ上リニ、七條、車大路迄燒拂テ、北小路河原口ノ念佛堂ノ前ニ控ヘテ、事ノ躰ヲソ窺タル、

○法住寺

拾芥抄云、法性寺、北、故老云、舊跡今爲田島蓮華王院、巽一町許有、名水、號桐井、傳云、爲光公、第、井水、邊、多植桐、云云、此、井第宅、跡歟、

扶桑略記云、永延二年三月廿六日、從一位右大臣藤原、朝臣爲光供養法住寺、五間、堂舎一字安置金色丈六、釋迦如來、像、結跏於中央、金色、藥師、觀音、延命、如意輪、列座左右、更刻六尺之像、又法華三昧堂一字安、普賢菩薩、西面常行三昧堂一字安、彌陀世尊、百練抄、以呂波字類抄、○榮花物語云、一條のおほきおと、爲光、の、正曆三年六月十六日に失させ給ぬ、後の御いみな恒徳公ときこゆ、女御姫子の御のちい、た、法師よりもけにて、よと、もに御をこなひにてすくさせ給ふ、法住寺をいみしうめてたく造らせ給て、明暮そこに籠らせ給てを、おこなはせ給ふ、○山槐記云、久壽三年正月七日、乙酉御方違、行幸、法住寺入道中納言、東堂御祈願寺也八條東行、河原ヲ斜折、北、向良、八條坊門、末、堂、西門入御、正月五日丁未、枇杷殿、前自門至于御堂、其、間爲池、仍被構浮橋於池上、十餘丈、○兵、○無題詩、秋、日遊法住寺、上方、藤明衡花洛、東南翠嶺、頭、一尋、蕭寺得優遊、山南雲撥斜陽透、巖逕葉飛片月幽、嚴飭空知蓮府、昔、闕伽自供菊裝、秋、○榮花物語云、萬壽二年中納言長家のうへ齊信女うせ給ふ、九月十五日の夜を、法住寺にゐて奉りて、廿七日におさめ奉る、御いみのほとは、誰もそこにおはしますへきなり、○長家卿、御堂殿、男、○大納言長家、大納言齊信の女に住侍けるに、女身まかりにける比、法住寺に籠りゐて侍けるに、つかひしける、千載、かなしさをかつ、思ひもなくさめよ、誰も終にいとまるへきか、大貳三位、返し「誰もみなとまるへきにあらねどもをくる、程、猶そかなしき、長家○二月晦日、かた物に詣つる、道なる法住寺の櫻みんとて入れたれば、花もまた咲さりけり、あたりし僧のありし、問ひするもな

し、家集「咲ぬらし櫻かりとてまいれともこの木のもとの主たにもなし 和泉式部 ○盛衰記法住寺合戦段云、河内守光助弟ニ源藏人仲兼ハ、南門ヲ防ケル云云、主上モ法皇モ皆此御所ヲ出サセ給テ、他所へ御幸成ヌ、今ハ何ヲカ守護シ進スヘキトテ、河内守ハ東ノ山ニ引籠、山階へ出テ、醍醐路ニ懸テ落ニケリ、源藏人ハ法住寺ニ出テ、南ヲ差テ落行ケリト、云云、○按、法住寺殿被自南殿南ノ方ニ有ケレト見ユ、

○法住寺殿 ○按、此御所東ハ五坂、西ハ大和大路、南ハ八條、北限ハ七條歟、○盛衰記云、御所、東五坂、八條カ末西表ノ門、御所、中ノ新御所等アリ、七條カ末北ノ門、西大和大路、西門等アリ、此内御殿多シ、東殿、南殿、西ノ御所、北ノ御所、蓮華王院坂アリ、側ニ又御所ノ井ト號スル井有ト云云、按、南殿ノ舊地歟、

山槐記云、永曆二年四月十三日乙卯、今日院有御移徙于法住寺、件ノ殿ノ四郭毀、籠十餘町、其ノ内堂舎又云、應保元年八月二日壬子、今夜院法住寺、西ノ御所ニ御渡、又云、同八月十四日甲子、參院、法住寺ノ御所、○百練抄云、承安三年四月十二日、上皇、御所法住寺北殿號堂、燒亡、同十月五日、上皇并建春門院御移徙新御堂、御所、○平家物語云、十郎藏人行家ニ、法住寺殿、南殿ト申葺、御所ヲ給、○兵範記云、仁安三年正月六日、春宮爲朝親行啓、于時御坐東山、東殿、上皇又於法住寺被儲其儀、○吉記云、安元二年四月二日丁丑、今日院、法住寺殿、内東南ノ山上、建立九間三面、精舎一字、美作守雅隆朝臣遣進之、安置千手觀音像廿八部衆等、有供養、于手陀羅、百練抄、尼經云云、同之、○盛衰記云、養和元年閏二月廿五日、法住寺殿へ御幸ナル、此御所ハ、應保元年四月十三（五）日御移徙云云、又云、同十二月十二日、院、御所、御移徙アリ、本ト御座ケル法住寺殿、御所ヲ壞テ南ニ渡シ、千體御堂ノ傍ニ被造テ、片方ニ女院ナント居進セテソ住セ御座ケル、又云、壽永二年七月

廿七日、法皇天台山ヨリ還御、蓮華王院ノ御所へ入セ給フ、長門本、同之、○吉記云、壽永二年七月廿八日庚子、參院、蓮花王院于、時諸卿參集南、御所、殿上、廊云云、予云、於南殿者暫不可被行歟、出御之後、未還御之故也、中、新御所可宜歟、

○南殿

百練抄云、仁安二年正月十九日、上皇御移徙法住寺、南殿、件、御所元壞、渡テ故、信賴卿、中、御門、屋被立之、而依狹少、周防守季盛所造進也、○吉記云、壽永元年八月十三日、今夕前齋宮行啓、東山南殿、院御所○百練抄云、壽永二年十一月十九日、左馬、頭義仲、率軍兵、寄政院、御所、寺南放火、官軍敗績、法皇駕輿、出御北門、渡、御新日吉、義仲、兵亂入、公卿殿上人各逃去、○嘉應二年、法住寺殿の殿上の歌合に、關路落葉と云心を、長秋詠藻「いろ／＼の木葉に道もうつもれて名をさへた」とる、あら河の關 俊成

○後白河院法花堂 今蓮華王院、東有御影堂、號法住院、毎年三月十三日有開帳、

歷代編年集成云、建久三年三月十三日、崩、御年六十六、同五日丁亥、奉葬蓮花王院、東法花堂、號後白河院、百練抄、同之、○帝王編年記云、建久四年三月九日、蓮花王院、中奉爲法皇周忌御法事、建立一堂、供養也、丈六、阿彌陀、三尊并不動尊等安置之、○又云、正元々々年十月二日、公家被獻御書於山陵、法住寺、後白河院、後鳥羽院、法花堂、大原、法花堂、○青蓮院門跡次第云、道玄准后、法勝寺、蓮花王院、最勝光院、并後白河院法花堂別當、○後白河院かくれさせ給ひて、又の年法華堂にまいりて、聞法年久といふことを讀ける、續拾遺「法の雨ありし昔のかりねと千年ふるとも絶しと思ふ 祝部宛仲（充）」○法皇かくれ

おのしまして、詞畧法花堂御幸夜よめる、拾玉鳥部山煙の下にみつるかな一かたならぬ人のなけきを 慈鎮

○最勝光院拾芥抄云、法住寺、建春門院

百練抄云、承安二年二月三日、建春門院法住寺御願、上棟最勝光院是也、兩院臨幸、件地元是故、顯長卿、母堂之地也、件堂壞渡他所、三年十月廿一日、供養有行幸、帝王編年記云、御導師與福寺權僧正覺珍、又云、同年十二月廿四日、最勝光院、内小堂供養、○又云、治承二年十二月十二日、最勝光院、内御塔被立、心柱、○山槐記云、治承三年三月五日癸亥、御方違行幸七條殿、先々幸法住寺殿、而最勝光院、南御所、南門有穢、引來法住寺殿云云、十月廿五日己酉、今日中納言師家拜賀云云、參院給、最勝光院御所、○明月記云、嘉祿二年六月四日、南方有火、最勝光院云云、土木之壯麗、莊嚴之花美、天下第一之佛閣也、惜而可惜、悲而可悲已矣、云云、南西之諸門半作破損、塔不燒、云云、今熊野依程近、雜人等群參、滅得云云、○さいちやう光院にて、御月きはしまりしにまゐりて、雨のふりしに晴て、月のおほるなるをなかめて、高倉院昇震記よそへつゝなかむる月も朧にて雲かくれにし君を戀しき 土御門内大臣

○新御堂御所

百練抄云、承安三年十月五日、上皇并建春門院御移徙新御堂御所、

○新法花堂

百練抄云、安元二年七月八日、建春門院崩御、母后、帝葬新法花堂、平生所被造營也、但未作事

等臨期終其功、○又云、同年八月廿五日、故、建春門院、法花堂供養、

○柳原今三十三間堂南有民村、號柳原、庄、此所堂上柳原殿、領云云

盛衰記云、木曾六條河原へ出タレハ、七條八條河原法性寺柳原ニ、白旗天ニヒラメキテ、○平家物語本長門云、敵ステニ最勝光院柳原迄責近ツクト聞エケレハ、

○瓦坂在柳原、庄、東、從是醍醐勸修寺等有道、俗ニスベリ石越ト云リ

江談抄云、緒嗣大臣、家、在法住寺、北邊瓦坂、東、○盛衰記云、法住寺合戰一手ハ今井四郎兼平三百餘騎ニテ、法住寺御所、東、瓦坂ノ方へ搦手ニ廻ル、○平家物語本長門云、法住寺殿へ參けるに、七條河原より夕立して、雷おろし、鳴けるか、柳原瓦坂の邊にて、殊の外夥敷く鳴る、下畧○瓦坂歌合に、林葉和歌集ことならひまた夜をこめて朝た、ん山ちのほとを送れ月影 俊惠

○新熊野社坐三十三間堂、東南、當社鳥居、昔ハ南ノ方ニ有シト云リ、今泉涌寺、三町許、祭十月八日、道落橋ノ東ニ鳥居崎ト云所アリ、此所ト云云

百練抄云、應徳二年三月四日、熊野新宮遷宮日時定也、今日神寶御覽也、敕使權中納言清盛卿參内、給宸筆、宣命、又有御拜、被準太神宮例、○又云、應保元年十月十六日、奉移熊野御休於新造社壇、今熊野是也、上皇御願也、○歷代編年集成云、應保二年壬午、今年太上天皇被奉崇新熊野、三月十日、被立熊野勅使、權中納言清盛藏、帝王編年、人治部大輔行隆、記同之、○兵範記云、仁安二年五月三日、上皇令參籠東山新熊野給、○平家物語本長門云、養和元年二月廿五日、法住寺殿へ御幸ナル、此御所ハ、應保元年四月十三日、御移徙有テ後、山水木立カタクノ御シツラヒニ至迄、思召ヤウニサセマシツ、新日吉、新熊野、其近邊ニ祝奉ラセ給、○續世繼云、後白河くまのをさへうつし

て、宮こに作らせ給へらんことを、とをくまいらぬ人のためも、いかにめつらしく侍らん、○相國寺御塔供養記云、後白河熊野御參詣の、三十餘度にも及しやらん、御信仰の餘りに、今熊野を勸請し申さる、法皇の御前生、本山のさいとうたき(柴灯燒)とかやにて、わたらせ給ける故に、かやうに有けりとも申侍り、○應仁記云、新熊野二三所宮、十二所權現、透廊ニ、神樂乙女の並居タル、玉葉、夜もすから佛のみなをとなふれのこと人よりもなつかしきかな 是は、徳治三年の春の比、新熊野に本山の衆ともうつりて、をこなひなとしけるに、或人箒をひきて、手向奉らんとしけるかたに、高聲念佛を申人の侍けるを、いとしくおほえて、うちまどろみ侍ける夢に見えけるとなん、○康富記云、康安元年九月廿三日、寶篋院殿令引籠今熊野給、清氏主上同行幸彼社、廿四日還幸、太平記云、今熊野ニ引籠一ノ橋引落シテ、所々ニカイ楯カキ云云、後愚昧記云、康安元年九月廿三日、將軍出宅没落今熊野、○百練抄云、嘉應二年十一月廿六日、今熊野社、内法花堂、九体、阿彌陀堂炎上、元、是經敏カ堂也、○黒谷上人傳云、長門守高階經敏、長門、法印敏覺、經敏、男也、補東大寺、別當、翰林五鳳集、溪寺看梅、往主人、溪中尋寺向殘春、逢着大梅賢主人、老我對花多愧色、出紅塵又入紅塵、○院廳下新熊野所司等狀云、熊野權現者日域第一之靈社、鎮護國家之仁祠也、和光之月無陰、利生之風鎮扇、因茲去永曆年中之比、禪定仙院凝丹誠之叡慮、摸本社於洛都、以散在庄園、被寄進彼佛聖燈油料云云、養和元年十二月八日、主典代織部正大江朝臣○院廳定置新熊野社、條々謹奉、叡旨俯當社權現者訪、洪基於南海、之風、建近宮於東山之月、本山、臨幸、三十四度、先蹤雖少、叡襟、惻篤、千萬、念精、誠猶餘、仍就此、新祠、頌企、參籠、前後相并、百五十餘度

也、云云、建久三年正月日○夫木 今熊野百首ひとしほのみどりのほかも色やとふ花さく春の藤代の松 安嘉門院四條○おちの高ねにかすむ杉むう 友傳抄「瀧見ゆる稻荷もちかし今熊野 朝定

○慈恩寺 幻居山人隨筆云、大應、今熊野海印國師

和漢禪刹次第云、寶山禾上、諱乾丘、嗣廣照、相國、玉潤軒、今熊野慈恩寺、西山、法久院、○等持院殿、息日、慈恩寺、殿、慈恩寺、殿、孫寶山、云云、○永享日録云、永享九年四月廿九日、慈恩寺御成、

○智蓮光院

○永安

臥雲日伴録云、寶渚雲章少年、親炙于仲芳、爾後岐陽仲芳、サカフ鹿苑相公、鈞旨、隱居今熊野、永安、

○瑞雲菴 新熊野見子應永五年八月十八日文書

○月輪殿墓 明月記云、文曆二年二月廿七日、御絶入一、御佛事於月、輪殿可被修、御墓所又其、近邊云云、又云、月輸入道殿、御墓長嚴僧正之料、今熊野公修贈僧正、山房、跡

○觀音寺大路

明月記云、天福二年七月十一日、上皇、姫宮天亡了、今夕御路六條河原、出、最勝光院、南、觀音寺大路也、○又曰、天福二年八月六日院崩、十一日御名後堀川院、云云、奉葬觀音寺、今夕御路六條河原ヲ出、最勝光院ノ南ヲ觀音寺大路也、

○觀音寺

拾芥抄云、(三十三所)内、在泉涌寺、内北側、世曰、今熊野觀音、按、元泉涌寺

等身千手、山本左大臣、

同寺歟、凡此邊、山本左大臣緒嗣公第宅地也、

璫囊抄云、觀音寺等身千手在洛外今熊野、與弘法或云、弘法大師當山建、草堂、刻影大悲、像安置、其後山本左大臣被遣、營加蓋僧房、應仁、兵亂加蓋僧房等破壞、云云、

○江談抄云、緒嗣、大臣、家在法性寺、北邊、瓦坂、東、仍號山本、大臣也、故、治部卿大納言被命畢、公卿、記在法住寺、異、今、觀音寺是也、○山槐記云、治承四年三月廿二日、今日猶禮百塔、殘廿八基、云云、午、刻於觀音寺先妣、御堂、羞饌、○又云、同年九月七日、依母堂、御忌日、向觀音寺、○東山觀音寺といふ所にて、藤花いとめてたかりしに、家集「ひたすらに今も昔も忘られて心にかゝる藤の花かな 修理大夫顯季、○修理大夫顯季、觀音寺の藤花さかりなりと聞て、まかり侍けるに、さそいれけれい、まかりてよめる、散木「吹風に藤江の浦をみわたせハ波ハ木末のものにそ有ける 俊賴

○左大臣雅信公室墓諱種子

榮花物語云、かくて九月に、あまうへくはんおんしといふ所におはしませ給、うへのおまへも、御をくりにおはします、さてそこにさきさまに、おさめたてまつらせ給、○母の身まかりけるを、九月はかり觀音寺といふ所をくりをきて、又の日よみ侍りける、玉葉「あらしふく深山の里に君をさきて心もそらにけふの歸りぬ 從一位倫子

○師尹公墓

日本紀略云、安和二年十月十五日己丑、左大臣正二位藤原師尹薨、年五十、十七日辛卯、葬左大臣於東山觀音寺、西、岡、

○三宮墓

長秋記云、元永二年十一月廿八日、三宮已、非常、給、云云、十二月五日、參七條宮、今日御葬送、云云、美濃權守忠宗爲山作所、行事件、所觀音寺、北邊云云、

○公教公墓

山槐記云、永曆元年七月九日乙酉、内大臣公教薨、十三日己丑、今夜内府、葬送觀音寺、

○後堀川院法花堂

帝王編年記云、天福二年八月六日、戊、時崩、御歲二、同十一日奉葬觀音寺、號後堀川院、○百練抄云、文曆元年九月十日丙午、故院、五七日御佛事、北白川院、御沙汰也、今日御隨身左近、將監久清、奉爲先院、於法華堂、修小善、諸卿參會、大藏卿爲長卿書御願、旨趣、○平戶記曰、後堀川院法花堂、前山庭狹、故被引、

○泉涌寺

拾芥抄云、仙遊寺觀音

○或云、當山、左大臣緒嗣、(號山本左大臣)爲神修上人、建立、號法輪寺、其後行

元亨釋書後傳云、建保六年和州刺史朝散大夫中原信房、以仙遊寺、與苾居、

此寺、齊衡三年

左僕射緒嗣所建、云云、初名法輪、後改仙遊、苾又改泉涌、洛東、勝區也、經數百歲、廢頽尤甚、苾便作化疏、奏元曆上皇、降施甚渥、貞應三年七月、勅黃門侍郎通方、上爲官寺、云云、台律、二宗、指泉涌爲中興、○從五位下大和守信房、見○又云、將來、十八羅漢、像者、開化寺、比丘尼正大師之所施也、○正法國師傳云、國師諱俊苾、字我禪、嘉祿三年閏三月七日逝、應永間、後小松帝勅賜大興正法國師號、○造泉涌寺勸進疏云、今於京輦之東南仙游、今改、泉涌之舊基、力穿山陵、填夷深

壑將剝締構建造精舍、然則三門兩廊、連棟周接、佛殿法堂重簷中立、僧堂庫院左右相對、觀堂
 教庠前後分措、鐘樓經藏祖堂方丈、真言院、羅漢殿、闔寺、都盧三百餘間、營造浩濳、草剝巨大、云
 云、○承久元年十月日、跡、幹、比、丘、部、勸、緣、新、入、宋、學、法、比、丘、後、傍、○南方紀傳云、應永三十二年九月十日、上皇泉涌寺に御幸、○薩戒記
 云、應永卅二年七月十二日、詣東山泉涌寺、彼寺者律宗也、開山俊祐法師、立禪律二宗、偏爲公
 家御寺、後光嚴、後圓融、兩代御陵、在此寺中、又有御影、云云、惣門額云、東山不、山門、額云、泉涌寺、
 堂有二層、上奉安置、楊柳觀音、此觀音自天竺所奉、渡之佛云云、佛殿在法堂後、已上、○無題詩遊仙遊寺、惟宗孝言、仙遊寺靜出、樊籠、眇々高低望不
 窮、云云、○文龜元年九月廿一日、東山の御寺にまいりて、ありし山作所の跡ををかみたてま
 つるとて、家集「おも影のこゝもかしも立そへと煙の跡の野邊をみにしむ 道堅」○泉涌
 寺にて侍し會に、「雪ふるく水わく谷の岩ねかな 能阿」

○舍利殿每歲九月八日、行舍利會、

聞陽律師傳云、律師名、湛海、字聞陽、正法國師之門人也、嘉禎末入宋、白蓮寺有佛牙、秘之內
 院、師聞之、特造瞻禮、師生難遭、想及歸國常念佛牙不置、且有志欲修白蓮寺、乃謀之樂
 善士、掄佳木、載于舶、再至其寺、命工經營殿宇、不日而成、合衆感戴、師云、願奉此佛牙歸
 樽桑、以福國人、長老建公樂然與之、○園太曆云、延文四年三月十二日、修臨時舍利會、當時佛
 舍利名聲、被世利益異他、式舍利會者、每年九月也、

○觀音堂在本堂西北、寬文五年、東福門院御建立、此像元、安置、棧門、上云云、

觀音緣起云、此尊、玄宗皇帝創一伽藍安置、勅賜補陀海山圓通寶閣額、云云、然經、星霜、殿宇零

落、湛海入宋時、渡本朝、云云、玄宗勅額、今尙在泉涌寺、

○四條院陵

著聞集云、四條院仁治三年正月九日刁、尅に、御歳わつかに十二にてかくれさせ給、廿五日、御葬送な
 り、其夜泉涌寺のうへの山に納奉、○増鏡云、四條院仁治三年正月九日廿五日東山泉涌寺とかやいふは
 とりにおさめ奉る、四條院と申なるへし、やかて彼寺の御庄などよせて、今に御菩提を祈り
 申侍る、○類聚大補任云、仁治三年正月廿五日丙申、四條院御葬送月輪、山庄我禪、坊、○帝王
 編年記云、寬元二年正月九日、奉爲四條院於觀音寺被行御入講、今日御國忌、

○後光嚴院御廟

薩戒記云、應永卅二年九月十日、今日上皇御幸東山泉涌寺、云云、佛殿已下所々歷覽、於二代御

廟後光嚴後圓融、各有御影、御燒香、

○後小松院陵

康富記云、山陵使後白河院法住寺後深草院深草法花堂後小松院泉涌寺、○後小松天皇昇霞記云、舊院御事
 かきりあれい、神無月廿日といふに、つゝに御事侍り云云、かくておなしき廿七日の、またよ
 ひのほとに霜かれの芝の砌を出したてまつりて、東山泉涌寺といふ所へ、御幸なしたてまつ
 る云云、後小松院と號し奉るよしきこえしかい、「はかなくもつゝに朽木の小松原なにかい
 千代のかけを待けん 藤原雅縁

○後土御門院御廟

○後栢原院御廟

二水記云、享祿四年四月七日、聖忌參泉涌寺拜御廟、後土御門院、御廟椿、先皇、(後栢原)御廟松也、法塔、東椿、西松、

○塔頭雲龍院、在泉涌寺中門內東南、後光嚴院、後圓融院、後小松院、御廟在後山、每年自四月廿日至廿九日、修如法經會、是則後圓融、後小松、兩帝御道薦也、康應元年、令聖皇上人、被始行之云云、

雲龍院開基竹巖聖皐律師傳云、律師諱聖皐、字竹巖、嘗擇地創建律院、曰龍華、曰雲龍、應永九年六月廿九日化、○薩戒記云、應永廿二年參雲龍院奉拜兩代、之御影、着御小直衣御、雲龍院者為公家、御塔中、○二水記云、享祿四年四月七日、詣雲龍院、舊黑戶、御殿是也、○如法寫經後圓融院、敕書、如法寫經者、朕至二十有餘歲、命聖皇上人、於龍華院、每年不闕、始置彼、寫經之勤行、為朕逆修云云、料所播州伊庄、康應元年十月、○同後小松院、敕書、泉涌寺、別院龍華雲龍者、後光嚴、後圓融、兩代、上皇臨幸、尊崇無雙、靈場也、朕特立一ヶ、大願、凝永世、叡懌、既為三代叡歸、之勝地、應永二年十一月日○雲龍院にまゐりたりしに、思ひ出る事おほくて、雪玉集、それならぬ袖をそまほる墨染の黒戸の御戸のみし世なからに

○塔頭安樂光院、元在西洞院上立賣、北、俗ニアンナン小路ト云所也、今遷泉涌寺方丈西、側、本名持明院、青蓮院門跡次第云、道立准后安樂光院、檢校、○長興宿禰記云、安樂光院九品阿彌陀、像、○伊呂波字類抄云、持明院或書云、承曆四年十月、阿闍梨五口申置之、西、京、座主良真、件、日供養為御願寺歟、○薩戒記云、正長元年八月十七日、被行稱光院五七日、御法事、七僧法會也、參安樂光院、

云云、室町北行自武者、小路經三許町、有橫小路、西行一町路、北、有御寺、西大路面有西門、御堂、東面々七間、此外有南北、底、九間相、加東西、底、奧五間、安置九体、阿彌陀尊像、佛壇、并柱等皆摺貝、天井有金銅金物、云云、擬淨土、九品、有二十八柱、揆四十八願、○洞院大納言實信卿記云、安樂光院事大藏卿通基建立也、但於根本、草創者、為父基賴本願、當初去康和年中、廓內、持佛堂建立一字、草堂、其時以彼、院宇號持明院、其、後送年序、不及周備、去保安三年、基賴逝去之後、彼通基朝臣、天治年中、更揚虹梁之構、終成風之功、奉安置西方九品、聖容矣、大治五年遂供養演齋苑、云云、其、時供養、日、鳥羽院臨幸之由、雖有記錄之說、未及分明、勘決也、其後以持明院、號為一家之稱號、以彼、佛閣之號、令改稱安樂光院了、改彼、寺號、年月無分明、所見也、抑持明院、曩祖中納言基家卿、息女、陳子、北白川院依為後高倉院、正妃、就彼、所緣、御寄宿于持明院、私宅、及多年、世、人奉、號、持明院、宮、爰俄承久擾亂之刻、依關東、舉奏、以彼、後高倉院、皇子、後堀、川院奉備大位了、其、後彼、後堀川、院、御子四條院、相續御繼體登極之時、後堀河院脫履之後、同以持明院、被成仙居了、其、後四條、院、俄崩御、於此御流不繼體、御器用、御、イハシマ後嵯峨院登極、已來、彼持明院、私宅、自然為代々、仙居者也、仍、數代、祖皇、御國忌御願等、久於安樂光院、被修之、去觀應二年、南朝與武家御和睦之時、同三年、觀應三、文、和元也、春依南朝、聖斷、持明院四主、其、時、本院、光嚴院、新院、光明院、主上、悉被奉遷南方、忽當朝無主、其年、八月、舊院後光嚴院踐祚、被改年號於文和了、然而其、時分、持明院殿、御舊領等、事、廣義門院為御成敗矣、其、後文和二年二月四日、持明院殿炎上之後、彌近邊荒廢了、安樂光院一字雖相殘、更無莊嚴法施之人、四壁崩倒為牛馬之牧、本堂破壞任雨露之貫、棟梁忽令傾危、本尊已及盜失、仍去延文中、依廣義門院、令旨、被仰永圓寺、誠蓮上人、以當寺擬律

新加通記第十八 山城名勝志卷十五

院、可開基再興云云、仍即彼上人、致栖掃修治之興隆、屬一向專念之勤行、不退轉經年序了、但代々根本御願等、猶於當寺被修之也、藤氏系圖云、倭經從四位下中務大輔、道世、北京律號誠蓮上人、安樂光院再興祖。○著聞集云、持明院になつめ堂といふ堂あり、淡路入道長蓮か堂也、○康富記云、應永廿九年十二月十六日、己巳爲御方違、仙洞安樂光院御幸也、

○塔頭保安寺 元在伏見保安寺村、今大龜谷五郎太町是也、今遷泉涌寺、内、南側楊柳寺、西。

椿葉記云、觀應二年十二月廿八日、この日、光明院俄に御出家あり、御發心ときこゆ、其後伏見のほうあん寺にて、禪衣を着まします、紹運錄云、御戒師泉涌寺了寂上人。○世をのかれて後、保安寺に住ける比、その寺の長老かくれ侍りければ、讀侍ける、新葉集「残りゐて思ふもかなし法の道尋しときはをくれやのせし」 祥子内親王

○塔頭新善光寺 元在一条大宮、今遷泉涌寺、内、北側永圓寺、東。 信州善光寺、如來安當寺、勅賜新善光寺、後柏原院爲再興、本願緣起云、寛元元年八月、願主念西觀進沙門值願名一房、善光寺如來像を誘摸し奉り、結緣弘くな

さしめんと、後嵯峨院に奏し奉りければ、勅命を下して、則大工藤井爲行小工沙彌教佛に命じて、尊像を鑄摸奉り、一條大宮に一字の精舎を建立し給、新光善寺と號、應仁の大亂に炎燒す、其より此かた、寺を泉涌寺へうつし、像を安置し奉る○薩戒記云、應永卅二年二月廿五日丙子、先考、御月忌參詣新善光寺、○又云、永享五年八月十八日、新善光寺 一條大宮 長老入滅、祖父入道殿以來皈依僧也、

○塔頭永圓寺 如導律師開基、元在等持院西、今遷泉涌寺、事葛野郡載之、在新善光寺、西。

○塔頭來迎院 在泉涌寺方丈、西、溪橋有蘆橋、額、○當院元云弘法大師、開基、有二大覺禪師、袈裟、今尙在、于當院、寶苑神祠、像、大師、作、云、

元亨釋書云、道隆、宋國西蜀涪涪人也、寛元四年丙午也、乃入都城、寓泉涌寺之來迎院、道隆諡大覺禪師、本朝禪師之號、始、于隆。

○同悲田院 元在北京本法寺、北、今、大應寺其地也、今遷泉涌寺、内、南側保安寺、西、○日工集曰、書、悲田院、棟牌之銘、實以永徳元年十一月十日、而建之、化主、號牛僧者、名元聖、字無已、

山の霞 後花園昇霞記云、 文明二のとし十二月廿六日、夜半はかりより、法皇御所勞いてきましくつて、つゝに辰刻はかりに崩御ならせ給ふ、御年五十二、 聖壽寺に安禪寺殿おはしましけるにつきて、廿七日まつかの寺へいたし奉る、應仁元年より、室町殿泉殿に御同宿、 悲田院にて御葬送の儀あり、聖壽より御車にて御幸あり、代々泉涌寺にてを後の御わさありしに、此たひの忿劇に彼寺炎上を侍るにや、志かるへき老僧も侍らすとて、元應寺の長老攝取院惠忍仰をうけ給はる、文明三年正月三日申、刻、御葬所悲田院本堂、西 「せきわひぬこれをかきりの御幸をとみるにつけてもあまるなみたを 飛鳥井雅康

○地藏院 悲田院之内

親長卿記云、文明五年五月廿二日、雨下、雷一聲、細川右京大夫勝元卒去、今日葬禮悲田院之内地藏院、敵山名入道三月十八日死去之時、雷鳴雨下、今更葬禮之時、如此不審、

○塔頭戒光寺 圓太曆云、八條戒光寺、○元、在八條、北堀川、西、至于今、云、戒光寺屋敷、田間礎石多、其後修一條小寺、舊跡也、至于今、寶覺禪師、塔在此、地、

本尊釋迦 立像長一丈八尺、安阿彌作、政公密附之彌陀、三尊有之、赤梅檀長三尺餘、御袈裟有、時繪、

開基業律師傳云、諱淨業、字法忍、號曇照、學台密二教、建保二年入宋、安貞二年皈朝、云云、朝廷

欽其德欲創精藍擇地未決一昔業夢^ラ洛之南有處產丈六青蓮華光照十方無量聖衆前後圍繞覺後迹^{ツル}之果獲吉壤奏聞敕就其地創戒光寺安丈六之釋迦像○太平記云七條大宮へ掛拔入替く戦ケル東寺敵モ此ヲ先途ト思ケルニヤ戒光寺ノ前ニ搔楯カイテ

○東林寺 元在泉涌寺門前東福寺之間臺

戒光寺開山曇照律師傳云於洛之東山亦創寺曰東林爲戒光寺之子院令弟子淨因住持○

薩戒記云應永八年二月廿六日東福寺邊花盛歷覽圓通寺菩提院東林寺

○落橋 在泉涌寺西

薩戒記云詣東山泉涌寺於落橋西下車件

○五葉辻 伏見道一橋南也一橋側有藤森末社々南有路街曰五葉

後中記 葉室中納言資頼卿記也云仁治三年正月九日壬辰崩御號四條院廿五日戊申今夜四條院御葬禮云

云經五葉辻入御泉涌寺

○鍋良小路

明應凶事記云明應九年九月廿八日後土御門院崩御泉涌寺御葬場殿其在所山門跡十一日辛酉今夜御葬禮也御車路次東洞院南行至七條河原掛浮橋東行柳原寺法性寺南行又東ノカマ折

鍋良小路前東行云云寺中之儀先於惣門外稅^レ牛

○高橋神社 神名帳愛宕郡

三代實錄云貞觀元年正月廿七日甲申奉授鴨山口神小野神久我神高橋神並從五位下

○大紫(柴)神社 神名帳愛宕郡

三代實錄云貞觀五年五月廿二日甲申勅遷山城國廣幡神田中神於愛宕郡伊佐禰里以舊社近於汗穢

○野尻里

三代實錄云元慶五年四月三日庚辰山城國愛宕郡八條野尻里空閑地五段勅充圓覺寺

○松川

夫木十題百首「秋の田をかもの川瀬にこきよせて誰もちとせをまつの川舟 寂蓮法師

○種玉菴 宗祇法師菴也傳云在子東山不知在所或云祇公沒後宗長法師住此菴三年按宗祇三回忌辰於安養寺有千句連歌道遙院殿牡丹花宗長等爲連茶疑種玉菴在安養寺乎可考

翰林五鳳集寄種玉菴宜竹落絮飛花春盡時忽々告別出京師近公如雪夜來夢醒後炎天梅一枝

○文明十九年春種玉庵にて千句連歌侍し第一 圓塵集「春のまた朝日色こきかすみかな

兼載○西行法師宮城野のはさを慈鎮和尚に奉し其萩今に残侍しを草庵にうつしうへ侍しを花の比其國の人きたり侍しに 下草「露けさややともみやき野萩か花 宗祇

○東山妙音堂

百練抄云壽永二年二月九日入道太政大臣師法名理寛東山妙音堂供養以寢殿擬道場以伎樂カザル賞

之上皇密幸件堂

○康樂岡 或云神樂岡同所

新加通記第十八 山城名勝志卷十五

類聚國史云、延曆十三年十一月戊寅、遊獵于康樂岡、

○康樂寺

天台座主記云、大僧正良快、後法性寺殿下兼實公第八息母、修理大夫賴輔、女、仁治三年十二月十七日、於康樂寺入滅、○後拾遺往生記三善爲康、與書云、正嘉元年九月廿一日、於洛東康樂寺、上、御所書寫云云、

○東山光明院宣秀卿御教書案、有、東岩倉光明院

建久四年、左大將殿のむはのあまうへうせられたりし比、雪の降たりし朝にかたりし、東山光明院に長家のありき、北政所の九條殿よりかよひおはしますと聞て、拾玉「けさのいとい、庭の雪にもことよせてふかき哀を思ひとつらん 慈鎮

○熊谷入道東山草菴

東鑑云、承元二年九月三日、熊谷、小次郎直家上洛、是父入道、來十四日、於東山、麓、可執終之、由下之間、爲見訪之、云云、而廣元朝臣、云、兼知「死期非權化、者雖似有疑、彼、入道遁世塵之後、欣求淨土所願堅固、積念修行薰修、仰而可信歟、云云、

○十樂院

百練抄云、安元二年六月卅日、建春門院御惱之間、贈左大臣有託宣、仍爲訪彼、菩提、十樂院、墓所立精舍、今日上棟、○吉記云、今日十樂院新御堂棟上也、依託宣奉爲贈左府有此營、院司兵部卿主典代盛職參向、行也、○籙中抄云、平時信賴左府、建春門院御父、○園太曆云、貞和四年十一月十一日、太上法皇

於仁和寺、萩原仙居晏駕、仙筭五十二、云云、十三日、法皇御葬禮一事、以上太子堂、長老々聖人、沙汰也、御平生欲慮云云、仍先幸太子堂、是内々御幸之儀也、御輿、也雲客少々供奉云云、從彼堂一向爲聖人、沙汰、於十樂院、上、山構、山作所奉葬之、云云、御佛事等悉依御遺命、於彼堂被修之、○又云、延文四年四月廿二日、去比河東天狗横行、以飛礮打所、就中十樂院、邊殊有此事、尊宣入道在彼坊、上邊、園太曆日錄、十樂院、黑谷方云云、

○嘉元寺

圓通大應國師塔銘云、國師諱、紹明、字南浦、駿州安部縣人、出藤氏云云、嘉元甲辰、奉詔入京師、太上皇後宇多召對宮掖、問答稱旨、特差住持、輦下萬壽禪寺、貴遊問道者車馬日駢集、又以東山、故趾興造嘉元禪刹、延師爲第一祖、

○佛眼寺

今昔物語云、京ノ東山ニ佛眼寺ト云所アリ、其寺ニ仁照阿闍梨ト云人住ケリ、極テ貴カリケル僧也、云云、思ヒ不掛女此房ニ來、法師原京ニ行テ、阿闍梨一人有テ見テ、此度々參リ候ツルニ、人ノ不斷候ヒツレハ不申ツルヲ、大切ニ可申事候也ト云テ、人離タル所ニ呼ヒ、阿闍梨ヲ捕ヘテ、年來忍給ヘツル本意有リ、助サセ給ヘト云テ只近付ハ、阿闍梨驚テサラント爲レハ、女助ケ給ヘト云テ只棧スレハ、阿闍梨佗テ佛ニ申テ云、不量シ外ニ我魔縁ニ取籠ラレタリ、不動尊我ヲ助ケ給ヘト念珠ヲ碎計攤、其時女ニ間計投伏ラレ、音ヲ雲井ニアケテ叫ブ、助給ヘ々々ト叫、阿闍梨問テ云、此不心得事也、何ナル事ソト、女ノ云、今ハ隱シ可申事

ニ非ス、我ハ東山ノ大白河ニ罷通ル天狗也、此御房ノ上ヲ飛テ罷過ル間、御行ヒ極テ貴ク聞
ヘツレハ、此ヲ構テ落シ申サムト思テ、此一兩年此女ニ託シテ謀ツル事也、○野府記云、寛仁
二年閏四月十九日辛亥、左京ノ進致孝申云、一昨日有親朝臣於佛眼寺剃頭、

○東山堂

百練抄云、久安五年七月廿三日、參議清隆私所建立之東山堂九重塔、准公家、御願供養、上卿
已下參向、

○住心院 聖護院々々勝仙院住僧
正之時、以住心院號

殿中年中行事曰、正月八日參賀住心院若王子一人宛御禮、○源持房景龍院行狀云、三條ノ内府、息女、相
公普廣院幸之、立以爲正夫人、以故内府、權貴無双、東山住心院僧正、乃内府、叔父也、

○救願寺

薩戒記云、應永卅二年十二月廿四日、慈恩院住持深有爲傳密宗、向東山救願寺、救願寺法印
英賢云云

○圓樂寺

仁和寺院家記云、圓樂寺成典、禪室、○密宗血脉抄云、成典權僧正圓樂寺、本願、○無題詩、冬日遊
藤原
基俊東山有寺曰圓樂、雲雨谿深稀客、臻云云、

○東山五大堂

南方紀傳云、永享十年八月、持氏調伏の爲、五壇の法を行ふ、東山にをゐて、五大堂建立、○異本
應仁記云、文明四年、細川右京大夫勝元頻ニ執シ被申ニ依テ、怨敵調伏ノ爲ニ、五壇ノ法ヲ行ハ

セラレケル、承平ニ此、秘法被行シカハ、將門カ鉄身遂ニ秀郷ニ碎レテ討レヌ、又左大臣義教
鎌倉ノ持氏對治ノ時、先例ヲ逐ヒ、東山五大堂ヲ再興シ、五大明王ヲ彩色シテ、此法ヲ被行ケレ
ハ、持氏墜命シ玉フ、唯今トイヘ、御堂敵陣ナレハ不及力、室町殿ノ唐門ト四足ノ間ニ新造
有テ、青蓮院、妙法院、聖護院、南都ノ門跡一人被出テ、五壇ノ法ヲ行レケル云云、加様ノ驗徳ニ
ヤ、果ノ山名一色被參、大内介降參、畠山義就武衛土岐下國シケレハ、義政公ノ御悅ニ成ケ
ル、此年山名入道モ國ニ下ケリ、又云、享徳三年十一月二日夜、勝元逐電、翌日東山五大堂被居、

○林寺

類聚國史云、弘仁四年四月癸未、勅、從三位藤原朝臣産子、暫住於山城國愛宕郡林寺、宜其居住
之間、不得伐損寺下四邊之地、樹木及放弄馬穢物等、

○洛陽七處觀音

搃囊抄云、六角堂 革堂 河崎 中山 長樂寺 六波羅密寺 清水寺 ○管見記云、嘉吉三
年六月十七日、夜陰詣七觀音、密々乘馬、月皓々、行路有興、○齋藤親基雜記云、文正二年四月
六日、鹿苑院御年忌、六十
年忌御成有之、直七觀音御參詣、

○龍雲寺 幻居山人隨筆云、東
山一山 延用

永享日錄云、永享八年正月廿八日、龍雲寺御成、大箱家記
同之 ○又云、諡延用和尚、
曰德光普照禪師

○龍德寺 或記云、太清和
上在洛、東山

永享日錄云、永享七年十月七日、龍德寺御成伺之、

○常樂寺

日工集云、東山常樂寺、

翰林五鳳集春初遊常樂寺、常樂、名藍期此、時、々々人境兩相宜、逢春吹雪狀元、桂、登第少年攀一枝、○同集、次韵、台駕到常樂、于雪、命大愚賦之、西胤、雪迎、台駕擁松關、一國之師春隘、顏、更自、凌霄峰頂、看、鸞羽風舞屋、四山、

○東光寺

或云、靈山、西北、瑞、高臺寺、南邊有東光寺、名、此處、

幻居山人隨筆東山禪刹部、曰、東光寺夢窓、通玄菴同興善院鈍仲、實際院、岩栖院、滿福寺、長清寺、常在光寺夢窓法觀寺、八坂慈濟院粟田口、壽聖寺粟田口、汲源寺一山無護法菴、夢窓、如住菴夢窓、信光寺大應慈恩寺、大應、今熊、建聖寺白川、普明院古岩、稱名寺先覺和、花嚴院清水坂、無量壽院夢窓、玉泉院野浮印國師、龍雲寺延用、○日工集云、永德二年正月十一日、赴東光古劍之招、○又云、過東光訪古劍、々引入西軒、隣家、下視、城中時花正盛、看出、牆頭、的々可摘也、簇々長安十萬家、烟奔浪走入、簷牙、道人、不假馬蹄、力、坐看春風二月、花、○室町殿家記云、康正二年、斯波義敏遷居東山東光寺、

○東山新城

二水記云、享祿四年六月六日、東山新城舊武田城也、近日近江、新構之數ヶ間熊小屋了、已以燒之、此後勝軍悉以燒、拂之、各從、山道、沒落了、

○藤本

心敬私語云、慶運法師今はの時、年來の詠草抄物、住なれし東山藤もとの草庵のゑりへに、皆埋すて侍となり、道に恨を殘し侍も情深き事也、

○枝橋

太平記云、東山、枝橋ト云所ハ、菅宰相在登卿ノ領知ニシテ、父祖代代、墳墓ヲトタル地也、○康富記云、寶德三年九月廿九日、甲子詣七觀音、於一條烏丸富松亭、有一盞、於枝橋、又有一盞、於祇園大路、北頰大佛之堂有菊、一覽了、

山城名勝志附錄愛宕郡

○豐國社

坐阿彌陀峯、麓新日吉、地、祭豐臣秀吉公、唐今絶、

豐臣秀吉公譜云、慶長三年四月十八日、前、關白太政大臣從一位豐臣秀吉、薨於伏見城、年六、葬於洛、東南、邊阿彌陀峰、築墓、其、巔、構祠、其、麓、以ト部某、爲神主、四年四月十八日、勅賜秀吉社諡、豐國大明神、額後陽成院、○覆醬集、豐國、神唐、丈山、零落東山古廊、蒼苔蔓草上、頽牆、英靈飛散無巫祝、秋月春風作主張、○豐國社の花の枝につけて、圓爾上人のもとへ、黃葉集、一枝もたかためならて手折けり心を花の色になるやと、光廣

○大佛殿

號方廣寺、在六條、南鴨川、東七條、○大佛像高六丈三尺、堂、東西廿七間、南北四十五間、迴廊南北百廿、跡管之、佛工南京宗貞法印、同弟宗印法眼造之、慶長元年閏七月十二日、因地震、佛像崩、秀吉公其跡迎、信州善光寺、

銅像、鑄損而自、大像、出火、大殿共、燒畢、同十五年、右大臣秀頼公復營、云云、寬文二年、改刻彫木像、并、

豐臣秀吉公譜云、天正十四年、是年秀吉謂、於東山可築大佛殿、云云、相攸、東山佛光寺定之、云云、佛像以銅鑄之、堂之高、也二十丈、佛之高、也十六丈、是舊式也、云云、以聖護院門跡道

澄爲大佛殿、住持、改院號曰照高、或記云、慶長二十年七月九日、抄法院門主爲大佛殿、住持。

○鐘樓 四間四方、柱敷廿株、鐘鑄、鐘高一丈四尺、指巨九尺二寸、厚九寸、慶長十九年四月十六日。

天正十六戊子夏之孟、相攸於平安城、東、創建大梵刹、安立盧舍那大像矣、蓋夫慕蘭、聖武帝

南京之大像、睇顏賴朝公東大之再建者也、云云、鐘銘 慶長十九甲子孟夏十六日、南禪文英叟清韓謹書。

○秀吉公塔 在大佛殿東南廻廊內、豐國社額破之後、營此塔、號國泰寺靈山俊龍大居士。

○耳塚 在大佛殿西、額惣廻百廿間、高五間、五輪高、三間、土臺一丈二尺、慶長二年十月築之。

豐臣秀吉公譜云、文祿中頃年伐朝鮮、在陣、諸將報進其斬獲之數、或人以其首級之重、故劓之、ナキリ斯之而遣京師、秀吉大喜賞之、埋之于洛畔、太佛殿、邊號耳塚、

○養源院 在蓮華王院東、天台開山盛伯法印、院爲菩提所、創建之也。

鐘銘云、意林菴、素心書。山城、州愛宕郡、洛東、養源院者、贈從二位行權中納言前、備前守藤原長政卿、靈

場也、其息女大虞院英岩、者豐臣秀吉公之內政、因之告事、之由、以受其命、建立、然不圖及、ナキリ回祿也、爾時、崇源院贈從一位和興大姊、遂再興、給畢、崇源院者台德院、之御內、而英岩、之御

妹、女院、之御母堂也、云云、

○智積院 在養源院東、眞言、元此地、豐臣秀吉公、爲令君棄君所、創建、祥雲寺也、然到、東照神君、御世、新儀、再興、智積院于此、地、而于今、新儀、派盛也、今、智積院者、不、改元、祥雲寺、所、構乎、棄君、像、今、在、妙心寺、玉鳳院、內、

○開山堂 號密嚴堂、覺鏡、元祿五年、十二月、勅諭、興教大師、又殊院 在妙法院門跡、東、近、年、爲、南禪寺、末寺、

豐臣秀吉公譜云、高野山、木食、興山上人。天正十四年、構瓜廬于佛光寺、邊、今、豐國社地、佛光寺也。○久殊院身まかりける

時、見樹院立證のもとへ讀てつかはしける、やともにもまつらん 長嘯 舉白集、高野山苔の下にはめぐりあひてその曉

○高臺寺 號鷲峯山、在祇園、南法觀寺、北、古、雲居寺、金仙院及岩栖院等、之地、今悉爲當寺、境內、○本願、大政所從一位湖月禪尼、開山、号、箴禪、師、曹洞、中興、建仁、常光、院、三、江、益、和、尚、

寺記云、此地元細川、滿元朝臣、創岩栖院、被寄附村菴彦禪師、云云、慶長中、豐臣秀吉公、夫人政

所、號高臺院、湖月尼、爲其母君、於洛北京極、草創康德寺、開山、其後、康德、之地、依、狹、少、東、山、岩、栖、院、并、祇、園、社、山、等、湖、月、公、自、爲、菩、提、造、營、高、臺、寺、康、德、引、此、地、云、云、以、康、德、舊、地、爲、岩、栖、替、地、

畢、慶長十一年、建立、開山、号、箴禪師、嗣長若、其、後、建仁寺三江長老、從被住持、爲濟家、岩栖

院、今遷南禪寺、塔頭圓德院、之內有湖月尼公、之塔頭、號永興院、○鐘銘云、山城州平安城

愛宕、郡土車、庄八坂、郷、於鷲峰山、創高臺壽聖禪寺、大檀那從一位高臺院殿快陽心公大姊、

爲現世安穩後生善處、課、踏輔者藤原、國久、鑄華鐘、云云、慶長十一年、柔兆、敢、祥、小、春、中、長、辰、當、山、開、闢、比、丘、特、賜、佛、性、眞、空、彌、弓、箴、禪、德、

十境

白山巔 高臺寺、良峯、 菊潭水 在東北、山腹、大岩、蟠蛇池、在清水山、東、云、蛇池、 湖月堂 昭堂、安閑窟、 相侈墳 双林、

溪 祇園林 長樂鐘、 寬永十七年二月廿一日、紹益長老高臺寺にて催されし會に、花下惜

春、舉白集、山の井のあかぬ名残や咲にはふ花の雫も袖ぬらすらむ 長嘯

○長嘯子靈山山庄 舊跡在靈山、南、口長殿房、東、

東山山家記 豐臣、勝後、云、ひんかし山の麓靈山といふ所に、幽居の地をしむること有、半日、まへに谷

あり、長嘯橋をつくる、行こと百さかあまり、寄亭、またちりへの岡にたかくすくれるもの、待

歌仙堂

必と名づく、○朝ほらけ云、そり橋をわたりて、影先生をかたらひつゝ、松洞臺にのほれば、
堤高文集注云、長嘯在靈山、建松洞臺、春日奉訪長嘯公、靈山 八坂東邊小路分、春風花木向欣々、我來竹下問青鳥、君在山中臥白雲、
○活所遺稿、一日陪長嘯公于靈山之莊、謂僕曰、靈峰樹石鬱嵯峨、上有飛樓攀且過、衰盛不關清意發、是非俱忘逸遊多、定知鳥羽觀頭興、自勝首陽山下歌、今日偶然添一客、天仙相見誤誰何、○同集、飲舉白水、路入東山、七月寒、佳人世外坐雲端、一盃舉白堂前水、便是仙家承露盤、○舉白堂のまへなる櫻を 舉白集「年へたる宿のさくらのおもはくにちらす、外の花もたつねし 長嘯○東山に鳥羽觀と名つけられける庵にて、 同「見わたせいとほたのおもの霧の海に沖の小島は秋の山かな 同○長嘯軒東山の山庄にまかりて、 黄葉集「庭の面にをのれとそよく 萩原の秋風よりや生はしめけん 光廣○若州少將靈山の山庄にて、和歌會興行ありとて、題をさくられて侍しに、橋上初雪、 衆妙集「吹をくる雪のさからみかけそめて夕風ふるさき谷の柴橋 玄旨

○藻蟲菴 今鳴瀧妙光寺、内有此名、後世移此于地乎、

東山藻蟲菴にすみ給ひしに、妙壽院久しくをとつれなかりける比、よみてつかひしける、
 舉白集「あまのかる藻にすむ虫のかくれ家いどのぬにつけて誰かうらむる 長嘯

○三條橋 架賀茂河、

橋銘云、洛陽三條橋、至後代、化度往還人、磐石之礎入地五尋、切石柱三十六本、蓋於日域石

柱橋、濫觴乎、○天正十八(庚寅)正月日 豊臣初之御代、奉増田右衛門尉長盛造之、

○細川玄旨法印吉田亭 或云、在神龍院前、號風車軒、

艸山集云、貞徳老人語余曰、昔丹山、幽齋、構居於吉田、山中名隨神菴、○慶長六年、吉田に越年の元日に、衆妙集「あふくなり先天地の神祭る吉田の里に春をむかへて 玄旨

○光雲寺 在若王寺北、

大明國師行狀云、東福和尚不安也、知涅槃時到、弘安三年庚辰欲招師繼席、云云、師知人、所欲遜之攝

州難波、地名主事、著請住光雲寺、或云、元在攝州大坂芝地、中絶良久、南禪天授菴英仲玄和尚再興、號靈芝山、爲東福門院、御願寺、本尊釋迦像、則女院御持佛、云云、

○萬無寺 號善氣山法然院、在鹿谷村北、延寶年中智恩院前住萬無上人開基、或云、安樂住蓮遺跡、取上人遺骨、建石塔、其塔元在鹿谷村入口、今遷萬無寺内、

黒谷上人傳云、建永元年、上人、門徒住蓮安樂等、輩、東山鹿谷ニシテ別時念佛ヲ始メ、六時禮讚ヲ勤ケル、

○照高院 在白川村、聖護聖宮退院、御所、

興意法親王、寺長吏院護院白河照高院開基、號淨瑠寺、陽光院皇子、後陽成院御連枝、○照高院宮にて、山霞、黄葉集「あさ

なく霞に匂ふ面影のまらかくみつる峰の白雪 光廣○慶長四年九月八日、三井寺講堂御再興有て、柱など立られし比、照高院宮へまいりて、かくそ申侍し、衆妙集「たえにける三井の流をあらためて更に汲する法の水かな 玄旨○寛文元年正月廿五日、行幸白河照高院にありて、暫爲行宮、「里の名の今朝ふる雪にあらはれてこの山松の色もわかれす 御製「ふる雪の色よりも猶里の名の世にあらはれん君か言の葉 照高院道見

高師惺窩先生ト幽居、贊成其志、○惺窩和歌集云、市原山莊之景、其數七、

手月磧

いく夜たれ雲のよそにやなかむらんわか手に結ふ水の月影

流六溪

溪水や水のまに／＼なかるらん六のむなしきかたも定めず

洗密科

たかみをきいかにかくしてかゝるらんみそか心の神もあらしを

朽斧松

琴の音にくたすや斧のえにしわれこの山かつの軒の松風

北肉峰

心をや向背にすらん人も我も北のそかいの山のはなりに

岩牆水

いはかきや水のすたれのたれこめぬ世の有さまよへたてはていき

枕流洞

うたゝねの枕なかるゝ水草のみどりの洞の春秋もなし

○夕佳樓 惺窩先生山莊同所也、後武田道菴造夕佳樓。

羅山文集云、城北市原山中號曰夕佳樓、○覆響集、阻雨宿北肉、一夜山房留、老夫、溪流橋斷住、無

途微風殘雨遮春色、翠蝕雲花水墨圖、

六景 見于羅山文集

雙仙杉 十二峰 槩日坂 魚懸潭 分沙流 漏石水

又六景同上

雇山溪 約繩橋 鸞嘯巖 觀瀾亭 鯨背石 沐巖瀑

○幡枝御山莊

御山莊に御幸ありて、はたえたといふ事を、たち入たまひて、 陽巢集「ゆかてはたえたへし

春の山里にみし面影の月いかすます

○圓通寺

在幡枝。○或云、圓贈左府基任公之息女、園光院文英大夫人、捨宅爲寺、安置觀音、請妙心禿翁爲住職、禿翁讓開祖於景川、文英、後光明院大上皇之外戚也、依之爲勸願寺。

○鏡池

堀川後百首讀ル者此處乎、三十八帖歌枕、未勘、

活所遺稿、八月十六夜、老樹回巖如畫圖、幽深何況近皇都、今添詩客鏡池上、新月出峰影不孤、

○堀川後百首「みさひゐる鏡の池にすむをしのみつから影をならへてそみる 常陸

○靈源菴

在西賀茂正傳寺、北本願、後水尾院開祖佛頂國師一絲文守、有後水尾院勸願。

大梅一絲和尚語錄云、寛永戊寅之秋、相攸於洛北、勝地、草創一字、禪菴、扁曰靈源、盖因錯膺

大上皇之檀施也、云云、仲冬五日始移瓶錫於是、

○白毫山

舊名號藥師山、在鷹峯東、藥師堂、本尊傳教大師作云、法印野間玄琢建、堂、慶導梶井宮二品法親王昔、大德寺、四至云、北、限藥師山、北云云、

白毫山藥師堂、記云、大醫壽昌院法印、姓源野間、諱玄琢、關園園卜、林丘、栽植千種萬草、質百

ますに、夜ハ明はてぬ、○無題詩、法性寺詠月、中原廣俊暇日整辭人事、カマヒスシキ譚逢僧月下忘飯家、年々流景留難得、夜々清光惜又斜、○前大納言爲世、人々いさなひて、法性寺に花見にまかりて、十首歌よみ侍ける中に、新拾遺「家つとに折つる花もいたつらに歸さ忘る、山櫻哉 爲明○注性寺會述懷、家集、待つて花みる春のなかりせの折にもあひてやみをまなまし 頼輔○法性寺の花を見てよめりける、家集、ちらしける花みる時を思ひ出るみゆきふりにし庭のけしきを 光俊

○五大堂元在法性寺大路、今遷東福寺、内栗棘菴、西向、額五大堂不二守藤寄附ト云、○緣起云、昭宣公建立、御室八日於此堂行修正、東福内同聚菴勤之、出御堂攝政記云、寛弘三年十二月二十六日甲子、法性寺丈六五大堂供養、○扶桑略記云、寛弘三年十二月廿六日甲午、左大臣法性寺、内建一堂置丈六、五大尊、今日開眼供養、日本紀畧、十月廿五日云云

左經記云、寛仁二年閏四月十六日戊申、今晚參大殿、自夜部依有御惱氣也、今夜令籠法性寺、五大堂、○聖一國師年譜云、弘安二年四月、建法性寺、五大堂、

○藥師堂今東福寺門前、橋、北西、傍有藥師堂、號明靜院、元法性寺一院也、傳云、法性寺羅兵火之時、本尊藤、杜御旅所、故世人御旅所呼武鶴社云云左經記云、長元四年正月六日甲子、入夜參法性寺、依藥師堂修正也、

○三昧堂

百練抄云、寛弘四年十二月十日、内大臣公季供養法性寺、三昧堂、以呂波字類抄、寛弘四年、日本紀畧等同之

○塔

日本紀略云、天慶八年二月甲子、皇太后於法性寺供養多寶塔一切經等、○扶桑略記云、天曆八年二月廿一日、勅、法性寺、塔造、金色普賢菩薩、像、金色、觀世音菩薩、像、安置塔婆、

○常行堂

本朝續文粹云、願文弟子正二位藤原、朝臣實成、至心稽首白、佛而言、極樂曼陀羅一鋪、金泥、妙法蓮華經六十部無量義經觀普賢經各六十卷便於法性寺、中先公建立、常行三昧堂、敬供養、長久四年八月十三日、明衡

○新堂

百練抄云、久安四年七月十七日、攝政、室供養法性寺、内、新堂、行幸、帝王編年記同之

○惣社今東福寺鎮守、社是也、號成就宮

百練抄云、久安六年八月廿四日、攝政於法性寺、新造、堂、被行惣社祭、新尊崇之、○又云、寛元元年八月廿二日己亥、今日法性寺成就宮、東福寺、鎮守被始行祭禮、

○灌頂堂

百練抄云、仁治三年九月廿五日甲辰、法性寺禪定大閣、灌頂堂供養也、導師行遍僧正、讚衆廿口、

○東北院東福寺四至、文書云、北限、東北院、田端云云

續文粹小野宮右大臣冊、九日追善、顯文云、奉圖繪胎藏金剛兩部、曼陀羅各一鋪、奉書寫金字妙法蓮華經一部八卷、無量義經觀普賢經各一卷、於法性寺、東北院、敬以供養、矣演說焉、是則尋清慎公建立之場、下右丞相皈依之砌也、又所天在生之時、奉造等身金色、藥師如來、像一體、毗首之功甫就、

開眼之誠未企、今當是以同奉供養所生、惠業、併資幽儀、寛徳三年三月二日弟子正二位行權中納言兼皇后大夫右衛門督藤原朝臣敬白、明衡明衡十訓抄云、東三條關白前太政大臣兼家、九月十三夜の月にさそはれて、東北院の念佛にまゐり給ひける、著聞集、同之、

○最勝金剛院

山槐記云、仁安二年二月廿八日、最勝金剛院修二月行、○明月記云、建永元年五月卅日、參法性寺殿、最勝金剛院、○愁にあつみて後、最勝金剛院の八講にまかりて、あしたに前中納言もどにかのしける、續拾遺、數ならて年ふる夢に残る身いさきのふの跡をとふかひもなし、前内大臣基

○一音院

百練抄云、曆仁元年九月十三日乙酉、天晴月明、於法性寺、一音院有作文題云、山家、夜月、題、中又有三首、和歌、○太平記天正云、禪閣忠教法名圓阿、正慶元年十二月六日薨、年八十五、號報恩院、其夜聽テ一音院ニテ御葬禮アリ、○藤氏系圖、忠家、攝政右大臣一音院道家公孫、

○淨光明院

增鏡云、寛元々々年五月廿九日、法性寺の淨光明院にて、普賢寺殿の御きにちの法事あり、この御堂の莊嚴のめてたさかきりなく、まとの淨土思ひやらるゝさま也、○兼好すゝめ侍し淨光明院三首に、待花、草庵「山ふかみわくれいと、風さえていつくも花のをそき春哉、頓何

○報恩院

平戸記云、仁治三年四月六日戊午、昨今報恩院恒例、御入講也、殿下昨日渡御法性寺、○桃華葉云、報恩院在法性寺、月輪殿、御草創、有御願文、後京極殿御筆、當時不知、其在所、念佛、僧六口、每度以補任、定仰其人、云云、見峯殿御置文、○藤原系圖、忠教關白左大臣報恩院忠家公息、

○松林寺

日本紀略云、天祿元年五月十八日戊午、攝政太政大臣從一位藤原實賴薨、年七十一、子、刻以尋常、車移奉法性寺、長松林寺、十九日己未葬送、

○西御堂

百練抄云、永萬元年二月十一日、故、入道關白周忌、供養法性寺、堂、法性寺大路、西中宮行啓、新所、内也、槐記云、仁安二年二月十九日、參法性寺、新御堂、故、入道殿御忌日也、廿八日、今夜法性寺、新御堂、故入道殿御堂、有修、○又云、治承四年十一月二日庚戌、高松、中納言實衡後家尼上入滅、年六十三、三日辛亥、今夜高松、尼上葬送、云云、件、所法性寺也、法性寺殿、西御堂、南方、對也、○平戸記云、仁治三年八月十一日辛酉、參小御堂、今日故、左大臣殿、御遠忌也、宗源法印爲導師、○黒谷上人傳云、建永二年二月、月配流、輪殿御餘波ヲ惜テ、法性寺ノ小御堂一夜留メ奉ラレケリ、

○東法院

日本紀略云、永祚元年六月廿六日、太政大臣從一位賴忠薨、年六十六、八月十一日、故、太政大臣四十九日、法會也、於法性寺東法院修之、

○觀音寺

拾芥抄云、在法性寺、又三十三所觀音内ニ云、法性寺觀音堂、云云、今東福寺、前二橋、南有小堂、土人稱法性寺、觀音、

○尊勝院

今昔物語云、法性寺ノ尊勝院ノ供僧ニテ道乗ト云僧有ケリ、比叡山ノ西塔ノ正算僧都ノ法弟トシテ、初ハ比叡山ニ住ケルカ、後ニハ法性寺ニ移テ年來ヲ經タリ、法華經ヲ讀誦シテ忘事无カリケル、○河海抄云、李部王記云、天曆三年三月十五日、右兵衛督師氏卿爲大相國貞信公七十、賀於法性寺尊勝堂修法會、七佛藥師像寫金字、壽命經七十卷、

○定法寺

今昔物語云、法性寺ノ南ニ定法寺ト云寺有リ、

○圓法院

明月記云、貞永二年二月十日乙酉、前修理大夫、書札到來、迎蓮上人近隣、知音也、依有面謁、本意傳示由也、云云、近年住舊里法性寺、圓法院予カ外祖所跡、由語了、又是好士之一分、云云、先考先妣、墓所、聞傳、讀例時、由語之、

○藻壁門院少將宿所

井蛙抄云、藻壁門院少將内侍、老後に出家して、法性寺の舊跡に住ける比、平親清か女あつまよりのほりて、さる名譽の人なれば、見參せんとて、法性寺宿所へ尋まかりけり、千種云、信實朝臣女三人あり、みなよき歌よみ也、藻壁門院少將ハ殊ニ秀逸なり、

○一橋在東福寺、北伏見道、

一橋在大和九條、流水出東福常樂菴、奥而經二號、法性寺、一橋、老橋同北門、絕塵橋而出、大路入鴨川之末也、

二橋 在天鳳雲橋等架之、又經曹源院、前而出、大路入鴨川之末也、

盛衰記云、伏見、尾山、月見、岡ヲ打越テ、法性寺一ノ橋ヨリ入モアリ、○平家物語長門本云、新中納言知盛の御子、三歳にて叙爵して、大夫知忠とておのしけり、紀伊次郎爲範養ひ奉りたりけるか、取奉りて伊賀の國へ送下り、服部といふ所に忍ふておはしけるか、十三の年建久七年の秋ころより都にのほり、法性寺大路の一の橋の邊に、竹の内なる所忍にひておのしける云云、彼所まへの深き堀にて、馬かよふへくもなし、後の大竹えけりて人くひをさし入かたし、○平家物語八坂方本云、越中次郎兵衛盛嗣、上總惡七兵衛景清、紀伊次郎大夫爲方、子兵衛太郎兵衛の次郎と先を落ける云云、○今東福寺、北、塔頭龍眼菴、○又云、中にも越中次郎兵衛、上總惣七兵衛は、瓦坂に打て出、一方打破て南を指て後有竹林、號景清屋敷是彼、知忠館居、地乎、○法隆寺記云、嘉禎四年八月上旬、六波羅將軍、法隆寺、太子寶物可令上洛、給之旨被仰、云云、十一日、癸丑、御舍利之外御寶物皆具也、宿所法性寺一橋、於北東願唐門内、於法性寺殿、九條禪定殿下、准后宮將軍、賴經、左大臣殿、左大將殿、御拜見、○太平記云、康安元年九月二十一日、將軍義詮朝臣今熊野ニ引籠リ、一ノ橋引落シテ云云、○梅花無盡藏、暮春過城南、遊城南、藤、杜教院、有畫眉、兒、萬里、春風吹、枝扣、城南、惠日寺前橋二三、沈水燒殘、屏宛轉、流鶯、聲答、美人、談、惠日山東福寺、前一橋、二橋、三橋、透此三而入藤杜、○菅谷土人云、菅谷、今架一橋、谷也、云云、源從、泉涌寺、東南流出、經、善能寺、北、西新熊野、南、落一橋、流、梅松論云、六月晦日、宇治ヨリハ法性寺邊迄攻入タリシヲ、細川賴春、内野ノ手ナリシヲ、召ヌカレテ大將トシテ、菅谷ノ邊ニテ合戰セシメ打散シケル、

○阿彌陀堂

山槐記云、治承三年六月三日庚子、今日右大將宗盛法性寺、一橋、西邊、建立一堂、置丈六、阿

彌陀像、令前權僧正公顯供養云云、是室家周忌、佛事歟、件、人去年七月十六日逝去也、

○遣迎院 在東福寺前、橋南東、傍、○仁空上人記云、本願光明峯寺殿、開山善惠上人、近世遷京極鷹司、北、故又載洛陽、卷、然此地猶存小堂、

西山上人傳云、法性寺、遣迎院ハ、月輪殿峰殿ナトモ程遠カラス、洛陽ノ化導タヨリアルヘ

ケレハトテ、光明峰寺殿ノ御沙汰ニテ、始ハ人屋ヲ點ノ上人ノ住處ト定メラレケリ、後ニハ

佛閣ヲヒラキテ釋迦彌陀ニ尊ノ像ヲ安置シ、寺號ヲモ遣迎トソツケラレケル云云、寶治元年

十一月廿六日、乙亥白河遣迎院ニテ、上人入滅シ給、

○門真

仁空上人記云、法性寺門真、地事此處者後芬陀利華院殿下、教院建立、事御同心之餘、以此地所、令

授與先師和尚給也、仁相續之後、重被成御教書、仰泰春法眼被打渡下畢、○建武已來式目追加、有門真、左衛門入道、將軍義量御元服記、有門真、少外記周清、

○貞信公墓

歷代編年集成云、天曆三年八月十四日、關白太政大臣、忠平公墓、小一條、第十八日己丑、葬法性

寺、外東北、原紫雲起、此處、法性寺者此、大臣、御堂也、詔贈正一位、諡曰貞信公、號小一條殿、

扶桑畧記云、年七十、

○來定寺 文德實錄、深草、陵、近隣七箇寺、一員也、

歷代編年集成云、朱雀院天曆六年八月十五日崩、廿日葬來定寺、或記云、葬法性寺、東中尾山、

南、原、陵、置御骨於醍醐、山陵、傍、扶桑畧記、同之、

○法性寺殿 今有鴨河、東、東福寺北、門、西、一橋、南、稱御所、內車宿、ヤトリ、等所、土人云、法性寺殿舊跡、云云、

續世繼云、忠通公法性寺の御堂の御所など造りて、貞信公の御堂のかたいらにすませ給ひし

か、法性寺殿とを申めり、○帝王編年記云、寛元二年十二月廿九日乙未、天皇爲立春、御方

違行幸禪定殿下、法性寺、別業、○明月記云、正治二年八月廿四日、參法性寺殿、令御覽歌一

卷、○永治二(六)年、崇徳院攝政の法性寺家にわたらせ給ふて、松契千年といへる心をよま

せ給ける、新勅撰「うつし植ておめゆふ宿の姫小松いくちよふへき梢なるらん 大炊御門左

(右)大臣

○宇賀塚 在九條、南、東、洞院、東、宇賀、辻、子、土人云、判官塚、一町許南也、

陶原月輪兩槐門圖云、昔鎌足遊獵月輪、得金璽、預知後世遷都于此邊、我子孫亦繁富、乃藏金

璽、今之宇賀塚也、

○宇賀辻子 在九條東洞院、東、宇賀、塚、在此地、故有此稱、

或記云、寛正三年十一月朔日、土人一揆蓮田淀ニテ被誅、殘黨東福寺領宇賀、辻子村ニテ悉討

取、四日蓮田兵衛ヲ始、張本八人ノ頸四塚ニ被掛畢、

○月輪 按、至東福寺、東泉涌寺、號月輪、歟、類聚大補任云、仁治三年正月廿五、日、四條院御葬送月輪、山莊我禪坊云云、我禪、泉涌寺開山後仍也、

月輪といふ所にまかりて、元輔惠慶などいもに、庭の藤の花をもてあそびてよみ侍ける、

後拾、藤の花盛となれ、庭の面に思ひもかけぬ波をたちぬる、能宣○同「さきの日に桂の宿を

見しゆへいけふ月輪にくへきなりける、輔親○袋草紙云、經信卿難後拾遺云、輔親か語りし

の、能宣か桂の家に會して、又の日元輔か月輪といふ所に、同人とまりたりしに、かはらけ輔親とれと云侍しを、能宣のえつかうまつらしと云侍しを、猶など元輔申侍しかり、なましむに、かはらけとりて讀侍ると云也、○かつらなる所にまいらんとすと人にいひ侍し、そこにまからて、月の輪といふ處にまかり歸て、家集、月の輪にあらたまるともあらすして桂のまたや君を待らん 元輔

○月輪殿 兼實公、山莊、號月輪、右大臣、○東福寺、四至、文云、東、限、月輪殿、堀路通云云、

或記云、月輪殿、三位範季卿奉行造之、○明月記云、寛喜二年四月六日、若宮童殿上、自水無瀬殿、前御輿云云、自鳥羽北殿、北出東路、入御月輪殿、○元亨釋書源空傳云、空謁藤相國于月輪、談話而出、相國下庭拜、○黒谷上人傳云、元久二年四月五日、上人月輪殿ニ參給テ、池ノ橋ヲ渡給ヒケル程ニ、頭光現シケルニヨリ、彼橋ヲハ頭光ノ橋ト申ケル、○西山上人傳云、法性寺、遣迎院ハ、月輪殿峯殿ナトモ程遠カラス、云云、○聖一國師年譜云、寛元元年癸卯、相國乃發使召師、二月師入京云云、延之月輪、別墅、終日問道、○月輪殿御會に紅葉、玉吟「露のぬきよ」の山風この比り立田のにしきこゝろしてふけ 家隆

○東福寺 在二橋、南、法性寺大路、東、稻荷山、北、號惠日山、五山、第四也、寺敷山堺、事、弘安三年、限東月輪殿、堀路、通、限西法性、堺、限南溪川、限北東北院田端、○和漢禪刹

次第云、開山聖一國師、塔曰常樂、後嵯峨寛元元年、藤原道家建之、○元亨釋書圓爾傳云、大相國郷於城東、創大伽藍、宏構鉅材、爲都下之冠、嘗曰、我亞洪基於東大、取成業於興福、故名東福

寺、俗呼新大佛、署爾住持、立爲禪刹、云云、正和、始賜諡國師、國師之號始于爾矣、○梅花無盡藏云、南都之半佛雲居、雲居之半佛東福、

○佛殿 額、釋迦寶殿、無準筆、貞和丁亥、從一位藤原經通建、住持一輩、

聖一國師年譜云、嘉禎二年丙申、藤丞相道家 光明峰寺殿下 歸佛崇法古今寡匹、嘗善建寺度僧之志、云云、於是關平安城東南、地建大伽藍、殿内安釋迦像、長五丈、其左右觀音彌勒像、各減其半、四天王像復減其半、釋迦、眉間藏遮那像、其長五寸、光中化佛五百軀、

○後堂 東掌簿判官、梵天、帝釋、西開山達磨、百文、臨濟、 ○僧堂 本尊文殊、聲聞聖像、 ○衆寮 額無準筆、本尊觀音、座居、二尺餘、堂退轉、今文、殊、後安之、 ○境致 見于和漢、禪刹次第、

選佛場 僧堂額無、準筆、 梅檀林衆寮 龍吟水 甘露水 井在山門、東南傍、 通天橋 在法堂與常樂之間、額普明國師、橋下楓葉洛陽、奇觀也、

普明國師行業實錄云、東福寺後、溪澗深邃、而與開山祖塔阻絕、衆病之久矣、師親相收、芟榛除荒、新開徑、直大路而架橋梁于其上、扁曰通天、作偈賀之、揮却風斤支落霞、虹霓千尺截奔波、通宵一路脚跟下、來往人從鳥道過、

臥雲橋 在五大堂、南、架洗玉瀾末、 思遠池 蓮池在山前、 洗玉瀾 通天橋、下、溪也、

濟北集無價軒、記曰、壬申予移惠橋、室之背大林巨澗、所謂千松洗玉者也、

偃月橋 額、偃月、元號虎嘯橋、在方丈與龍吟即宗院間、今、橋、慶長八年十月、仁叔公尼首座再興、 二老橋 在三聖寺五、 妙雲閣 山門舊曰、凌霄、閣、額義持公、 無價軒 方丈、 千松林 通天、 潮音洞 堂、法堂額、潮音堂、無準筆、

東福年譜云、文永十年正月一日、落東福寺法堂、

五社宮 鎮守號成就宮、坐山門、東、古者五社並坐云云、

諸社根元記云、光明峰寺殿御鎮守、當寺東福寺、鎮守是也、

石清水 賀茂 稻荷 春日 日吉已上五社

帝王編年記云、寬元元年三月十五日辛卯、東福寺惣社遷宮也、奉號成就宮、○百練抄云、寬元元年八月廿二日己亥、今日法性寺、成就宮、東福寺、鎮守、被始行祭禮、禪定殿下右大臣殿、左大將殿、准后尚侍兩御方、内々御參、南御廊爲、御所、

○庫司 額、香積院無準筆、○傍有草駄天、像、梁、朝鮮木高麗木之文字彫入之、

東福寺和漢 大發句帳、草に木に春の惠の日かりかな 紹巴

○十三重石塔在鎮守、傍、

聖一國師年譜云、延應元年己亥五月、藤丞相道家染病、命諸僧誦呪、以祈保安、二十三日、比良山、神託家盛、妻、告僧慶政、證月、上人曰、藤、丞相將、翔建、寺復造、十三重、石塔、憑此善念、夙罪消滅、今後善根必當清淨、我有三千、眷屬、當爲、伽藍神、以致衛護、道家聞、乃願心彌堅、

○摩訶阿彌、舊跡、芬陀利華院東、○僧堂位牌、天龍明基摩訶阿彌陀佛云、墓、在、鎮守、傍、云、地主、神靈、重塔、際、大石殘、

○常樂菴 開山塔在普門寺、內、有閣曰傳衣閣、

開山堂常樂聖一國師像 東辨才天、開山護持、尊像、(康珍作)十五、額常樂菴、後光明峰寺殿筆、童于、(同作)西百文、達磨、臨濟、

藥師問觀 鎮守稻荷社 大祠堂、東釋迦、康運作、道家公影室、西觀音、太子作、無雜真影、

東福年譜云、文永五年戊辰、藤、丞相實經、常樂菴、弘安三年十月十七日、聖一化、遂瘞全身於

常樂菴、和漢禪刹次第云、

○圓通寺 或云、寺跡今泉涌寺、境內、戒光寺、地是也、開山寶覺禪師、塔所也、○泉涌寺、八景、題、圓通、孤松、

部類抄 御幸、云、正和五年三月十二日、甲才新院爲花御覽、御幸圓通寺、爲御引出物、獻鵝眼一萬疋、云云、○薩戒記云、應永八年二月廿六日、乙酉、東福寺邊、花歷覽、圓通寺、菩提院、東林寺、永明菴、○和漢禪刹次第云、圓通寺東山禾上、諱湛照、諡寶覺、嗣聖一、○元亨釋書湛照傳云、弘安四年秋

八月、盜伺籌室、委順、而化、云云、塔于圓通寺、賜諡寶覺禪師、○濟北集、圓通寺鐘、銘、虎關平安城、東圓通

禪寺、未有大鐘、數更主者、不能舉、此役、今、住持曇公、董山之未、閱三春、鐘已虛焉、不待霜

降、能鳴、吼于四時、屢賀、風吹、遠號、令于八表、烏乎曇公之於、啓發也、可謂勤矣、云云、○京花集、

會、於圓通寺、梵音閣、寺樓看山、橫川笑上、寺樓、俱忘、還、辱顏亦似、故人顏、凭欄、指點雲、飛處、天末何、山是洛山、

○龍吟菴

和漢禪刹次第云、無關禾上南禪寺天授菴、開山惠阜龍吟菴修造化緣、偈并序云、龍吟精舍、當山

第二世大明國師靈塔也、○大明國師行狀云、國師是年十二月十二日、化、収遺骨於惠日山之龍

吟、岡、云云、○五鳳集、狼烟四起、盡閣浮、叢祠凋零、如晚秋、還我檀那大願力、一莖草上現瓊樓、

○自然居士墓 在龍吟菴東谷、○傳云、居、大明國師、弟子云云、

東陽隨筆云、東岸居士自然居士、弟子、名玄壽、字東岸、云云、

○栗棘菴 在二老橋、東、南五大堂、向、

和漢禪刹次第云、白雲禾上、諱愚曉、諡佛照禪師、嗣聖一、○元亨釋書愚曉傳云、永仁五年十二月二

十五日、化栗棘菴、謚佛照禪師、○佛照禪師塔銘云、永仁間謝事、就於城北結草菴居焉、名之曰栗棘、德治中、聖壽寺額、丁酉十二月二十五日、逝、建塔於聖壽寺之西北、

○永明院在_{南門内東南}

和漢禪刹次第云、藏山和尚、諱順空、謚圓鑿禪師、嗣聖一、○萬松集、重賀永明、落成、有永月額、惠日峰前開寶坊、永明宗旨益宣揚、何唯燕雀重相賀、龍象臨筵水月場、

○南明院在_{永明}、秀吉公御妹、天正十八年正月十四日、於聚樂院南隣、薨去、朝日娘、葬于東福寺、號南明院云云、

○俊成卿墓、今在東福寺南明院、永明院一代、分地建南明院、故此墓入南明院地也、○弘安三年八月五日、淨如、置文在_{南明院}、

法性寺俊成卿御はか山林の事、合一ひかしの上のいなりのかへりさかひさもん堂谷へゆき、みちのとほり南へのたにかきりてなり、一南の西東へのたにこいけの上下、南の山きいをかきりてなり、一西の山だのにしきた南へのほりをかきりてなり、一北のいなりのかへりさかのみちをかきりてなり、右の御はか山下地とも此ふんにて候へし後のため注してあり候、かうあん二年八月五日、淨如判○古文書云、俊成卿墳墓事、自月見殿可相計之由承候之際、申付當院候、殊灑掃墓壇、守護竹木、可被訪彼亡魂菩提給也、恐々謹言、八月廿七日、祖禪判、永明院僧衆御中、陀利花定山和尚、○東野州聞書云、或人語し、俊成卿の墓、南禪(東福寺)寺の永明院の奥の山にありと申せし也、此永明院の主にておはします間、毎月廿九日、今も吊奉るとかや、毎朝大悲呪一反有、回向に五條三位俊成釋阿と入よし、やかて彼院の僧申也、○嵯峨記、藤原種通云、東福寺南明院、俊成卿の建立にて侍る、○於永明院俊成卿墓、雪玉集敷島の

道に、おやの親の跡とふをいゑるや露の古郷、實隆、和漢禪刹次第云、南明院業仲和尚

○正統院在_{永明院西}

和漢禪刹次第云、月船禾上、諱琛海、謚法照禪師、嗣聖一、○法照禪師行狀云、禪師延慶元戊申六月廿六日化、云云、正統菴即在_{東福南五社}、唐之東、靈感、兩字台翰也、

○大慈菴在_{南門内}

和漢禪刹次第云、痴兀禾上、嗣聖一、○佛通禪師行狀云、師諱大惠、字痴兀、自號平等、勢州人、姓平氏云云、住_{惠日}爲第九世、塔曰大慈、

○盛光院

勅謚佛印禪師直翁和尚塔銘云、諱智流、佩之、字直翁、云云、元亨壬戌四月十六日寂、云云、惠日山起塔、院曰光明藏、改盛光、塔曰大圓覺、○豐筑亂記云、直翁和尚、聖一國師、徒、元居博多、承天寺、德治元年、大友出羽守貞親請、居豐後國府内萬壽寺、延慶三住持東福、

○莊嚴藏院在_{中惣門内、北中院}

和漢禪刹次第云、莊嚴藏院南山和尚、嗣聖一、○南山和尚行實云、師諱士雲、自號南山、云云、元弘元年癸酉、八十一、上京居莊嚴、○聖一國師年譜云、文永五年、嘗諫議爲長一日、偶會莊嚴藏院、○太平記云、長崎次郎高重、崇福寺、南山ニ參シ、左右ニ揖シテ問云、如何ナルカ、是勇士恁麼ノ事、和尚答云、不如吹毛急、用テ前ニシ、云云、○南山和尚、東福十一世、蓋此和尚乎、

○海藏院在_{二老橋北}

積磔集云、海藏院、虎關自筆ノ元亨釋書アリ、○和漢禪刹次第云、虎關和上、諱師鍊、嗣東山寶覺、洛陽人、貞和二年七月廿四日、六十九寂、○翰林五鳳集、海藏院偶作、虎關南北東西不定窠、一孟三事是生涯、近來自笑如蜘蛛、到晚區々解造家、○同集、過海藏賞丹、月丹丹楓遶岸畫橋橫、寺似塞山地亦清、莫怪忽々不投宿、鐘聲半夜客眠驚、

○菩提院

廣智國師乾峯和尚行狀云、師諱士曇號乾峰、又稱少曇云云、文和四年三月、赴洛、藤丞相呂菩提院爲壽塔云云、塔全身於寶菩提塔曰大定、

○正法菴

和漢禪刹次第云、一峰和尚諱明一、嗣實相、開山應通禪師、謚佛海禪師、○難太平記云、今川莊了俊授得、問相續也、東福寺、佛海禪師、了俊師也、仍彼塔頭正法院、永代進、申也、

○芬陀利華院在中門內

和漢禪刹次第云、定山和尚諱祖禪、嗣双峰、謚普應、圓融禪師、七十七寂、應安七十一月廿六、

○智覺菴在永明院傍

和漢禪刹次第云、智覺菴大道和尚嗣藏山、○智覺菴開山大道和尚行狀云、師諱一以、字大道、姓平氏、云云、閑居永明塔下、

○萬年菴

和漢禪刹次第云、萬年菴友山和尚、諱士德、嗣南山、○友山和尚行狀云、師謝事、臨川佚老、惠

日、東菴菴曰萬年、應安三年六月一日寂、

○退耕菴在海藏院東

性海和尚行狀云、師諱靈見、字性海、自號不還子、云云、退耕煨芋明月之三額、鹿苑院、台筆、昨夢夫翅、師書蹟也、○空花集、春日過退耕菴、呈性海和尚春風處々鬧蜂房、獨愛幽居水竹涼、餅裏黃花秋未老、草頭白露曉逾光、

○南泉菴

古源和尚行實云、師諱郡元、號如幻道人、亦自稱物外子、越前州人、源氏云云、藤丞相慕師再住東福、謝寺事、居南泉菴、貞治三年甲辰十一月十一日、享年七十、

○宗鏡菴

信中和和尚行狀云、釋、以篤字信中、淡州三原人也、俗姓善氏、惠日永明祖、五世孫也、云云、令退居于惠峰、南麓宗鏡菴、

○寶壽菴

和漢禪刹次第云、寶壽菴、東福塔頭鑑翁禾上諱士昭嗣南山、○薩戒記云、應永八年二月廿六日、東福寺邊、花歷覽、圓通寺、菩提院、東林寺、永明菴於常樂院、首座對面、有茶酒、其後向普門寺、西堂種々用意於所々、賦一首、法壽菴瓶花一見、

○願成寺

和漢禪刹次第、願成寺山城州云云、今在東福寺內幻居山人隨筆云、願成寺、夢窓派一條河崎、云云、

○松月菴在海藏院北 ○一花菴在微書記住之

和漢禪刹次第云、一花菴東福塔頭東漸和尚、○東漸和尚行狀云、和尚諱健易、京兆人云云、應永癸卯四月十七日化、南禪之回輝菴、東福之一花菴、即師、塔所也、

○廣脇山通禪寺

園太曆云、平安城廣脇山通禪寺住持臣僧令淬、謹昧死、上書、皇帝陛下、中畧令淬之先師童而習、長而博搜、教乘、旁究、儒術、優柔厭飫、以作釋氏之通史、以為、本朝之光華焉、例以欲入之大藏、行之天下、延文三年十一月八日

○普門寺在天橋北、十刹第六位常樂菴、在方丈傍、額、普門院、無進

桃花藥葉云、東福寺門徒十刹之一也、○和漢禪刹次第云、東山普門寺、破霄山開山、聖一國師 ○元亨釋書云、寬

元四年、大相國以東福、洪營晚成、先立普門寺、開堂令爾居、○普明國師行業實錄云、升普門寺、列于十刹、○宣胤卿記云、文明十三年四月二日、一條禪閣薨、和漢、御才學無比類、諸人所歎也、號後成恩寺、御法名覺惠、九日癸丑行東福寺、聞曉鐘、行普行寺、奉御葬儀、

○寶渚菴

雲章和尚行狀云、嗣奇自扁退居之字、曰寶渚、以附庸于東福之法、其字與凌霄先盧、乃普門之地也

○三聖寺在東福寺北門內、門前有橋、曰絕塵橋、三聖元、天台宗、釋迦阿彌葉云、唐佛、兩金剛運慶作、云云、今北門前云三聖寺門前町、

愛染明王八角堂鎮守稻荷圓通寶覺禪師有像

宜竹集云、東麓山三聖護國禪寺、○或記云、明德年中、鹿苑院義滿公創建、住持靈見云云、○和漢

禪刹次第諸山、三聖東麓山開山東山和尚寶覺禪師、○東福年譜云、東山湛熊慈一、初三聖萬壽兩寺、○元亨釋書云、湛照鄉開三聖之禪苑、乃移焉、正應帝詔入宮問道、照權萬壽、帝賜寺產、○

淨行善行夢中和歌「いささよき人のまゝに行人の善あしもの外ならぬかな」三聖寺支淳

○二樂軒濟北集云、三聖方丈閣上、南軒 ○如意菴在三聖寺內、

海藏和尚紀年錄云、曆應元年三月、解惠日、篆寄居三聖之如意菴、

○萬壽寺五山第五、今在三聖寺內、元在洛中、○拾芥抄云、六條內裏、北、○下學集云、此寺者依爲、六條坊門、南、六條二町東洞院、東高倉二町萬壽禪寺是也、云云、九重內無山號云云、

和漢禪刹次第云、開山十地覺空上人寶覺禪師、塔曰左邊、今改興禪、

○境致

十地超關

萬松集、萬壽域中佳境開、緇林改觀、ナ太時哉、若人聞一即知十、十地超關入作來、

大雄寶殿 新花更雨 枯木回春 東軒 南院 琴臺 鏡沼 三山神廟 千松客徑

京城萬壽禪寺記云、本寺者郁芳門院追薦、道場昔六條也、郁芳諱媞子、白河上皇、長女、嘉保三年八月七日甲子、曉登遐、二十一齡也、九日丙子、上皇不任哀悼而落飾、二十六日、葬蓮臺寺、側、永長二年丁丑、革郁芳遺宮、爲佛廬、俗稱六條、御堂、十月十四日供養、云云、正嘉年中、十地上人曰一覺空、禪師也、與其徒慈一上人寶覺禪師也、修淨土教、慈一聞東福國師、道風、往扣其室、針芥相投、十地亦見國師、遂領玄旨、二師棄教入禪、扁六條御堂曰萬壽禪寺、云云、弘長元年十一月廿四日、寶覺禪師旌禪苑開堂之儀、云云、於是寶覺禪師覺空禪師爲兩開山、文永九年十一月廿四日、

供養云云、元德二年九月廿日、内親王崇明門院諱祿子、后宇多院、皇女、聖母者永嘉門院、新賜寶地廣開紺園、北、樋口、東、高倉、西、東洞院爲界也、元弘二年、前住畊雲原之徒紹臨、奉朝命就彼地、先建報恩精舍、奉安地藏尊容、修薦永嘉門院仙駕、永嘉諱瑞子、中務卿宗尊親王、女、后嵯峨院、孫女、后宇多院、猶子、嘉曆四年八月廿九日升遐、六條、萬壽、與報恩合爲一寺、六條、舊地今號南院、報恩、舊基今日、琴臺、時爲郁芳、仙祠、白河、后宇多等、同嚴追修、寬正五年龍集甲申佛喜日、住持天祐梵猷記、○法皇外記云、寶治帝正元元年三月、皇母藤氏慶六條御堂、號萬壽禪寺、○翰林五鳳集律詩賦、萬壽寺、櫻、勝境元、依辟世氣、惟花又出、紫紅群、千尋湧地枝生浪、一簇擁檐葉插雲、云云、○空花集次韻上萬壽、此山和尚、法席三遷道愈隆、壽峰今不舊時同、寺當第六街中、建、路自九重上通、

○羅刹谷東福寺與泉涌寺之間、溪也、東福、舊圖、有之、今泉涌寺、八景、羅刹、殘雨

元亨釋書延曆寺源心傳云、心出洛城雨天下、有走者、顧視一婦人、顏甚雅、髮長垂、心見其好、不欲近、急趨而過、婦人增奔、相近又泣、心問、何爲泣、對云、我羅刹女也、鬼、長差我、每日覓人捉來爲食、若其不得乃欲食我、今日不得我當失命、願師、法力薦我冥福、不信、我言趁我蹤、必有信、云云、心恠而逐跡、日已暮、女人入法性寺、後、山中、路甚昏、女顧語云、師居此莫近焉、恐暴鬼或擬師、亦恬寂無音、心屏息而聽、不遠而女扣戶、一鬼可畏聲應門、便開扉、赤光迸出、心望之、衆鬼羅刹責女無獲、便拔手足、分啖、心身毛皆立、且悲飯坊、云云、○按、羅刹溪、名昆沙門谷東福寺、北、泉涌寺、山、南云、或云、本尊多門天、像、今在東福寺、常樂菴閣上、或云、東福、西南、隔正覺院、傍昆沙門堂、像、是也、齋藤親基日記云、寬正七年二月初午、東福寺懺法御成、直岩藏井昆沙門谷等、爲梅御覽御

成有之、○應仁記云、泉涌寺雲龍院昆沙門谷、梅坊、百梅ヲ盡ノ木密ニキリ、山ヲ作リテ色々ニ、谷嶺ニコソ通シケル、○小補絕句昆沙門谷看梅、橫川、梅似西湖溪北、方、多聞是、處在堂、高、爲、花、願借護持力、曉溜春風落萼香、○百人一首昆沙門谷紅葉、雲溪、行盡東郊路欲窮、洞門深入畫屏中、楓林影蘸寒溪水、濯出千機錦段、紅、

○奧坊康富記云、在昆沙門谷、奧坊、梅、千代、連歌、作者云云

○密嚴院康富記云、在昆沙門谷、即宗院南谷

光明峰寺本尊昆沙門左、吉祥天女、右、善貳三童子、安阿彌作、緣起云、惠日山、奧昆沙門堂、云云、

○光明峰寺元在昆沙門谷、舊跡、東福、東、偃月橋、奧也

元亨釋書云、圓爾傳仁治二年、大相國乃使、使招爾、二月入京師、大相國於光明峰、別墅延爾問、道、○諸門跡次第云、東山昆沙門谷之光明峰寺者、光明峰寺入道前攝政建立、後鹿苑院相國御祈願所、云云、○聖一國師年譜云、建長四年二月二十一日、藤丞相道家薨、年六十、四條院、外祖、葬光明峯寺、○桃花藥葉云、光明峰寺在昆沙門谷、峰殿御終焉之地、十三重、塔納御遺骨、而應仁之亂、寺家拂地燒失、寺領小鹽庄、○增鏡云、關白殿も光明峰寺にて、結緣灌頂とっておこなひる、○籠り居て侍ける比、光明峰寺入道前攝政の墓所にてよみける、續拾遺、哀なり草のかけにもあら露のかゝるへしといおもひさりけん、九條前攝政右大臣

○柿本里カキノモト

八坂寺文書云、私領合貳段、但稻荷御油段別壹升進之、大江左衛門業尙先祖相傳、私領也、在山城、國紀伊、郡柿本里、自大和大路貞應二年四月十六日 左衛門尉大江判

○柿本社今東福寺中門、北東、側有小社、土塚本、社、疑、柿本社、社歟、

神名帳云、山城國紀伊郡飛鳥田神社、一名柿本社、

○稻荷神社坐東福寺南

神名帳云、山城國紀伊部稻荷神社三座、並名神大、月次新嘗、○神名帳頭注云、本社倉稻魂神也、此神、素蓋鳥、女也、

母大山祇、神、女大市姬也、倉稻魂神播百穀神也、故稻荷、一座素蓋鳥、一座大市姬也、秘中秘也、

以上三座也、○諸社根元記云、下社大宮田中社、○二十二社註式曰、伊弉册尊化神、

中社大宮四大神、○二十二社註式曰、稻倉魂神一名豐字氣姬、命、以呂波字類抄曰、命婦四大神黑鳥、

上社 客神十禪師十禪師者瓊々抄云、小專、伊呂波字類抄云、伊呂波字類抄曰、田中、

元明帝和銅年中、始顯、坐伊奈利山三、箇峰平處、是秦氏、祖中家等、拔木殖蘇也、秦氏人等爲禰宜祝、供仕春秋、祭等、依其靈驗、有被奉臨時、御幣延喜八年、故贈太政大臣藤原時平朝臣、脩造始、件三、箇社者也、○神祇拾遺云、稻荷本緣稻荷者此山地主、神號荷田、神、此處ニ倉稻魂神ヲ祭ル、故ニシカニ云フト、云云、

本殿 宇賀御魂父、地主素蓋鳥、母、又豐字氣、傳大山祇、女大市姬、有之、第二殿素蓋鳥尊 第三殿大市姬已上秘々中、甚深事、

田中社大己貴命 四、大神五十猛命、大屋姬、抓津姬、事八十神、

已上二神ヲ加テ五坐ト稱ス、弘長三年ニ告有テ、文永丙寅正月十六日ニ併奉ル、上中下、

三座、和銅四年二月戊午、日三峰ニ出顯也、

客人 大歲、神併田中、社、故想、于此神降臨、砌、化鶴舍、稻實、來現シテ、而忌獻一切、鳥也、

○上御殿

神祇拾遺云、○中宇賀御魂○上伊弉册尊專女三狐ノ由緣ニ依テ、木狐ヲ安置申

也、二月初午、御祭令、和銅年中、三ヶ峰ニ顯形ノ時、二月初午ニ相當ヨリ恒例ノ祭事改奉

也、倉稻、緣ニ依テ、陶器黍粟等ヲ求テ第一トス、已上

○御倉上、社三座在稻荷本社後丘、

鎮座傳記云、御倉神三座、素蓋鳥尊于宇賀之魂神、亦名專女三狐神、太田命傳同之、○元々集云、御倉神、專女也、○倭姬命世記云、

御倉神、專女也、保食神是也、○山城國風土記云、稱伊奈利者、秦、中家忌寸等、遠祖、伊侶、臣秦公積、稻梁

有富祐、乃用餅爲的者、化白鳥飛翔居山、峰、伊奈利生子、遂爲社、至其苗裔、悔先、過、而拔社

之木、殖家禱命、祭之、也、其木蘇、者、得殖、木枯者、不福、○河海抄云、風土記曰、南鳥部里稱

鳥部者、秦公伊呂具的、餅、化鳥與飛居其、所、森、今、鳥部云云、○南鳥部里、愛宕郡鳥部、條下載之、雖然、于此、南鳥部里者當、

于此、南鳥部里者當、○或記云、智證大師、弘仁十二年夏、參熊野、以顯密法、又奉飾三所、威光、還向

之時、過紀伊國石田河下稻羽里之間、一人老翁多苜、稻二人女、老翁者稻荷大明神、二人、女人

者下中宮、云云、今案、稻荷、社者秦氏、遠祖也、大師熊野還向之時、靈神、路頭ニ奉拜之條、因緣

定、祭、四月、中、○中右記云、寬治八年四月九日己卯、今日稻荷御靈會也、○宜秀卿御教書案云、稻荷

二階、五社敷地、五條以南祭禮役、事、任先例、宛催、可、遂、祭禮、無爲云云、○御位記、天慶三八

廿八、從一位、此後諸神一階度々也、極位勿論也、○三代實錄云、貞觀十六年閏四月七日乙丑、山城國正四位上、稻荷上中下三、名神並奉授從三位、○行幸、後三條延久四三廿六始之、○歷代編年集成云、延久三年三月廿六日、始行幸稻荷祇園兩社、○明月記云、建永元年八月十六日、御幸稻荷、於鳥居、内御禊了、入御奉幣了、命婦御幣了、○續古、われ頼む人のねかひをてらすとて浮世にのこるみつの燈、これの稻荷の大明神の御歌となん○拾遺、われといへいなるの神もつらきかな人の爲と祈らざりしを、長能○夫木、二月やけふ初午のゑるしとていなりの杉のものと葉もなし、光俊

○飛鳥田神社、在上、御殿前、北向、稻荷、地主神也、

神名帳云、飛鳥田神社、山城國紀伊、郡、一名柿本社、○日本後紀云、弘仁七年七月乙酉、山城國紀伊、郡、飛鳥田、

神、真幡寸、神、預官社、例、並、鴨雷、神、別也、

○文殊堂在、本社後、

永享日録云、永享八年十月廿七日、稻荷文殊堂再興之事、伺之、九年四月廿八日、稻荷文殊堂勸進帳、御判被遊、

○田中明神、今坐大和路稻荷社北五町許、

山槐記云、治承二年十一月十二日辛未、中宮告御産氣、着召使并諸人、從者等奉神社佛寺等、神社四十一、稻荷、三所、田中、○著聞集云、和泉式部忍ひて稻荷へまゐりけるに、田中明神の程にて、時雨のし侍けるに、いかへきと思けるに、田かりける童の、あをといふ物をかりてきて参りにけり、下

向の程に晴にければ、此あを、返しとらせてけり、さて次の日式部はしのかたを見いたしてゐたりけるに、大やかなる童の文もちてたすみければ、あれ何ものそといへば、此御文まいらせんといひて、さしをきたるをひろけてみれば、○十抄訓、田中明神の西の程云、「時雨するいなりの山のもみち葉の青かりしより思ひそめてき

○山

枕草紙云、いなりにおもひをこらしてまいりたるに、中のみやしろのほど、わりなくくるしきをねんしてのほるほどに、○扶桑略記云、淨藏、或居稻荷山、護法隱形採花汲水、元亨釋書、○真言傳云、權僧正、稻荷山、僧正、峰の、此僧正行給ケル跡トナン、申傳へ侍ル、○社家説云、山間、有神座、有岩、云雷岩、昔有神僧、兜雷縛此、○異本應仁記云、文明三年、醍醐山科ハ三寶院ノ御領分ナレハ、岩、云、房、崖在、同所、古僧房、跡云、合力トノ赤松武田相扣ヘタリ、爰ニ目付ニ多賀豊後守高忠カ從者骨皮左衛門、尉道源、山科ヨリ稻荷山ヘ打越、社務羽倉出羽、守ト重合キ、山上ノ社ニ陣ヲ取ル伏見、木幡、藤、森、三栖、深草、淀、竹田、鳥羽、法性寺、小路迄、目ノ下ニ見オロシ有ケレハ、大略郷人降参ス、○千載「いなり山ゑるしの杉の年ふりて三の御社神さひにけり、僧都有慶○稻荷行幸の時、夫木「いなり山杉まの紅葉きてみればた、あを地なる錦なりけり、周防内侍

○池、今、本社、東北五六町許入、山中、有池、號新池、又古池在、山、奥、

歌枕「池の面にかけをうつさの稻荷山みつの御垣に波やたつらん

○瀧、本社奥十町許、房、崖有瀧、跡、今水涸、小水而已、此流至、社頭、北、曰、被川、

拾遺「瀧の水かへりてすまの稻荷山なぬかのほりしふるしと思はむ 讀人不知

○坂今日車坂、自東福寺、東南至三峰、坂路也、古、稻荷、行幸、車、經此路云云、又田中社、古在此路云云、

大鏡云、いなりの坂にても、この女とも見奉りけり、○堀川後百首「をそくとく宿を出つゝいな

り坂のはれいゝたるみやこ人かな 兼昌

○還坂東福寺、有從今熊野詣稻荷山路、今日車坂是古、巡路也、世云、弘法大師稻荷社ヲ被遷、于山下、誤傳歟、花山、法皇清少納言ナト猶山へ詣給、事舊記分明也、然山下遷坐年記不詳、

閑居友云、ちかころいなりの返り坂に、岸の上にあやしのこもひとつうちしきて、としいと

おひたる入道たゝひとりゐて、西にむかいてゆふ日をおかみて、さめくとなくあり、○定

家卿文書云、法性寺後成卿、御墓山林の事 ひかしのいなりのかへりさかのとをり南へのたにをかきりて

○崇福寺

正法別傳云、建曆二年冬十月、移崇福寺、俗呼テ曰、稻荷還、坂金、塔、是、

○稻荷山、狐

新猿樂記云、稻荷山、阿小町之愛法ウセテサツホ、ハセテヨロコヒキツネ、破煎喜野干坂、伊賀專男祭、叩イテア、ハヒク、苦本舞、

○深草郷和名抄云、深草郷、伊都郡、藻鹽草曰、源草野、山城、竹田、北、稻荷、曰、此、間、

日本紀云、欽明天皇幼時夢有人云、天皇寵愛秦、大津父者、及壯大、必有天下、寐驚遣使

普求、得自山背、國紀伊郡深草里、○日本紀覽宴「おほかみをたすけて後を大つちか深草より

そなりてたもける 左京大夫源國淵○日本後紀云、延曆十一年八月丙戌、禁葬埋山城、國深

草山、西面、縁近京城、○千載「夕されの野への秋風身にしみてうつらなくなりふか草の里

俊成○六百番歌合、頼戸あけて都のたつみなかむれの雪の梢やふか草の里 中宮權大夫家房

○竹、葉山

新勅「深草や竹の葉山の夕霧に人こを見えぬ鶉なくなり 家隆○雪玉集「山の名の竹の葉わく

る風の音も淋しささな深草の里 實隆

○深草陵諸陵式云、平安宮、御宇仁明天皇在山城國紀伊郡深草山、陵、遺製、薄葬、日崩、御歲四十一云云、 三代實錄云、貞觀八年十二月廿二日癸巳、勅

續日本後紀云、嘉祥三年三月己亥、帝崩於清涼殿、時春秋卅一、 癸卯、奉葬天皇、山城國紀伊

郡深草山、陵、遺製、薄葬、帝王編年記云、三月廿一、 三代實錄云、貞觀八年十二月廿二日癸巳、勅

改定深草山、陵、四至、東至大墓、南至純子内親王、家、北、垣、西至貞觀寺、東、垣、北至谷、貞觀

六月十七日、四至、純子内親王、嵯峨天皇々女、 拾芥抄十陵部云、深草仁明天皇在、 山槐記江次、 中右記云、

天仁元年二月廿二日、今日御即位、由被告申、諸山陵使云云、深草仁明、 向嘉祥寺、從西大門

南行、更願東行、下居山陵、前、先再拜、次讀宣命、次再拜、

○霞谷支以法印下知狀曰、霞田、伏見之内云云、

古今爲家抄云、仁明天皇三月廿一日崩、霞の谷といふ事、帝王の崩御をい昇霞といふ也、かの

帝をおさめ奉る所を、霞の谷といふといへり、顯注密勸、榮雅抄等同之、 ○深草のみかとの御國忌の日よめ

る 古今「草深き霞の谷に影かくして日くれしけふにやいあらぬ 文屋康秀

○後深草陵 諸陵式云、中宮藤原氏在山城國紀伊郡深草鄉、守戸三畑、東限禪定寺、南限大墓、西限極樂寺、北限佐能谷。
三代實錄云、貞觀六年八月三日丁巳、仁明天皇女御正三位藤原朝臣貞子薨、勅贈從一位、葬深草、山陵兆域之内、

○嘉祥寺 舊跡、曰嘉祥寺畑、有戒壇付處、又有號房馬場口所、安樂行院、東南地也、此寺嘉祥年中、草創、後世爲仁利寺、別院云云、今嘉祥寺畑、瓦作者多、居住其村家、中有巨松一株、土人云、是嘉祥寺鎮守社、神木云、

三代實錄云、眞雅表若夫嘉祥寺者、先帝奉爲深草天皇所建立也、○文德實錄云、仁壽元年二月丙辰、是日移清涼殿爲嘉祥寺、堂、此殿者先皇、讎寢也、今上不忍御之、故捨爲佛堂、類聚同三月壬辰、修先皇御忌齋會於嘉祥寺、又云、嘉祥三年三月乙巳、先皇晏駕之後、初盈七日、仍遣使於近隣、七箇寺以修功德云云、紀伊寺 寶皇寺 來定寺 拜志寺 深草寺 眞木尾寺 繪尾寺 ○仁和寺院家記云、嘉祥寺 深草眞觀寺、西院、顯耀律師 少納言入道藤通、憲息、覺耀、律師、付法、當寺、別當。 ○今物語云、嘉祥寺僧都海惠といひける人の、いまたわかくて、やまひ大事にてかきりなりける比、ぬいりたる人にはかにおきて、ふしきの夢を見たりつるとてかたられける、おほきなるさるの、あゝすりの水干きたる、たて文をもちて來つるをみつれば、歌一首、「たのめつゝこぬ年月をかさぬれば朽せぬ契りいかゝむすはん」とありつれば、われ御返事には、「心をはかけてを頼むゆふたすき七のやしろの玉のわかきに」とかきてまいらせつる、これは山王よりの御歌を給りて侍る也、

○塔 元亨釋書云、元慶八年六月、起塔于嘉祥寺、

三代實錄云、元慶八年六月廿三日壬子、勅、以近江國米百五十六斛、丹波國米三百七十九斛、眞觀錢十二貫文充嘉祥寺造五重塔料、

○眞觀寺 嘉祥寺西、今深草郷、内有僧房村、按、嘉祥寺、眞觀寺、等、僧房、跡歟、

三代實錄云、貞觀十四年七月十九日丁亥、眞觀寺申牒、天安三年三月十九日、依大僧都傳燈大法師位眞雅表請、賜年分、度者三人、嘉祥寺、彼時眞觀寺建立之初未定其名、因假嘉祥寺爲年分、號、即稱西院安置度者、貞觀四年七月二十七日、以嘉祥寺、西院號眞觀寺、十六年三月廿三日壬午、詔於眞觀寺設大齋會云云、其願文曰、夫眞觀寺者先皇仁壽之初、今上降誕之日、星垂長男之光、日有重瞳之慶、故太政大臣美濃公、憂龍姿之不免、在襁褓、憐鳳德之未得勝衣、與僧正眞雅和尚、私皆謀、使念諸佛之加持、修眞言之秘密云云、爰命輪材、構毘盧舍那之寶塔、造尊勝如來之金像、并立灌頂堂一字、太政大臣生存之日、更建一堂、奉造釋迦丈六梵釋四王像、皇太后別立西堂安置金剛界、曼荼羅、僧正眞雅和尚又立東堂安置胎藏界曼荼羅、○元亨釋書眞雅傳曰、貞觀帝降誕之初、入宮加持、相國忠仁公與雅建精舍安置尊像、祝寶祚也、後勅名眞觀寺、

○法勝院

仁和寺院家記云、法勝院俊玄法印、深草眞觀寺内也、

○深草墓 諸陵式云、贈正一位藤原氏、陽成太上天皇外祖母、在山城國紀伊郡守戸一畑、

三代實錄云、元慶元年十二月十三日己卯、勅、定每年獻荷前幣五墓云云、贈正一位藤原氏墓

在山城、國紀伊郡、

○深草殿

帝王編年記云、弘安五年六月十四日、本院御幸深草殿、

○後深草院法花堂

增鏡云、嘉元元年七月十六日、法皇後深草かくれさせ給云々、又の日夜に入て、源草殿へいてわたり奉る云々、院の御まへ宮たちなど、御車にたてまつりて、伏見殿へ御をくりもせさせ給ひける云々、後深草院とときこゆめる、御日敷の程り、伏見殿に宮たち遊義門院などおひします、○紹運録云、後深草院嘉元二七、葬深草山、○園太曆云、康永四年七月十六日、上皇御幸深草法花堂、八月八日、山陵使、深草後深草院伏見院、使侍從三位實益卿也、○康富記云、山陵使後深草院法花堂、○後深草院かくれさせ給うける比、深草へ御幸侍けるに、霧のふかく立て侍けれり、新干「消はてし煙のすゑの面かけも立そふ霧のふかくさの山、伏見院○八月はかり後深草院法華堂へはしめてまいり侍けるに、いまたふみなれぬ芝の下道を、はるくくとわけて侍に、御堂にまいりつきなん、あはれもろく」に思ひやられて思ひつゝける、玉葉深草の露ふみわくる道すから莓の袂をかつはれゆく、入道太政大臣

○伏見院法花堂園太曆云、後深草院、伏見院、後伏見院、御同所云々

帝王編年記云、永仁六年十月十七日、上皇於伏見殿御出家、法名素融、年四十九文保元年九月三日、崩于持明院、御年五十三、○四日今夜御葬送伏見殿、奉號伏見院、○紹運録云、伏見院葬伏見里、

○後伏見院法花堂

園太曆云、貞和四年四月六日、今日後伏見院十三回、御忌辰也、幸深草法花堂云云、澄俊法印御導師、御願文在成卿草之、清書行尹卿也、此妙行者廣義門院御願、上皇御供行之、○後伏見院かくれ給て後、仙骨を從三位守子墓所にならへてをき奉るへきよし、御遺誠に任せておさめ奉るとして、風雅「をく露もひとつ蓮にむすへとや煙もおなし野へにきゆらん、清空上人

○眞宗院元在深草、郷、此院退轉歷年、然二近、○開山立信上人、號圓空、師事西山善惠上人、證空、修鍊淨土、法門、第一世道教上人、師資、塔有之、眞宗院、舊額、圓空上人、像在、方丈、

圓空上人傳云、釋、立信號圓空、就洛南、艸山、勸眞宗院、寶治上皇勅建、佛殿山門經藏等、又構般舟堂、令修念佛三昧、弘安七年四月十八日化、○園太曆云、文和二年七月卅日、竹林寺導宗上人來謁、云云、同法導朝上人管領深草、佛閣已下欲失墜、之由歎申之、誠不便之事歎、○夫木「咲ないと契し日より深草の花やみやこの人を待らん、圓空上人○建治三年八月、圓空上人の深草の庵室にて、月前懷舊といふとを、新干載「めぐりあふ影の昔のかたみそとおもへり月の袖ぬらすらん、前大納言爲氏○眞宗院兼空上人をとつれ侍る次に、草庵「まれにみし人もも今いむかしにて野となりはつる深草の里、返し「深草の里の野原とあれぬとも住こし代々の跡や尋ん

○歡喜心院號龍護田、元在眞宗院北、隣、今寺終爲田畝、名、

仁空上人記云、歡喜心院、善惠上人、草創也、○西山上人傳云、白河龍護田、歡喜心院、云云、按、鴨川以東

此邊迄白河、云歟、龍護田、佛殿、號也、蓮門宗派云、歡喜心院深草云、歡喜心院、本尊彌陀三尊、今安置眞宗院、本堂、○蓮門宗派云、道教上人、圓空、弟子、深草龍護殿長老、○西山上人傳云、白河、龍護田ノ歡喜心院ヲ勅願寺後嵯峨院トシテ、不斷梵網經ノ讀誦ヲハシマラル、江州小野在ヲ料所ト定メラレケル、釋迦彌陀丈六ノ金像ヲ本尊トス、○園太曆云、延文四年四月十五日丁丑、余依年來之素懷、可遁俗塵之日也、及戊刻和上歡喜心院號龍護田長老道宗上人交名入來、剃手、遣迎院長老法位、自竹林寺來臨、

○安樂行院在眞宗院、西北森、內、古木陰森、法花堂、在外門、內東、方、奉、取、仙骨、地云云、土人曰、仙骨堂、已前、有小塚、近年其上建、小堂、本院者久、遺轉、此一室相殘計也、、

菅原和長卿明應凶事記云、後土御門院、明應、九年九月廿八日、崩御云云、十二日、今朝即取骨儀也、上卿甘露寺、中納言傳、凶事、即有分散儀、一分如例、上卿持之、納筥掛頸云云、奉籠深草、法花堂此法花堂者安樂行院、內、一堂也、於河堂、修行兼帶法花堂云云、、

○二水記云、大永六年四月七日卯刻、後柏原院崩御、御歲六、五月三日、夜、喪禮御幸、泉涌寺、四日巳刻、源宰相中將乘輿掛御骨於肩奉、深草云云、○後奈良院御拾骨記云、

弘治三丁巳年九月五日崩御、六十一歲、同十一月廿二日、御閣維、傳奏柳原殿、同廿五日卯時、御拾骨、傳奏廣橋殿、傳奏ハ即直、ニ深草、安樂行院ニ御骨奉納也、○御ゆどのうへの日記云、

元龜三年十二月廿二日、ふし見のはんぢゆゑん御くわんぢゆゑん、ふかくさのあんらくきやうるんよりも御くわんぢゆゑん、

○平中納言亭

帝王編年記云、弘安四年四月十一日、本院御幸前、平中納言深草亭、

○大納言時繼山庄

長月の比、伏見殿にまいりけるか、前大納言時繼深草山庄に、一夜とまりてかへるとて讀侍ける、玉葉、かりにきてたつ秋霧の明ほのにかへるなこりもふか草の里、前關白太政大臣

○中納言顯長卿墓

父の中納言昭長か墓所の堂、深草の里に侍りけるにまかりてよめる、千載、年を経て昔を志のふこゝろのみうきにつけてもふか草の里、法眼長直

○極樂寺拾芥抄云、昭宣公、阿彌陀、深草郷、內有極樂寺、今、寶塔寺、門前也、稻荷、與極樂寺村間、有大門、鐘樓等之名、又寶塔寺、西南、有瑞光寺、明曆元年、元政上人、所創也、此地號藥師堂、是極樂寺、藥師堂、遺址也云云、

青蓮院門跡次第云、覺快法親王極樂寺、別當、慈鎮和尚同上、○大鏡云、昔もかゝる事、おほく候、おとなひさせ給へるたにも、おほしよらん程なへてならずおほえ侍るに、いつれの時とはたしかにえき、侍らす、た、深草の御程にやなどと思ひやられはへり、芹河のみゆきせしめ給ひけるに、昭宣公重殿上につかうまつらせ給へりける、みかど琴をわはしける、此ことひく人の、へちのつめつくりて、をよびにさしいれてそひくことにてはへりし、扱もたせ給ひけるをおとしおはしまして、大事に覺しめしけれと、又つくりせ給ふへき様もなかりければ、さるへきにそ思召よりけん、おとなしき人々に仰せられで、おさなくおはします君にしも、もどめてまいれとおほせられければ、御馬うちかへしておはしければ、いつこをはかりともいかてか、尋させ給はん、見いて、まいらせざらん事のいみしうおほしめされければ、是もどめ出たらん所には、一伽藍たてんと願しおほして、求めさせ給ひけるに、いてきたる處

新加通記第十八 山城名勝志卷十六

そかし、極樂寺はおさなき御心に、いかてかおほしめしよらせ給ひけん、さるへきにて御爪もおち、おさなくおはします人にも仰られけるにこそはへりけめ、河海抄、花鳥餘情、袖中抄等同之。○花鳥餘情云、李部王記云、承平二(三)年三月廿七日、皇太后穩子號、七條后於極樂寺、先考太政大臣昭宣公及先妣王氏人康親、王女追福修法會、○細流云、極樂寺代々攝家の墓所也、古今深草の山けふりたにて、とよめるも此處也、○菅家文章爲左大臣、請欲以極樂寺爲定額寺狀、昌泰二年右臣亡考昭宣公、占山城、國宇治郡、地有意欲、建立極樂寺、本尊且現、堂構未成、募金沙以揚名、先白露而殞命、臣思述其志、入載于今、云云、○本朝文粹、慶保胤極樂寺者、東山勝地也、寺之西北有一仙洞、蓋象外之境、壺中之天也、中起高堂、大悲觀世音爲中尊、西置禪房、傳法阿闍梨爲本主、堂、巽有碧羅山、雖少而其勢如對千萬尋、山中有瀑布泉、雖細而其聲可聞、一二里、云云、○朗詠極樂寺建立願文、保胤佛土之中、以西方爲望、九品蓮臺之間、雖下品應足、○極樂寺わたりにこうくうち侍しに、紅葉ちりてまからむと人にいひ契りて、その日さはることありしかは、えまからていひつかはし、家集吹風のたよりにもしや聞てけんけふと契し山の紅葉々 元輔

○塔 或年代記云、應仁二年八月四日、大風、極樂寺十三重、塔吹折、

○竹林院

扶桑略記云、天曆九年六月九日、大僧都禪吾入滅、以極樂寺、竹林院爲終焉、地、春秋八十二也、俗姓藤原氏、左京人也、

○寶塔寺 在稻荷社東南五町許、土人云、此寺元在極樂寺村、北與稻荷社間大門、云、是極樂寺舊跡也、此寺從長桂至七世中絶、然日鏡上人弟子日鏡、天正年中再興、爲妙願寺末寺、其時移山上、云云、

縁起云、日像姓平氏、下總國葛飾郡平賀人也、母千葉氏、建治元年投日朗之室、時年七歲、永仁元年、吾當往帝都、大振宗風、是豈不我師之素願、二年遂至洛下、立十字街頭、發大音聲、唱題之、自此日々東唱西唱、勸誘貴賤、折伏緇白、於是誹謗鋒起、或信受者亦多、其後諸宗之徒數訴朝、德治二年、詔逐師出都、凡三黜、延慶三年、避帝都、泛西海、既過向日、神祠時有一老翁、忽然而來、見師謂曰、吾欲與師言、乞少留此、師知其非常人也、即寓止神祠、其地曰鷄冠井、遠近信伏者日衆、城南深草極樂寺、僧良桂、偶過鷄冠井、聽師議禪律等之宗、即出衆辨、桂也律宗、巨擘也、問難往反、盡三晝夜、桂遂心服而爲師、徒、桂之極樂寺、徒甚衆、其中或論而服、信而隨者凡一百餘人、而極樂寺師之時不易、寺號於後葬師於此山、改鶴林院、日堯上人又名寶塔寺、

○金剛壽院

園太曆云、文和四年九月四日、保安寺法皇、去月晦日御移住深草、金剛壽院、花山、內府入道着黒衣參候、其外僧衆廿人許祇候、一向爲叢林儀、

○大日寺 不知大日寺舊跡、載拾芥抄諸寺部、按、深草、極樂寺、真觀寺等、邊歟、

今昔物語云、大日寺ニ廣道ト云僧有、俗姓ハ橘氏、寺邊ニ老嫗有、男子二人僧ト成、比叡山ノ僧也、兄ヲハ禪靜、弟ヲハ延睿ト云、其母死、此二人ノ僧法花經ヲ讀、念佛ヲ唱テ、母ノ往生極樂ヲ祈ル、廣道カ夢ニ、極樂寺貞觀寺ノ間音樂聞ユ、廣道驚テ行テ見レハ、微妙ノ寶ヲ以テ莊レル車有、多ノ僧香爐ヲ捧テ、車ヲ圍達ノ、死タル老嫗ノ家ニ至テ、嫗ヲ呼ヒ出テ、天衣寶冠ヲ著

セテ、此車ニ乗セテ、返リ行ナムトスル時、二人ノ子僧ニ告テ宣ク、汝等母ノ爲ニ、勲ニ母ノ往生極樂ヲ祈ルカ故ニ、我等來テ迎ル也、ト車ヲ圍遶シテ西ヲ指テ去ヌ、同之、往生傳

○普明寺 元在深草、今田地字曰普明寺、聖寶尊師、草創也、和州法隆寺、記云、今、講堂、移、山城、普明寺、堂云云

醍醐寺緣起云、於普明寺造、八尺、四天王、像、并書寫五部、大乘經等、即供、大會、此、日本上法皇御幸、又曰、延喜九年七月六日、聖寶化、深草里普明寺、元享釋書 ○密宗血脉抄云、聖寶深草里普明寺而遷化、云云、入棺、後怪事アル故ニ、開棺奉見、忽然不見、只幡計殘、云云、私曰、深草、而度天之時、於岩上、留、双履、名其處、號、履之鼻、云云、可尋知者也、

○道澄寺

拾芥抄云、道澄寺、道明澄清二人、合力建立、 ○日本紀略云、延喜廿年六月十七日、大納言兼民部卿藤原口道明薨、年六十四、藤原系圖云、道明、巨勢、四世孫、保隆男、扶桑略記云、延長三年五月六日、中納言從三位橘朝臣澄清薨、十七、日本紀略同之、 ○野府記云、寬仁二年十一月十三日辛未、先妣遠忌、修諷誦、道澄寺、○道澄寺鐘銘云、道澄寺者從二位守大納言兼右近衛、大將行皇太子、傳藤原、朝臣參議左大辨從四位上兼行勘解由、長官播磨權守橘朝臣、爲報四恩、濟六趣、合誠勳力所建立也、堂宇比甕、南北輪奐、尊像接座、前後踟躕、兩相公宿殖香火之緣、生爲瓜葛之戚、非唯現世結契、闊之情、亦欲淨刹共安養之樂、故各取其名首字、以爲此寺、額題、所以貽本緣於來代、期同志於他生也、藤亞相爰命鳥匠、乃鑄鴻鐘、且將令長夜、昏迷、聞妙聲、而知曉、苦海、沈溺、驚梵、叫而通津、延喜十七年十一月三日銘之、○鐘銘集云、此鐘今在和州榮山寺、昔深草道澄寺、鐘也、云云、深草志同之、

○拜志鄉 和名抄云、紀伊郡、又久世郡有同名、 ○拜志寺 文德實錄、深草陵、近隣七箇寺、一也、

玄番寮式云、凡近都、諸寺、東、拜志以北、西、石作以北、停預、講師、僧綱、檢察、

○眞幡寸神社

神名帳云、眞幡寸神社二座、紀伊郡 ○日本後紀云、弘仁七年七月乙酉、山城國紀伊郡飛鳥田神、眞幡寸、神、預官社、例、並鴨別雷、神之別也、安樂壽院莊園、內、山州眞幡木、岸川、上三栖、已上見于文明、天文、繪旨等、

○藤森神社 坐大和、大路、東伏見、北、

○本宮 二座、神號、不詳、

社家說云、當社、本宮二座、新宮三座也、兼右、緣起、神護景雲年中垂跡ト云リ、是本宮、御事也、又早良親王、御崇敬異于他、下書ルモ同神ノ儀也、兼邦百首歌抄、抄二、神功皇后御旗ヲ深草藤社ノ社ニ納ラルト云云、當社神主、宅、後園ニ旗塚ト云有、每歲十一月朔日注連ヲ引、同二日神供ヲ獻テ祭之云云、或云、本宮、眞幡寸神社二座、云云、

○新宮三座崇道天皇 早良親王、井上内親王、光仁、 又配祀本朝武功神、所謂神武天皇、神功皇后、日本武尊、武内宿禰等也、故號弓兵政所、今所祭凡十三前云云、當社神物中、以板製、札有二片、表文弓兵政所、裏文治承四年月日、文字滅不見、又一片表文同前、裏文嘉慶年中文字分明也、當社應仁年中燒失、文明二年再興、勸進聖釋、讚阿化緣、疏、相國寺惟高和尚所筆也、又云、當社境內、有小社數多、昔豐臣秀吉公伏見御在城、時、近邊多封侯、館亭、其中有小社數多也、其、後被遷、彼、小社于藤森、申昔每社有社領也、今其、儀絕矣、神名又不分明、

神祇拾遺云、藤社 舍人親王 藤光廣卿、百人一首抄同之、 ○兼邦百首歌抄云、神功皇后異國降伏、時、御旗一流、上洛、後納ラル、所ハ、深草ノ藤社社是也 ○諸社根元記 藤森、緣起、云、當社三所、天王者、神護景雲年中、山城、國紀伊郡藤、尾之靈地、垂跡、シテ、者也、人皇四十九代光仁天皇第二、皇子早良親王、年來御崇敬異于他、爰元應元年四月一日、超御兄山部、親王立太子、今年異國蒙古責來之由有風聞、以立太子、爲大將軍、可有退治之由有宣旨、依之立太子、大軍勝利、事、被祈申當社、同年五月五日、御出陣之處、大風吹降而大海翻、波浪、伴、蒙古不及一戰、悉以令滅却、畢、以此因

緣、毎年五月五日祭禮、神幸之時、在地之神人等、鎧甲冑帶弓箭列騎馬云云、自爾以降、洛中洛外至邊土遠國、小男童兒、帶作太刀刀等、以菖蒲飾之、稱菖蒲甲、是則當社祭禮供奉、行裝也、依此等、本緣、以當社奉號弓兵政所也、早良親王延曆四年御早世也、御兄山部親王即位、桓武天皇御事也、為被鎮申早良親王之御怨靈、有追號奉稱崇道天皇、後日被贈正一位、七月十五日、於當社、庭中燈大立松事、為崇道天皇、法燈云云、又說、為蒙古追善云云、兩說古傳也、弘仁七年、弘法大師、稻荷大明神為勸請、藤森天王、敷地之所望之由、被達叡聞、被伺申當社、神慮之處、可奉借之由、依有神託、三山之麓勸請之、自爾以來、號彼所於稻荷矣、五十町四方、依為天王敷地、近鄉井京中、自五條至九條、住民等悉以為當社、氏子、稻荷、社人等同前也、雖然於京中、氏子者被寄稻荷之社、依之五月五日、神幸奉成京中者也、神祇長上卜部朝臣從二位兼右

○大日堂 在本社東、弘法大師被寄當社於舍利、其舍利今納大日像腹心云云、
藤森社緣起云、弘法大師敷地借用為報謝、將來佛舍利三國傳來之旨、被染空海自筆、相副本尊大日像、被奉寄當社、宮中、舍利塔是也、云云、

○本地堂 在本社西、藥師十二面文殊、
藤森社緣起云、三所、天王、御本地、本社藥師西、御前、十一面東御前文殊、○百練抄云、天永元年七月卅日、諸卿定申僧靜實、罪名云云、奉咒咀公家、理壓物於藤社、社之故也、○康富記云、應永八年五月五日、癸巳今日深草祭見物、於九條殿見之、○新六帳、深草は名のみなりけり藤の杜春を

かけてそ花咲にける 信實 ○康平四年三月祐子内親王家名所歌合「むらさきの雲とそよそにみえつるは木高き藤の森にそ有ける 小侍從 ○藤の森にて 自然齋發句帳「夏かけて藤さく杜のわか葉かな 宗祇

○御旅所 凡滑谷、シルタニ邊、迄藤社、神地也、昔、御旅所在大佛殿北、秀吉公大佛殿草創、時荒廢、滑谷道西、端役也、今、祭、日、橋、南邊武鶴、タケノ、社、藤社末社、アリ、此邊迄神幸奉成許也、
藤尾 今稻荷社、地是也、元藤社、社在此、此處、稻荷社、從山上被遷山下、時、藤社、社移、今、地、故、藤尾社、緣起云、山城國紀伊郡藤尾之靈地、垂跡、云云、然則藤尾社、藤社、神ナルヘシ、
藤尾社歌合 夫木、深草やふりにし里のあれしより今は野に出て鹿を鳴なる 少將内侍

○舍人親王墓 稻荷社家説云、在、稻荷大鳥居、與、樓門、間、 ○墨染 今伏見北藤社西南、曰、墨染、其所有、墨染寺、前庭、有、櫻樹、一株、呼、墨染櫻、
梅花無盡藏 同洛社、諸友、遊、深草、看、墨染櫻、城南、深草宮、有、洛下傳、名墨染、花、風吹、一片、點、袈裟、野禽、有意、低、聲、説、先帝、曾、停、行、幸、車、深草、蓋、先帝、御遊之地也、○ほり川のおほきおほいまうちきみ身まかにける時に、深草の山におさめてけるのちよみける、古今「空蟬はからを見つゝもなくさめつ深草山の煙たにたて 僧都勝延 ○同、深草の野へのさくらし心あらはことしはかりは墨染にさけ かんつけのみねを 寶物集云、草本心なしといへとも、物の哀を去ればこそその春はすみそめに咲けると也、今に深草の墨染櫻とて有、○按、諸陵式、基經公、墓在、宇治郡、云云、深草山、紀伊郡也、隣、宇治、郡、但、屬、同、郡、歟、

○冬嗣公深草、別業
日本後紀云、天長三年七月己丑、左大臣正二位藤原朝臣冬嗣薨、年五十二辛卯、遣使就大臣深草、別業、詔、云云、贈正一位、葬于山城國口口郡深草山、云云、

○柏原野

類聚國史云、延曆十四年八月己巳、遊獵于柏原野、

○柏原陵 將陵式云、平安宮御宇桓武天皇、在山城國紀伊郡、埜城東八町西三町南五町北六町、加丑寅角二、峯一、谷守戸五、烟、

江次第云、柏原陵、在伏見山、從東邊二町許入、○豐臣秀吉公、從深草谷口到勤修寺、開新道給、是曰大龜谷越、在稻荷山、南、野、拾芥抄、同之、深草志云、谷口山、有向力原、云者是柏原陵、舊跡歟、云云、

○山槐記云、治承四年七月廿一日辛未、於福原被立、山陵使、被告、申御即位之由也、●山階●

柏原 伏見山、松、●嵯峨 在嵯峨野、●深草 在嘉祥寺之内、●後田邑 在仁、●後山階 醍醐、北、●村上 仁和寺、●安樂壽院 實檢言上、

鳥羽東、廿三日癸酉申、刻、著古河、向深草堂、行水裝束、日沒已入、伏見、柏原、○仁部記云、實檢言上、

檢言上如、件、抑山陵登十許丈、壇、廻八十餘丈、但於陵中者不及、實檢、仍注、アルカガチ、在狀、謹解、文永

十一年十一月廿九日、頭賀茂朝臣在爲左、○類聚國史云、延曆二十五年三月辛巳、天皇崩於正寢、春秋

七十、歷代編年集成、四月甲午朔御諡上、稱、曰久、日本根子皇統彌照、尊止稱白久、大同元年四月庚

子、葬于山城國紀伊郡柏原山山陵、歷代編年集成云、八月七日、十月庚午、改葬皇統彌照天皇於柏原陵、

○報恩寺 號、桓武天皇、柏原帝、

三代實錄云、貞觀四年十月七日壬子、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮、大夫伴宿善男奏禰

言、請捨、山城國紀伊郡深草、鄉、別墅爲、塲道賜、額報恩、云云、詔許之、類聚國史、九年十二月十

八日癸未、庶人伴、善男建立、道塲、在山城國紀伊郡柏原、山陵兆域之内、勅令、移却、

○伏見 坂津里村小野、○東限 本幡、六地藏村、南限、宇治川、○西限 三栖、芹川村、北限、深草、里、

勅撰名所和歌抄云、伏見山野、宇治郡云云、○今、伏見、東、迄六地藏町、屬紀伊郡、隔櫃河、東、方六地藏村、○

袖中抄云、伏見と云所山城國深草の南に侍れと、菅原の伏見の大和國にあり、○古今爲家抄云、

こわたにもふしみといふ所あれども、これにて有へからず、又云、すかいらの伏見の大和國、

くれ竹のふしみい山城國也、○井蛙抄云、伏見山、伏見田居のみな山城伏見也、新古今ふしみの

野への草枕と侍るも、山城のふしみなり、○風雅、伏見山あら田の面の未晴てかすまぬしもそ

春の夕くれ、伏見院○新後拾、ふしみ山かと田の霧の夜をこめて枕にちかきさきの羽かき光

嚴院○新續古、百首歌奉し時、伏見山むかしの跡の名のみしてあれまくおしき代々の故郷、無品

親王○中右記云、嘉承元年十二月十六日、殿下御春日詣也云云、九條、南、程日初、出、深草之間

左兵衛督能實被、參加、於、伏見、北坂、邊、右大將追被、參也、○二水記云、永正十五年六月十四日

月下近邊徘徊、於、伏見坂、前、芝、飲、酒、○東鑑云、承久三年六月十四日、芝田橋六兼義、春日、刑

部貞幸等、更、命、爲、渡、宇治河、伏見津、瀨、馳、行、○薩戒記云、應永卅二年四月十三日、自、内、裏、

遣、三、條、中、納、言、公、保、勘、解、由、次、官、籠、景、等、於、伏、見、入道無品親、催、漁、人、等、取、乘、船、七、八、艘、於、伏、見、津、

令、漁、是、取、生、魚、爲、被、放、内、裏、御、池、云、云、○五社百首、ふしみ津やさはたの早苗とる田子は袖

もひたすらみしふつくらん、俊成

○伏見津田

或記云、永祿十一年正月、三好左京大夫義次、伏見ノ津田へ入城ス、

○村

日本紀云、雄略十七年三月戊寅、詔土師連等使進應盛朝夕御膳、清器者於是土師連祖吾
 筥、仍進山背、國內、村俯見村云云、因幡、私民部、名曰贇土師部、○中務親王家歌合「見渡せはふし
 みの村の夕霞たかかへるさの道まどふらん 基長○里竹といふ事をよませ給ける、新續古
 「いつまてか里の名におふ吳竹のふしみにのみも我世つくさん 崇光院○新拾遺「冬の夜の
 寒けき月に數見えてふしみの澤にわたる水鳥 乗功法師○草根「松かけもあくる伏見の岡の
 へに竹のよふかく月を殘れる 正徹○千五百番「五月雨はふしみの田井に水こえて庭まてつ
 くうちの川なみ 隆信

○城 豊臣秀吉公譜云、文祿三年、築城于城州木幡、伏見、○或云、文祿二年、秀吉公築樂亭御退居、儲二被造云云、
 城(豊後橋東北月橋院)上方也、同三年、造華ノ、慶長元年、伏見、南、向島ニ被構出城、與本城ノ間ニ被渡橋、
 同年閏七月二日、大地震本城、天守并殿宇顛倒ス、ト云云、(今、江戸町此城、圍ノ内殿、此地ニ石灯笼ノ顛倒セル
 有、大尋常ニ過ク、彫工絶妙也、土臺谷ニ落破テ二分トナル、笠岸ニ殘ル、按此所城ノ舊地ニ、地震ニ倒シ儘ニ殘
 ル歟、)向島ハ宇治川岸ヲ廻リ、新築ノ故カ、石垣ユリ込、殿宇モ皆顛倒ス、於此秀吉
 公同月廿日ヨリ、城地ヲ替、木幡山ヲ點シ被營造云云、(今、伏見、城山其跡也)

二〇花園左大臣山庄

夫木「めつらしき松のねくらをまめをきて伏見にきたる鶯の聲 花園左大臣家小大進 此歌
 の、むつきついたちころ、花園左大臣、はしめてふしみの山居にわたり侍て、松上鶯といふ事
 を人々よみけるにと、云々、

○俊綱朝臣伏見家

續世繼云、伏見のすりのかみとしつなときこえしは、宇治關白殿の御子と申侍れ、その御母
 祇子は贈二位讚岐守橘としとをどあひくし給へりければ、俊綱の君御子にておはしけれど、

けさやかならぬほどなりければにや、猶としとをのぬしの子の定にて、橘の俊綱とてそおは
 せし、云云、又云、白河院一におもしろき所、いつことあると問せ給ひければ、一にはいした
 (石田)こそ侍れ、次にはと仰られければ、高陽院を候らんと申に、第三に鳥羽ありなんやと仰
 られければ、とは殿は君のかくまなさせ給たれ、これを侍れ、地形眺望などいとなき所也、第
 三には俊綱のふしみや候覽とを申されける、(頼通公詞)こと人ならぬいと申にくき事なりか
 し、高陽院にあらて、平等院と申人もあり、伏見に山道をつくりて、まかるへき折節に、
 旅人を去たて、とをされければ、さる面白き事なかりけり、又云、四條の宮の女房あまたあ
 そひて暮ぬさきにかへり給ければ、後拾遺「入」都人くるれにかへるいまよりの伏見の里の名
 をもたのまし 修理のかみ○橘俊綱朝臣の伏見の山庄にて、水邊櫻花といふ事をよめる、
 詞花「池水のみきいならずの櫻花かけをも波におられましや、源師賢○俊綱朝臣ふしみの
 家にうへんとて、かつらをこひて侍りければ、つかいすとてよみて侍ける、 月詔和歌集「瑞籬
 のかつらをうつす宿なれば月みんとそかつまかるへき 賀茂成助○中右記曰、寛治八年七月
 十四日、今夕入道橘、俊綱卒去、年六十七、正四位上修理大夫近江守也、頭辨師頼朝臣左京權、
 大夫俊頼朝臣、爲彼、人爲養子、

○伏見寺 拾芥抄云、即成院、○修理 ○元在伏見即成院村、今云、江戸町是也、伏見山、西南、文祿二年、豊臣秀吉公
 大夫橋、俊綱朝臣建立、被築、城、伏見時、被遷、即成院于藤、森、東大橋谷也、寺有本願俊綱朝臣、
 塔、土人此塔曰、那須、與市宗高塔、謬傳歟、○本尊彌陀、像、惠心僧都命、佛工定朝所、刻也、
 云云、後白河、院、皇女宣陽門院、被寄、下野國那須、庄、當寺云云、因、茲有那須、名乎、
 ○護法寺 此寺燒失、後、範家卿、男平、親範、入道圓智、出雲、
 路、建、毘沙門堂、擬、護法寺、故、又載、洛陽、卷、

毘沙門堂記録云、護法寺亡父三位入道範家建立、禪門知行伏見庄居住此寺、而平治、逆亂出來之後、應保元年、壞渡北石藏師頼卿息三井寺、同二年、被遂供養、以隆賢補別當職云云、金堂丈六三躰大日釋迦樂師

○伏見殿

百練抄云、建長七年八月十日甲戌、上皇御幸伏見殿、御傳領之後初度也、○增鏡云、弘安元年九月南院ひとつ御車にて伏見殿へ御幸なる、秋山のけしき御覽せさせんと云々、野山のけしき色付わたるに、伏見山田面につくうち川の波、はるくと見わたされたる云々、又の日いふし見津に出させ給ひて、鵜舟御覽、○園太曆云、延文元年八月廿一日、傳聞、伏見殿洪水珍事之間、女院俄渡御上、御所下、御所者大略成水、底下訖、○續神皇正統記云、康永元年九月六日、仙洞持明院殿より伏見院御幸、○椿葉記云、延文二年二月十八日、上皇崇光いふし見のりくうに還御なる、閑素にてまします、兩法皇光嚴光明もせんはう萩原殿もみな還御なる、續神皇正統記同之○太平記云、此離宮ハサシモ紫樓紺殿イロト彩リ、奇樹怪石ヲ集テ見所有シ柄堀ナリ、○長月の比、伏見殿にまいりけるか、前大納言時繼深草の山庄に一夜とまりて、かへるとて讀侍ける、玉葉かりにきてたつ秋霧の明はのにかへるなこりも深草の里、前關白太政大臣○無品親王伏見に侍し比、雪のあしたにと柴に雉をつけて奉るとて、御狩せし代々の昔に立かへれかた野の鳥も君をまつなり、と奏し侍し御返事に、新續古みかりせし代々のためしをるへにて交野の鳥の跡を尋ん 今上

○光嚴院

或云、元在伏見城山

太平記云、光嚴院禪定法皇、南山ヨリ還御、後、伏見ノ奥光嚴院ト開ヘシ、幽閑ノ地ニソ住セ給ヒケル、

○大光明寺

號梵王山、○普明國師語

○土人云、元在月橋院ノ山上、今云、免長老屋敷處是也、豊臣秀吉公、被築伏見、城時被遷洛北、相國寺ノ内

幻居山人隨筆云、大光明寺佛統國師、伏見、○太平記云、本院光嚴新院光明御兩所所ニ、夢窓國師ノ御弟子ニ成給テ、本院ハ嵯峨ノ奥、新院ハ伏見ノ大光明寺ニソ御座有ケル、○法皇外記云、曆應三年蒙塵吉野、延文二年、還舊都、隱伏見落髮、法號眞常智云云、又勅周岐號碧潭開光大光明寺、本尊、○普明國師語錄云、文和年中、廣義門院口於伏見、行宮、傍建造此、精藍、專安修禪徒、而自稱大光明院、者蓋以追慕橋太后、遐蹤、兼別世號也、○又云、山城州梵王山大光明寺住持某、恭遇、本寺大功德主先皇光嚴院小祥御忌、伏承、聖命、新造立、聖窟、落成、大佛寶殿、奉安本師釋迦如來、文殊大士、普賢菩薩、○紹運錄云、光明院文和四年八月八日、自河州東條、行宮出御伏見殿、其、後御保安寺、自去年、着御黒衣、御戒師泉涌寺了寂上人、○椿葉記云、陽祿門院三十三とせの御法事、大光明寺にて轉經供養など、嚴重申さたありて、○日工集云、康曆二年七月二日、赴伏見、大光明寺、就子聖祠、而諷經、牌書光明院尊儀而已、經罷謁伏見、院見、太皇、○寶幢開山智覺普明國師行業實錄云、貞治元年壬子秋七月、奉太上天皇、聖旨住、梵王山大光明寺、○佛日常光國師行業錄云、崇光帝遜于伏見之邸、有渴玄論、聞師、風采、徵住、大光明寺、○補菴京花別集會大光明寺、古寺見花、横川先帝、離宮花尙香、高僧甲乙住禪房、春風御愛一株、雪、深殿燈

殘白日長、○かくて伏見の御寺にまうてたりしに、こしかたの御あらましなどおもひいたし
たてまつりて、家集雪玉「山の色のみどりの洞と契りしははかなき秋をとふまくれかな 道
堅

○大通院大光明寺、塔頭、榮仁親王。

椿葉記云、應永廿三年十一月廿日、親王榮仁終に薨し給ふ、かねてより遺書をあをほしをかれ
て、大光明寺に料所をよせられて、御塔類をたて、大通院と御稱號を申へきよしさためを
かる、○補菴京花別集惜餘春會大横川春歸何、處定天涯、挽袂留耶又送耶、百鎰、黃金一雙璧、寸陰
是寶老看花、

○藏光菴元在伏見、隣大光明寺、豊臣秀吉公薨、嵯峨臨川寺、東、又載葛野、○幻居山人隨筆云、藏光院、海印幢、郡、今御香宮、東二町許有天滿社、是藏光菴、鎮守、云云、藤原長親云、こゝに吳竹のふ

海印和尚善幢行狀云、海印和尚塔曰藏光、山曰龍蟠、室扁就巳、○兩聖記藤原長親云、こゝに吳竹のふ
し見の里とかや、代々の御門おほむくらゐをさらせ給て、紫の雲の上をみどりの羅の洞に住
かへさせまします事、たひかさなりぬ、ちか頃又うた花山のふかき御跡にもこえて、少林の
奥、曹溪の源までふかく尋きはめさせ給ふ、ふた代の御事のかたしけなさは申もさら也、か
の仙洞にひきはなれて、一字をたてられて、うつり住ましし所を、藏光庵となつて、光
かくれさせ給し後より、御門徒の尊宿いにしへのみとのりをたかへす、まもりおこなひ給め
り、今の幽林主翁すなはち其人になんおはす、明徳の比同伴の僧月溪の夢に、おほきなる島
の中に一の壇あり、壇の上に寶塔あり、塔に法花の妙典を安置す、そのかたのらに峩冠盛服

して、繪にかける唐人のとくなる貴人立給へり、誰ならんと思ふ所に、虚空に聲ありて、是な
ん北野の天満大自在天神におはしますといふと見えけり云々、其後應永元年の秋、幽月同門
の僧忠庵のかたより、天神無準に受衣し給ける、御姿を圖したる形象とて、幽林に奉れる、月
溪これを見るに、夢に見奉らし義貌衣冠たかふとなし、いと不思議なるとになん、幽林感歎の
あまり、つらく、是を思ひめぐらされける、此庵もとより寶塔をたて、中に法花を安
て本尊とす、道堅のうつゝに拜し、月溪の夢にみる、塔婆法華これをなし、もとめざるに彼眞
影こゝに降臨します、是ひとへに祖宗を守り法道を助けましますへき神慮にや、縁遇時
いたり機感相應するにこそと、信心いよくふかきによりて、當庵永代の土地神に勸請し奉
りて、朝夕焼香供養懇誠をつくされけり、かの仙洞につかふまつる人々、この事ともを傳き
いて、和歌を詠して法樂さけるに、「神よなを法を守りて傳へけり三の衣のうらみのこすな
「たえずわかれたのみをかくるるしにやこゝに北野の影うつすらん 知足○翰林五鳳集、
文安四年丁卯二月十日、早赴伏見藏光禪菴無相老人、大祥忌齋、請云云、藏光、創業海印禪
師也、城南、佛寺雜花香、春到難藏海印、光、喜會一時只慕古、回頭六十二年忙、瑞溪
○指月今豊後橋東北有指月山、月橋院、土人云、指月、森、後山、指月、云云、此後山、秀吉公始文、
祿二年被築城跡也、非勝、風景、地、按、指月山、今、城山、内、云、宇治見、岡山、平、
日工集云、永徳四年十月廿六日、預赴伏見、大光明寺、盖廿八日伏見、院之母后陽祿門院、三十
三御忌、以院旨普明國師監諸佛事、府君館于指月、○季瓊日録云、寛正二辛巳、伏見指月之佳
境、有八景、之由被聞召及、伏見退藏院御成之事伺之、盖爲指月被御覽也、○又云、寛正六乙

西九月廿一日、春日御社參、廿九日今晨御歸洛、十月一日御上洛、字治、釣殿、御一献、以後乘御船、船中御一献、着岸于指月、浦而還御、○二水記云、永正十七年七月廿日、參般舟三昧院云云、此後見物指月、多景不可說也、○五鳳集、題指月菴、芒碭山中雲一去、禪扉長掩薜蘿青、塔留羽葆森千樹、風送仙韶走百靈、細々爐烟浮靜夜、蒼々溪月照空庭、殘僧尙說前朝事、不覺令人涕泗零、○同集、指月塔、兔輾棗輪當指頭、截爲兩段使人休、樓櫺樹與貝多葉、碧海青天夜々秋、

○月見岡 按、伏見城山ノ内西南ノ隅有岡山、號字治見、勝景ノ地也、或云、月見坂、天智天皇月見跡云、東三條院來遊、地也云云、

平家物語云、舊都に残る人々の、伏見廣澤の月をみる、○按、伏見ト云ルハ月見ノ岡ナルニヤ、○盛衰記云、或ハ木幡、大道醍醐路ニ掛テ、阿彌陀カ峰ノ東ノ麓ヨリ攻入モアリ、或ハ小野、庄勸修寺ヲ通テ七條ヨリ入ル者モアリ、或櫃河ヲ打渡リ、木幡山深草里ヨリ入モアリ、或ハ伏見尾山月見岡ヲ打越テ、法性寺一二ノ橋ヨリ入モアリ、道ハ互ニ替レテ、同都へ乱入、

○般舟院 正觀町院御宇遷洛北、舊跡在月橋院地、呼般舟院、故又載洛陽卷、

西山往生院傳持次第云、第十、惠篤上人、善空子敬川、號攝善院、後土御門院、國師親王、同御受成、諡圓慈和尚、文明年中、後土御門院於伏見之勝地、建立般舟三昧院、應敕請、則入院畢、蓮門宗派、○親長卿記云、文明十四年十一月廿七日、參伏見般舟三昧院、近年御新造也、爲御燒香也、○宗長日記云、大永六年四月七日、御崩御、後柏原院御葬禮、東山泉涌寺、御七々日、伏見御山庄般舟三昧院、○住吉紀行、藤原實隆云、四月の比、住吉天王寺にまうつへき心さし有て、伏見へまかりて、般舟院にまららくやすみて、船の事な

ともよほし給て、此津より船出して、○後奈良院御拾骨之記云、弘治三丁巳年九月五日、崩御、六十一歳、同十一月廿二日、御閣維傳奏柳原殿、同十一月廿五日卯時、御拾骨傳奏廣橋殿、傳奏ハ即直ニ深草、安樂行院ニ御骨ヲ奉納也、論師之御拾骨ハ、直ニ伏見、般舟三昧院マテ、兩手ニ捧持テ佛前ニ奉納、弘治三年十一月廿七日於伏見般舟三昧院御所之間記之、遣迎院一道弘空、三條稱名院御骨ヲ待カ子給テ、般舟方丈ノ縁ニ立給ヒ、御拾骨ノ論師御門ニ入時、御庭ニ馳向テ御骨ノ桶ニトリツキ給ヒ、御落涙其時ノ御歌、「たちのはる煙の跡のちりを見、てさらになみたの袖をぬれける」「いままてに残るをあらハ身のかきりつかへんものを墨染の袖

○伏見御墓所

親長卿記云、明應二年七月八日、參伏見御墓所、後花園院、嘉樂門院、洞院殿准后、當今御母儀、○又云、文明三年二月廿三日、廣橋亞相語云、常照寺大原等被籠申仙骨、餘分灰等、細一辛檀有、別云云、大納言入道罷下伏見、可然之在所、可堀埋之由仰之、仍令隨身罷下候由語了、

○寶嚴院

椿葉記云、次の年六月にふし見へ還御なる、今いもとの御所もなし、御座あるへき所なくて、故三位局松殿中里にて、ほうこんゐんと申、比丘尼所になされたる所を、まつ御所になさる、狭少ふしきなる草庵のかりそめなから、いま御所にてあるなり、○二水記云、永正十七年七月廿日、未明令下向城南、今日贈皇太后宮、御年忌、有御經供養、已、刻許着宿坊、寶嚴院令休

息少時アツテ參般舟三昧院

○退藏院幻居山人隨筆云、退藏院、伏見常光國師

薩戒記云、應永卅三年二月七日、辛丑申刻、南方有火、後聞伏見、泰藏菴云云、○永享日錄云、永享八年十月廿三日、退藏院御成伺之、

○靜隱菴

幻居山人隨筆洛外禪刹云、大光明寺佛統國師伏見、退藏院常光國師伏見、藏光院海印、靜隱菴寬休

○清泉寺元在伏見、今遷大德寺、內、抄又載愛宕郡、卷、

正續大宗禪師行狀云、師諱宗熙、字春浦、云云、文明十三年秋、相攸伏見、潛邸卓々菴、兒鈕灌乎荆棘、平砥乎嶮崖、而茅不剪、椽不斲、扁以清泉、南面、榜江山一覽、傍構宿鶯亭、而樂佳境、一歲之間往來者數矣、○大德佛宗大弘禪師實傳和尚道行記云、師諱宗真、號實傳、云云、永正丁卯四月八日逝、収全骨塔于伏見、清泉寺、

○石井郷和名抄、土人云、伏見九郷、內、自御香、石井郷、紀伊郡、宮、迄西道手筋、號石井村、

○松原山

風雅「村雨の半はれ行雲霧に秋の日子よき松原の山院御歌」○八月十五夜伏見に御幸ありて、人々に月の歌よませ給ひけるついでに、風雅「軒ちかき松原山の秋風にゆふくれきよく月出にけり」伏見院

○御香宮坐伏見山西、舊、御香宮在大龜谷、東矢島嶺、秀吉公被遷當社處也、然有故又復舊地、今、宮所是也、矢島嶺、社地、今爲御旅所、豊臣秀吉公朝鮮征伐之時、自當社有御首途、

緣起云、山城、國紀伊郡伏見、郷御香、宮者神功皇后、廟也、鎮座年紀不分明、九月九日祭之、

○三栖伏見、西南有上三栖、下三栖、二村、土人云、太平記、山城國深、須、入道アリ、此所、住人也云云、

袖中抄云、鳥羽の南にみすせり川といふ所あり、○管見記云、嘉吉二年十月十六日、下三栖庄ミヌ内、下司名代官職、事、仰付有景了、○安樂壽院記云、安樂壽莊園山州真幡木、芹河、上三栖、播州石造、莊、已上見于文明天、文、繪首云云、

○芹川芹川村、在三栖、北竹田、南、又自下鳥羽町、半、南亦號、芹川、○三代實錄云、紀伊郡芹川野云云、

類聚國史云、延曆十五年正月甲辰、遊獵于芹川野、○三代實錄云、仁和二年十一月十四日戊午、行幸芹川野云云、日暮乘輿幸左衛門、佐從五位上藤原、朝臣高經、別墅奉進夕膳、高經獻物、○歷代編年集成云、高經、贈太政大臣長良、四男、母、昭宣公、○河海抄云、仁和二年十二月十四日寅、四刻、行幸芹川野云云、於淀河、邊、供朝膳、行宮在泉河鴨河宇治河之合、○花鳥餘情云、仁和芹川の行幸の次に幸入條院、見吏部王記、○日本紀略云、天曆二年八月廿八日甲辰、太上皇御九條院、便於芹川野、有小鶴之興、○仁和御門さかの御時の例にて、芹河に行幸し給ける時讀る、後撰「さかの山みゆき絶にしせり川の千代の古道あとはありけり、行平、袖中抄云、大鏡云、極樂寺いつれの御時とは慥に之覺え侍らす、深草の御時にや、芹河の御幸せさせ給けるに、昭宣公は童殿上にてつかうまつらせ給へりける、帝筆の御ことのおはしまして、おさなくおはします君にしも、求めてまいれと仰られければ、是もとめ出たらん所には、一伽藍たてむと願し思召て、求めさせ給けるに、いてきたる所をかし云云、私云、鳥羽の南にみすせり川と云所有、是

を思へは、芹川野行幸といふは、鳥羽の南の芹川といふ事うたかひなし云云、而上にさかの山みゆき絶にし芹川と讀たるは、其つゝきを思ふに、さかの方に芹川といふ所あるかどうたかふ人あり、能因歌枕に、山城國の山をあけて四方をさためたるに、嵯峨の山をいいつかたともあらぬ山の中にあけたり、をくら山、かめ山などのつゝるにもあけつるもあやしき事なり、たゞみかどの御名によせて、さかの山とはよめるなり、且は後撰にも、さかの御時の例とかきたり、又國史云、嵯峨院さかの山といへり、然はさかの山みゆき絶にし芹川とは、さかの御時の芹川の御幸絶にしことを讀たればたかはず、己上續古「せり川の浪も昔にたちかへりみゆきたえせぬさかの山風 後京極○六百番、御幸せし野への古道ふみ分てあどたえせぬは芹川の水 隆信○草根、ひかひみる竹の葉山の雪なから窓にわけゆくせり河の里 正徹

○竹田 在伏見、西北、古文書云、眞竹、庄、云、按、安樂壽院、莊園、内、有、山州眞幡木、是眞竹、庄、同所歟、

續古、今朝たにも夜をこめてとれ芹河や竹田の早苗ふし立にけり 讀人不知○家集、旅ぬする竹田のさどにうつ衣一夜のほとに聞となれぬる 忠度○千首、打むれて竹田のわかな摘暮し 歸るやちかき伏見なるらん 爲尹○新六帖、深き夜の竹田河原の淀車あかつきかけて音きこゆなり 爲家

○安樂壽院在竹田村

積磔集云、安樂壽院ハ鳥羽院ノ御佛殿ナリ、本尊ハ四海不雙ノ如來ナリ、此ワタリ皆離宮ノ跡ナリ、○安樂壽院記云、安樂壽院者鳥羽上皇之御願也、古者鳥羽、東殿、御堂ナリ、鴨河以西ハ鳥羽、河東ハ竹田也、離宮殿、後、此院獨在河東、故今呼爲竹

田、上皇保安四年正月二十八日、脱躡之後、居城南、離宮、號鳥羽殿拓基墟於東隣、而創精藍、安無量壽尊、號安樂壽院、於中造五層寶塔、人呼爲本御塔、保延三年冬十月十九日落慶、覺行法親王爲導師、其塔中所安無量壽像、神人之所刻彫云、厥、后相繼營立堂宇、而彌陀像九軀置院中、今見在者本新兩塔、二像而已、永治元年至久安二年八月十一日、慶讚諸像、四年法皇宸筆、法華經盛石函置本御塔、刹柱之下、以爲寺鎮、今尙在堂下、今ハ無塔、就遺蹟、架、皇后美福門院、得子法皇之妃、近衛天皇之皇女八條、女院、院也、内親王、直家、院號之始也、保元元年六月十一日、共剃染、處離宮、同年七月二日、法皇崩、離宮、葬于安樂壽院、就、上建塔安彌陀像、相傳春日、神化、人、今、新御塔是也、當時寶塔五者、慶長中豊秀頼、公所、修起也、因、號鳥羽、禪定法皇、新御塔稱八條、女院美福門院、兩貴尼摸本御塔之淨規、置法侶存者往昔之十、一、而已、故村落、中有文六堂、卷僧坊、卷、名、野田、中、今、呼、且、又、如、成、菩提、勝、光明、院、闔刹空爲田、祇、阡、陌、之名、○安樂壽院記云、十二坊舍者兵亂荒涼之後、縮移伽藍磨滅之地、故極狹隘此之由也、○百練抄云、保延三年十月十五日、上皇供養鳥羽、東殿、御堂、安樂壽院○元亨釋書云、保延三十五、慶安樂壽院、覺行爲慶導、○安樂壽院記云、或云、是古、金堂之遺跡也、近世就跡新架小堂、故呼名新堂、又云、新堂、藥師、像者行基菩薩之手自所塑也、云云、昔者於新堂、每歲行如法經、シテ、ラ、ク、ン、ツ、テ經於本御塔、側、今名如法經塚是也、○明月記云、建永元年七月二日、參鳥羽、安樂壽院少時、被始講筵、

○御塔

中右記云、天仁元年六月三日、法皇有御幸鳥羽云云、先御于鳥羽、東殿、御覽可被立御塔之所、林中全無眺望之所、大畧有深御慮、所被立御、播磨守基隆朝臣奉也、○百練抄云、保延五年二月廿二日、上皇供養鳥羽東殿三重御塔、右兵衛督家成、卿造進之、

○鳥羽院 山槐記云、鳥羽院、鳥羽東安樂壽院、

歷代編年集成云、保元元年七月二日、辛丑(巳)申時、崩、御年五十四、即夜奉渡安樂壽院、御塔擬山陵也、號鳥羽院、百練抄○山槐記云、鳥羽東殿故院令起立御塔二基、御一基被納故院御骨、○鳥羽院の御さうそこの夜、高野よりおりあひて、家集「といやと思ひよりてそなけかまし昔なからの我身なりせり」西行

○美福門院御塔

百練抄云、永曆元年十一月廿三日丁酉、美福門院崩御、四十四御骨奉渡高野也、鳥羽東殿故院令立御塔給、爲奉納女院御骨也、然而依御遺言如此云云、○山槐記云、永曆元年十二月六日庚戌、美福門院御骨奉渡高野、御山依御遺言也、而鳥羽東殿故院令起立御塔二基、御一基被納故院御骨、今一基、此女院御料也、然而可置高野、由有御意趣云云、而彼御塔二味僧也、天台僧也、六口并故院御塔三味僧六口、合力奉留御骨、訴申云云、仍遣重方被仰子細、中畧御骨雖不御座、御塔三味僧者不怠之由、能々被仰合、仍去二日遂奉渡高野了、○美福門院かくれさせ給ける、御葬送の御供に、草津といふ所より舟にて漕出ける、曙の空のけしき浪の音、折から物かなしくてよみ侍ける、新拾遺「朝はらけこきゆく跡に消る淡のあられ

まことに浮世也けり 隆信

○近衛院陵

歷代編年集成云、久壽二年七月廿三日、崩于近衛、皇居、御年十七、八月一日、奉葬船岡西野、御骨暫安置知足院、號近衛院、○百練抄云、長寛元年十一月廿八日、奉渡近衛院御骨於鳥羽東殿美福門院御塔、本安置知足院、本堂○近衛院の御墓に人にくしてまいり侍たりけるに、露いとふかりければ、山家集「みかゝれし玉の臺を露ふかき野へにうつしてみるそかなしき」西行

○法花堂

百練抄云、天福元年三月七日、今夜群盜亂入鳥羽、安樂壽院法花堂、搜取銀、御塔并種々寶物、云云、鳥羽院御自令獻給、常燈消畢、○帝王編年記云、永仁四年四月卅日、鳥羽殿、安樂壽院法花堂燒亡、

○新御堂 按、安樂壽院、南有阿彌陀堂、云田、新御堂殿、

百練抄云、久安三年八月十一日、鳥羽、新御堂供養、在安樂壽院南、九體、阿彌陀堂行幸、○明月記云、建仁二年七月二日、參鳥羽入九躰、御堂偃臥、

○不動堂 在安樂壽院南、

百練抄云、久壽二年二月廿七日、鳥羽、安樂壽院、中不動堂供養御幸、○安樂壽院、記云、初法皇師敬、シマフ根來、鏝上人、安樂壽院成後、爲營別院安樂壽、中寓鏝公、稱傳法院、土俗謬呼今爲賢法院、鏝公嘗手刻不動像、長丈餘、以爲王城之鎮護、像面北向、俗呼北向、不動是也、○續世

繼云、鳥羽の僧正、はやしの中に志のひてたてられたる、丈六の明王のみたうにて、御すほうをこなはる、

○鳥羽院御在所今云奥坊

愚管抄云、保元二年七月二日、御支度のことく、鳥羽殿に安樂壽院とて、御終焉の御堂御所をかせ給たりけるにて、うせさせ給にけり、○安樂壽院記云、院之一隅、別置律寺、號清淨寺、近世移遺趾爲一小坊、今、奥坊是也、

○鳥羽郷和名抄云、東限竹田、南限横大路、西限桂川、北限四塚、此間有二村、隔小枝、橋北云、上鳥羽、南云、下鳥羽。

石清水御幸記云、文應元年八月九日、甲辰今日新院有臨幸石清水云云、鳥羽、北川、外池尻并鴨川尻、浮橋鳥羽殿役也、○御集、雲のとふ鴈の翅に月さえて鳥羽田の里に衣うつなり、後鳥羽院○建保百首「年へぬる松もむかしに山城のとはに逢みん千代の古道、順徳院○名寄「山城の鳥羽のわたりの爪つくりこまほしと思ふ時のおほかる

○鳥羽殿城南寺、森邊云、森、南、有呼御所、内田地。

續世繼云、鳥羽殿のこの法皇のつくらせ給へれり、さやうにや申さむと思へりしかども、白河にもかた／＼御所とも侍しかり、白河院とそさためまいらせ侍ける、○百練抄云、寛治元年二月五日、上皇遷御鳥羽、離宮、營作甫ナカ就之故也、六府供奉、於陣有召仰、件地、本是備前守季綱朝臣、領也、去年進上之、讀岐守泰仲造進屋舎、○扶桑略記云、公家近來九條、以南、鳥羽、山庄、新建後院、凡下百餘町焉、近習卿相侍臣地下雜人等、各賜家地、營造舎屋、宛如都遷、

讀岐守高階泰仲、依作御所、已蒙重任、宣旨、備前守藤原、季綱同以重任、獻山庄賞也、云云、池廣、南北八町、東西六町、水深八尺有餘、殆近九重之淵、或摸於蒼海、作鳥、或寫蓬山、疊巖、泛船飛帆、烟浪渺々、飄掉下碇、池水湛々、風流之美、不可勝計、○榮花物語云、九條のあなたに、鳥羽といふ所に、池山廣う面白う作らせ給は、おろさせ給ふへき御心まうけにや云云、かの鳥羽院におはしませ給十餘町を、こめてつくらせ給ふ、十町はかりは池にて、はる／＼とよもの海のけしきにて、御舟うかへなどしたる、いとめてたし、○神皇正統記云、昔はおり位の君は朱雀院にまします、是を後院といふ、又冷泉院にもおはしけるに、かの所々にはすませ給はず、白河より後には、鳥羽殿をもちて、上皇御座の本所と定られにけり、○増鏡云、後深草鳥羽殿もちか頃はいたうあれて、池も水草かちにむもれたりつるを、いみしうまゆりしみか、せ給ひて、はしめて御幸なりし時、池邊の松といふ事かうせられしに、おほきおと、序かきたまへりき、夫、鳥羽、仙洞、三五累壘、離宮一百餘載とかや、又御身のいみしき事には、蓬の髪霜寒くて、七代つたへたりと侍りしこめてたけれ、○寛治八年八月十五夜、鳥羽殿にて、池上翫月といへる事をよませ給ひける、金葉「池水にこよひの月をうつしもて心のまゝにわか物とみる、院御製「拾遺愚草「すゑとをき鳥羽田の南志めしよりいく代の花にみゆきふるらん、定家「拾玉「この程は昔の君か跡をかし鳥羽田の里の秋の夕くれ、慈鎮

○北殿

百練抄云、建仁元年四月廿一日、上皇鳥羽、北殿御移徙也、○平家物語云、治承三年十一月廿

○秋山

土人云、城南寺、森、西道、東、側之岡也、按、城南秋山、號、唐土有、例乎、白、氏文集、中、隱詩云、君若好、登臨、城南有、秋山、君若愛、遊蕩、城東有、春園、

著聞集云、白河院鳥羽殿におはしましたる時、馬場殿へ御幸ならせ給て、秋の山のかたへいらせ給ける、○平家物語云、鳥羽殿池の邊を見まはせは、秋の山の春風に白浪まきりに折かけて、紫鷺白鷗せうようす、○明月記云、建永元年八月十五日、參成菩提院云云、御船有管絃、入御之間、聞召各參由、被下御製、「いにしへも心のまゝにみし月のあとを尋ぬる秋の池水○鳥羽殿五首歌合「君か代に光をそへよす多遠き千年の秋の山の端の月 行家○千五百番「霧はる、鳥羽田の面を見わたせばは行末とをき秋の山里 家隆○安極壽院記云、古老傳「鳥羽、秋、山者離宮掖庭之假山、又今、中島村者兩庭池中之芳洲云、云云、○中島村在城南、寺、森、南、

○鳥羽、御塔

安樂壽院記云、今、塔田在野田、中、

百練抄云、天仁二年八月十八日、太上皇供養鳥羽、御塔、○長秋記云、天永二年三月十一日、鳥羽、多寶塔供養、導師寛助法印、讚衆廿人、百練抄云、太上天皇供養鳥羽、御塔云云、

○鳥羽御堂

百練抄云、天永三年十二月十九日、太上皇供養鳥羽、御堂、

○證金剛院

拾芥抄云、鳥羽殿、夜鶴庭訓抄云、額俊房、色紙形御室、

帝王編年記云、康和三年三月十日、太上法皇、御願、證金剛院供養、顯儀同廿九日、密供養額堀川左大臣俊房公、色紙形中御室、○續文粹敦光朝臣帝都之南「有一、仙洞、林池幽深、風流勝絶、其中新建立道場、號證金剛院、安丈六、彌陀佛、又造塔婆三基、其中三重、塔一基、安金字銅紙妙法蓮華

經、

○成菩提院

拾芥抄云、美福門院御在所、明月記云、鳥羽西北、

百練抄云、天承元年七月八日、鳥羽殿、泉殿、内九躰阿彌陀堂供養、成菩提院是也、件、堂、白河、院昇霞、三條、御所、西、對也、御平生所、被造立之九躰、阿彌陀佛奉安置之、○保元物語云、保元元年、美福門院、鳥羽ノ成菩提院ノ御所ニテ、御飾ヲロサセ玉云云、

○白河院陵

成菩提院

歷代編年集成云、白河院大治四年七月七日、崩、御年七十七、同十五日辛卯、葬、香隆寺、西、邊、○百練抄云、天承元年七月九日、白河院御骨自香隆寺奉渡、鳥羽殿、三重、塔、是御平生、叡慮也、○吉記云、壽永二年六月廿一日甲子、被立、山陵使云云、柏原桓武圓宗寺後三條院成菩提院白河院安樂壽院鳥羽院清閑寺高倉院○七月七日白河院かくれさせたまひけるによめる、後葉集「又も來ん秋をまつへきたなはたのわかるゝたにもいかゝかなしき 平忠盛

○勝光明院

拾芥抄云、保延二三三三、○帝王編年供養行幸、鳥羽御堂、記同之、

元亨釋書云、慶、鳥羽、勝光明院、導師忠尋、咒願覺猷、云云、○百練抄云、保延二年三月廿二日、上皇供養鳥羽、勝光明院、行幸、○著聞集云、久壽元年二月十五日、法皇美福門院御同車にて、鳥羽の東殿より勝光明院へ御幸有て、庭の櫻を御覽せられけり、まつ阿彌陀講を修せられける、法皇少納言入道信西を御使にて、御歌を内大臣新大納言等にたうはせけり、檀紙に書て櫻の枝につけられけり、内府に給いせける御歌、「心あらい匂ひをそへよ櫻花のちの春をい

いつかみるへき 各御返しをよみて、もとの枝につけて奉りける。内府、「こゝろありて咲てふ宿の花なれ、末はる」と君のみを見ん。○愚管抄云、法皇安樂壽院ニテウセサセ給ニケリ、云云、新院參ラセ給タリケレトモ、内へ入マイラスル人タニモナカリケレハ、腹立テ鳥羽ノ南殿、人モナキ所へ、御幸ノ御車チラレテオハシマシケルニ、勝光明院ノ前ノ程ニテ云云、○百練抄云、保延四年六月廿四日、勝光明院池、有一莖二花嘉蓮、○續文粹、敬白、建立瓦葺二階一間四面堂一字、奉安置皆金色一丈六尺、阿彌陀如來像一體、光中影、刻大日如來像一軀、面書寫梵字阿彌陀小呪、十二光佛、廿五菩薩、像、鏡、通、天蓋、飛天、像八軀、四柱圖、繪胎藏金剛兩部、諸尊、像、四面、扉、圖、繪極樂九品往生并迎接儀式、四面、廂造顯二尺五寸、普賢菩薩、文殊師利菩薩、虛空藏菩薩、彌勒菩薩、地藏菩薩、海惠菩薩、維摩居士等、像、各一體、二尺諸大菩薩、及天龍八部、像二百二十三體佛、後壁表裡、圖、繪廿五、菩薩、像、并極樂九品、變像、二階、上、安置金色七尺五寸、金剛法利因語等菩薩、像、彩色四尺五寸、伎樂、菩薩、像、三十二體、右九重城南萬年縣、裏築山以擬、姑射、貯水以摸、混明、蓋是往日經始之離宮、今、延覽之勝境也、東方十洲之深洞、縮風流於其中、西伯百里之芳園、積道德其處、鳥羽勝光明院供養願文、敦光、保延二年三月廿三日

○寶藏

古事談云、勝光明院寶藏、御座、スル八幡御影、弘法大師御渡唐之時、前歟手自テツカラ奉圖繪給之御影也、僧形、戴月輪、令持錫杖、給大師歸朝之後、被奉安置高雄寺、荒廢之後、鳥羽、上皇尋召、被奉安置件、寶藏云云、

○炎魔堂

百練抄云、保延六年十二月十二日、上皇供養鳥羽殿、内、炎魔天堂、

○金剛心院

山槐記云、治承二年十一月十二日、使奉佛寺、七十四箇所、内、兵範記云、仁平三年四月廿日己卯、明日新御堂、金剛心院、木作始、一院美福門院去、夕御幸東殿、作事所馬場殿、北樹北田中、南北六十丈、東西五十丈、點定其所、其□□九間四面阿彌陀堂、丈六、御佛可、被安置、一字備後守家明朝臣造營、三間四面、釋迦堂一字、丈六并寢殿御所舍屋十餘宇播磨、守顯親朝臣奉之、○帝王編年記云、仁平三年八月九日、鳥羽、金剛心院供養、元亨釋書、○百練抄云、保元二年九月廿日、鳥羽、金剛心院、内、新御堂供養、上皇奉為母儀女御殿、建立一堂、可被安置丈六、阿彌陀佛、像之由有御遺言、仍美福門院有御汰沙也、

○春花門院御墓

百練抄云、承元三年四月廿五日、今日皇后宮有院號、事、為春花門院、諡號雜記、○春花門院昇子、後鳥羽院皇女、號一品、同之、○又云、建曆元年十一月八日、春花門院崩御、十六日故、春花門院御葬禮、其、所鳥羽殿云云、○八條院かくれさせ給て後、ほとなく又春花門院うせさせ給にけるを、鳥羽へおくりたてまつりけるに讀侍ける、新拾遺、かゝりける別れをあらて山城のとはにも君を頼みけるかな信實

○新大納言光賴卿宿所

兵範記云、仁平三年正月廿二日、一院入、御熊野御精進屋、鳥羽光賴朝臣、宿所、○山槐記云、永曆

元年八月廿日、今日石清水行幸也、上皇於鳥羽新大納言光頼卿宿所有御見物、

○草津土人云、下鳥羽今有渡海場、自是乘船古、草津者此所也。

保元物語新院御遷幸云、鳥羽の南の門へ遣り出す、草津にて御船にのせ奉る、○嚴島御幸道記云、治承四年御ともすへき人みな舟にまいるへしとて、草津といふところにひらはりうちて、まいる

まうけたり、盛衰記云、鳥羽、草津、

○池田

管見記云、文明十一年八月廿日、山口遠鮎塔森自管領鳥山有使、使者伊地知民部丞齋藤次郎右衛尉鳥羽、庄之内

池田、事也、○十訓抄云、法性寺の關白の御時、東北院の領、山城國池田の庄、解を朝隆卿執事

のおりとり申されける、○永享年中寺社文書云、松梅院禪能知行分、山城國池田、庄、事、就禪

能負物、彼、年貢可被沙汰、渡光聚院雜掌之由、候也、○永享三年十月八日、貞運爲種

○法傳寺在下鳥羽、寺家説云、眞言宗、本尊藥師佛、行基作云云、法然上人十一世、法孫、圓智上人住持之後、爲淨土宗。

管見記云、永正九年正月十一日、法傳寺來、如例年、

○眞阿彌在下鳥羽、念寺、前河。

誓願寺緣起云、南帝王の御子孫眞阿彌佛當寺に住す、普光院殿歸依し給ひ、則當寺の傍に

一字を建立し居住あり、號、十念寺、今遷京極、今出川北。永享十二年七月二日、圓寂す、下鳥羽の淵に遺骸

をまつめ、魚鱗の食にとかねて遺言あるに任せ、彼所へ水葬せられけり、眞阿の淵とて、今に

下鳥羽にありと也、

○赤池下鳥羽秋、山西南、有民家、土人呼赤井。

磧礫集云、鳥羽赤池ト云所ハ昔池アリ、文覺、渡カ妻ノ首ヲ洗ヒタレハ、其後ヨリ水赤ク變スルニ依テノ名也、

○戀塚今戀塚有二所、一所在下鳥羽壇上、號戀塚寺、有石塔、源、渡妻、墓、一所在上鳥羽羅山子撰碑、銘。

戀塚石碑銘云、文覺在高雄、遙望埋婦之處、名曰戀塚云云、○平家物語長門本云、文覺うせにし

女の骨を取て、後園に塚を築、三年の忌景まで、行道念佛退轉なくつとめつ、かの往生をそ

いのりける、平家物語云、文覺、渡邊、遠藤左近將監持、遠之子、遠藤武者盛遠也、上西門院、衆也。○藝州紀行、鳥羽戀塚、梁南鳥羽行過、涙不乾、幾人カ膽戀

恨千般、可憐古塚、名空在、荒草埋殘、欽骨寒、

○造道造道、從四塚、鳥羽迄ノ間ヲ云。

盛衰記云、大宮ヲ下リニ東寺四塚造道、○太平記云、鳥羽ノ秋ノ山風ニ、家々ノ旗翻トノ、

城南ノ離宮ノ西門ヨリ、作道、四塚、羅城門ノ東西、西ノ七條口マテ支ヘテ云云、○兵範記云、

保元三年二月廿八日己未、天皇家幸春日社、云云、自朱雀南行經作路并鳥羽中、著御頓宮、○

徒然草云、鳥羽の作り道ハ、鳥羽殿たてられて後の號にあらす、昔よりの名也、元良親王、

元日奏賀のころ、はなはた殊勝にて、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記

に侍とかや、

○造道廻地藏堂在上鳥羽村、盛衰記、所謂西光法師、每七道、辻、建立、一、

以呂波字類抄云、羅城門、在朱雀、南極、今、四塚是也。○盛衰記云、鳥羽、南門、造道、四塚、東寺洛中、充滿、○椿葉

記云、伊勢國司打出て、土岐の與安と合戦する處に、國司打負てやかてうたれぬ、其首宮古へのほりて、四塚に懸らる、

○吉祥院 拾芥抄云、吉祥天菅家御願、○在四塚、西南五町許

歷代編年集成云、元慶四年二月廿日辛亥、參議從三位行刑部卿菅原朝臣是善薨、春秋六十九、十月廿二日、式部、少輔文章博士菅原朝臣、供養吉祥院、帝王編年記、字類抄等、同之、○日工集云、本寺、南有、小院、曰、吉祥院、天神之父某、本願、所建也、爲北野長者、人必、先參禮、謂之拜堂、昔天神之父使于唐國、船中、值風波之難、祈念、之頃、忽見吉祥天女、現身空中、及、皈本朝、建寺、以吉祥爲名云、○菅家文章、吉祥院法花會願文、元慶五年十月二十一日、弟子從五位上式部少輔菅原朝臣敬白、吉祥院建立之緣、最勝會、願文、叙之詳、ナリ、矣、

吉祥院、鐘、銘、貞觀十七年

菅家文章 科限非器 遠單是仁 和心播響 應手成因 他利弘誓 我歸至真 魔降伏、刀 劍解摧、輪、吉祥院、僧房述懷、菅原時登、幽深古院敬、伽藍、禮、佛講、經意、巨、堪、云云、

○聖廟 在吉祥院森、內、吉祥天女堂、西、

扶桑略記云、治曆二年三月廿八日、吉祥院新造天神堂、奉移尊廟、百練抄、同之、○中右記云、寬治六年三月廿八日、今日有吉祥院聖廟、作文、是寺僧依有夢想、告也、○公事根源云、北野御、忌日、二月の廿五日、天滿大自在天神のかみあかり給し御日也、夢の告ありて、天仁二年より吉祥院にて八講あり、菅家の輩まいりて是を行ふ、○二水記云、大永二年十一月廿二日、菅大納言坊城長

者拜堂、云云、先詣吉祥院、後可詣北野社、云云、○續文粹、春陪吉祥院聖廟、櫻花殘、古社詩序、藤原教基、都城之南有一、廟宇、尋草創則承和、左憑、歸聖教、以建精舍、謂花飴、亦昌泰、右僕射、重祖跡、以崇靈祠、水土叶龍虎之象、臺殿足神仙之居、

○村 在吉祥院森、西、本名上石原村、

梅溪集詩序云、元龜戊戌春、遊城南、吉祥寺村、投宿一菴、云云、○同集、癸亥、春、岐陽、光遠知藏、僑居于城南、吉祥寺、今將飯故里、求予以贈言、因賦一絕、應其命、云、雪嶺 客舍城南過一春、錦囊風月步篇新、朝來獨出吉祥寺、孰若別、花兼、別人、

○石原鄉 和名抄云、紀伊郡、○今吉祥院村、南島村、北有石原村、桂川、東也、

三代實錄云、山城國、野自故、治部卿賀陽親王、石原家以南至赤江崎、承和元年以降、百姓不能漁獵、重加禁、

○石原大明神 山城國見字、貞治神名帳、

○佐比 里、○津、○川、橋

拾芥抄京程圖、西京、西、洞院號、佐比小路、云云、佐比、小路、在朱雀大路、西八町、○三代實錄云、貞觀十三年閏八月廿八日辛未、制定百姓葬送放牧之地、其一處、在山城、國葛野、郡五條、荒木西里、其一處、在六條、久受原、里、其一處、在紀伊郡十條下石原、西外里、其一處、十一條下佐比、里、其一處、十二條上佐比、里、勅曰、件等、河原、是百姓葬送并放牧之地也、○三鈔寺雜々文書云、謹牒、山城國、街、合八町壹段、佰肆拾貳步、在郡下、紀伊郡、十一條下佐比、里、廿九坪二段、四至

東限西限限畔、南北、限遺地、十二條上佐比里、已上主殿、允國、有輔浩進故、三條中納言、朝成、十條下石原、西佐里、十一條下佐比里、寛弘二年七月廿九日、散位藤原朝臣、紀伊郡司解、權大納言殿御領、石原、田島、合田島六拾伍町七段佰八十步此内在常、石原、郷、十條下石原西佐里、十一條下佐比里、十二條上佐比里、長元六年三月十日荒川原、刀禰左督長調任、○日本後紀云、延曆十四年七月戊子、幸于佐比津、十五年八月戊辰、遣内兵、正尾張弓張、造佐比川橋、○類聚國史云、弘仁十四年十月甲辰、幸佐比川、修禊事也、

○さひかは

家集、昔よりありのまに我すさひかはぬれくもなをほりやしてまし、躬恒○右歌、躬恒家集にみゆ、佐比川にや

○今昔物語云、鳥羽、村ニ大ナル橋有ケリ、此ハ昔ヨリ桂川ニ渡セル也云云、按、是佐比川、橋歟、

○佐比寺延喜式、七箇寺一也、

三代實錄云、貞觀十一年十二月八日辛卯、散位正六位上、弘野宿禰河繼、修解文言、佐比、大路、南極、橋承要路、極在曲流、間、躰勢脆小乘踏爲力、四方、負重之駕、急傾、較於水上、九原送終之輩、更留、柩於橋頭、云云、但河繼眼前隨、力修理、主身後事、聊有資儲、便付佐比寺、永代不墜功、

○塔、森或稱、森、在鳥羽、西桂川、東、

管見記云、嘉吉二年二月九日、塔、森船渡代官山本彌次郎、依爲德政、張本人、號德政取返永領記云、大永七年二月十二日、御所様モ六條へ御動座アリ、道永細川高、國入道モ妙本寺へ出張ス、御勢

ハ本海道鳥羽ノ鴉森ニ陣取テ、桂ヲ上ル敵ヲ待ツ、

○横大路在鳥羽、南、北、

園大曆云、文和二年六月七日、入夜西方南方炬火濟々、併如星、八日南方、在鳥羽、横大路、邊、

○富、森在横大路、南、

山槐記云、治承四年八月廿二日、壬寅、曉更參福原云云、於富、森、邊天曙、於今津留、船着饌、申終、刻着大物差饌、

○棕下里

三鈷寺雜々文書云、沽却ス、久我私領田、合壹町三段者字萱野、寺領、在山城國紀伊郡、棕下里、建久

四年十二月廿八日、沙彌蓮實

○常利寺

古文書云、御直判山城國紀伊郡常利寺地頭職、周防、左衛門藏人跡、任先例、大工五郎左衛門尉信宗、彌可領

知之狀如件、弘治二年十一月五日

○御諸神社神名帳云、和名抄云、

○紀伊郷和名抄云、

廣隆寺緣起云、隆城寺又號、紀、奉爲孝德天皇、秦、河勝、弟和賀奉造之、○き寺にそこのいけは

り侍りしをりにまかりあひて、家集、すみかへる袖にはる池の水の面に今は蓮のひらけむ

にわはむ 兼澄

志卷第十六附録

紀伊郡部

○金札社 在伏見板橋鷹匠町、元在于城山、臺云云、當社、伏見郷、惣社也、然秀吉公朝鮮征伐之時、已來以御香宮定惣社也。

○豊後橋 元無橋、今日、○文祿中、豊臣秀吉公、命于豊後、大友氏、始而令造之、故稱豊後橋、橋以南、曰向島、自是手而行、大和也。指月橋、經巨椋長池、而通南部新道也、上古、越伏見、六地藏、木幡、宇治橋、至栗子山、歷梨間井

○瑞光寺 在深草實練寺、西南、元政上人開基也、元政、墓有寺内、墓上植小竹二三竿也。

深草志云、瑞光寺者極樂寺、内藥師堂之遺址也、明曆元年元政法師開荒穢、而營一字、堂、乃名以今號、

山城名勝志卷第十六畢

山城名勝志卷第十七

宇治郡部

○粟田山 粟田口、東、此地兩郡、境也、和名抄云、粟田郷在愛宕郡、

文德實錄云、齊衡三年十月辛卯、從五位下紀、朝臣與我業以山城國宇治郡粟田山、施入安祥

寺、○日本紀略云、天曆三年五月廿二日乙丑、近曾粟田山、山路俄以秀石、已爲損害、車馬、往還甚多、差官使、可加實檢之由、給官旨、於山城國、○六帖、粟田山、このゆともこのゆと思へとも猶あふ坂、いはるけかりけり、喜撰、○夫木、道のくちあいたの山に秋霧の立野の駒もちかつきぬへし、好忠

○松坂 從粟田口、登、日、岡坂路也、

平家物語云、賀茂川サツト打渡リ、粟田口松坂ニモカ、リ、○明月記云、元久二年閏七月廿六日、自關東、實朝、而送、狀云、朝雅謀反、者也、在京、武士、駈畿内、家人、可追討、者、仍馳參院、御所云云、武士自御所、已向朝雅宅云云、已張挑戰云云、朝雅、首已到來云云、持向松坂懸之、○日吉社並叡山、行幸記云、元德二年三月、又京都の貴賤上下、冷泉萬里小路より三條河原粟田口邊にいたるまで、見物車棧敷のかまへありとも見えす、松坂檜岡をこえ、五位墓四宮河原になりぬれり、鴨長明か述懐せし、外山はるかにみえわたり、まかきい山となかめて、遍昭僧正のすみけん花山もとをからて、けさのかすめる音羽山、山科、如意山、安祥寺、松の戸ふりてまかしくし、岩田森、鵠坂、駄餉の御まうけもうるいしくて云云、○長明道之記、かへりこん程をちきらん忘るなよ我まつ坂の松ならいまつ

○八町坂

太平記、天正本云、康安二年三月十三日、主上西園寺へ還幸ナル云云、粟田口ヨリ八丁坂迄、洛中邊境、貴賤迄、見物ニ群集セシカハ、

○日栗田口、東、峠也、在御廣野、西、○日吉行幸記、作、檜岡、應仁記云、東岩山名、一家、栗田口日、岡峠ヨリ攻上ル、○卅八帖歌枕云、入日、岡山城國栗田口日、岡、云所是也、云云、○勅撰名所和歌抄云、○續古今「はしたかのすゝの志の原狩くれて入日の岡にき、す鳴なり」土御門院

○花山在清閑寺山、東、隔谷東、宇治郡、西、愛宕郡也、此山、東南麓、有花山村、續古事談云、堀川院、御時、内の女房餘多、色々のきぬいたしこほして、花見に花山へむかり、栗栖野の邊にて、東さまにはせうたれぬ云々、○中右記云、嘉承二年三月十四日、内、女房又見、洛外、花、車五兩到、花山寺、雲客廿人許相從、或車或馬、各以任意、此、外右宰相中將顯雅左京、大夫顯仲新宰相俊忠又相具、云云、○文花秀麗、仲雄王尋、良將軍、華山、々庄、將軍告期不在、君山白雲東嶺、下、昨對宮内、暮相期、平明騎歷山中、路、踢、石溪行駘、自遲、

○元慶寺今北花山村從、道北小堂殘、號、元慶寺、本尊藥師佛、遍昭僧正、像等見在、古、地、海道、北山際、有呼寺、内、田、至于今、所々殘礎石、土人云、此村、氏社、六所明神、元慶寺、鎮守、云云、拾遺抄云、花山、山階にあり、元慶寺と云、御寺たてられたり、花山院、彼寺に御幸ありて、御出家あり、仍號、花山法皇、後に京に御座御所を花山院と號する也、遍昭僧正も住、彼寺、仍號、花山僧正なり、○拾芥抄云、元慶寺公家恒例被、行御讀經、廿一寺、一、○三代實錄云、元慶元年十一月九日乙亥、詔、以、元慶寺爲、定額、類聚國史、置、年度三人、大悲胎藏、業一人、金剛頂、業一人、摩訶止觀、業一人、先是法眼和尚位遍昭、上表言、中宮有身之日、今上降誕之時、遍昭薄心誓願、

草創此寺、○帝王編年記云、寬平二年庚戌二月十九日、遍昭僧正入滅、年七僧正者桓武帝、孫、安世大納言、子也、深草、御時藏人、頭、左近少將、良峯宗貞天皇崩、後、嘉祥三年、出家住、花山、元慶寺、仍號、花山、僧正、初從慈覺、次從惠安、鐘銘序○菅家文章、元慶寺、此寺之有此鐘、弘誓甚深、至心無、等、元胎發願、遇、其人、之、開、八萬藏、九乳翹、誠、待、彼、力、之、及、三千界、是故日融内應、霜氣外催、皇帝馭曆之四歲、己亥建、庚午、八日丁酉金火用事、治鑄施、功、謹、禪器也、唱梵音也、云云、○花山に法皇のみゆきありし、とくかへらせ給なんとせし時、拾遺「まてといひ、いともかしこし花山にありしとなくん鳥の音もかな、僧正遍昭○花山にまかりけるに、僧正遍昭か室の跡の櫻の散けるを見て、續古、あるしなきすみかに残る櫻花哀むかしの春やこひしき、津守國基○歷代編年集成云、花山院寬和二年六月廿二日、夜半偷出、鳳闕、向、花山寺、出家、御年十九、法名、入覺藏人左少辨道兼、僧嚴久兩人、禁闕、相從也、○愚管抄云、花山院、花山といふ、元慶寺にて御くしおろされければ、中畧此事をきいて、中納言義懷、左中辨惟成、いやくて、花山にまいりて、すなはち出家して、この二人のいさゝかのさすなく、佛道にいりとほりにけり、義懷いひむろの安樂寺の僧になりけり、○菅家文章、貞觀十八年四月二十三日、爲、前陸奥守、安大夫、於、花山寺、講法花經、顯文、弟子從四位下安倍、朝臣眞行、敬奉、寫、妙法蓮華經一部、即於、華山寺、禮、請高僧、演、說妙義、起、二十三日、至、二十六日、云云、○文永八年毎日一首中○夫木「咲と聞てのほりやすくを思ひやる手向る法の花の山寺、爲家、近世愚道和尚、號、獅子山花山寺、愚道、寛文元年遷化、謚、寶鑑國師、此地、創、一寺、

○觀中院

延喜主稅寮式云、花山寺觀中院燈油四斗五升、同院五大尊料七斗二升、○扶桑略記云、寛平二年二月廿日丁未、奏云、花山僧正昨夜入滅云云、廿一日戊申、詔遣少納言從五位下令扶元慶寺吊故、僧正遍昭遺室、○系圖云、遍昭法眼權僧正、元慶寺座主號觀中院、○古今秘抄云、花山の山階にあり、東山くめ、ちのはしりおり也、彼僧正の堂房など有しと、教長卿注せり

○遍昭墓在元慶寺南二町許、土人呼遍昭墓

○慈德寺拾芥抄云、東山寺號華山

藤原系圖、山兼忠權僧正妙音院號慈德寺、關白忠通、男、○百練抄云、長保元年八月廿一日、東三條院供養慈德寺、准御齋會、日本紀畧同之、○扶桑略記云、長保元年八月廿一日、供養慈德寺、律師嚴久任少僧都、寺司、賞也、○以呂波字類抄曰、慈德寺尋禪僧正申寄、阿闍梨五日、日本紀畧云、永延元年三月五日云云、○榮花物語云、女院東三條院長保三年閏十二月廿二日、つゝにむなしくならせ給ふ云々、かくて御法事のはとにもなりぬれり、花山の慈德寺にてせさせ給ふ、○御堂關白御記云、寛弘二年十二月廿二日丙申、早朝從内出參慈德寺、小雪下、入夜還、○今昔物語云、觀硯聖人南山科ニナン將出タリケル、其ヨリ慈德寺、南、大門ノ前ヨリ行キ、道ヨリナン粟田山ハ將越テ、川原ニハ出タリケル、家ハ五條邊ニアリ、○藤原系圖、觀硯ハ香根、朝臣、孫、由忠、男、

○山科和名抄云、宇治郡、北限山、南限山、西限山、東限山、北山科ハ今昔物語ニ、粟田山ニ行テ北山科ニ行ヌト云云、南山科ハ、南山科ヨリ慈德寺ノ南大門ノ前ヨリ河原ニ出タリト云云、然則北山科ハ粟田口ヨリ行キ、南山科ハ滑谷ヨリ出ルカ、

顯注密勘云、相坂關の山城と近江との境也、關より西の山階なり、○類聚國史云、天智天皇八

年五月戊寅、朔壬午、天皇縱カシマ獨於山科野、天皇弟藤原内大臣及群臣皆悉從焉、日本紀、○石山にまいりける道に、山しなといふ所にて休み侍けるに、家あるし心さまに見え侍ければ、今歸るさになどいひけるを、よにさしもといひ侍ければ、後拾遺「歸るさをまち心みよかくなからよまた、にてはやましなの里、和泉式部○千首、夕立のはや山しなの奥晴て音羽になひく浮雲の空、爲尹○夫木、いつしかと初秋風に山しなの岡邊のくるす朽のちるらん、藤原國友

○山科園

延喜内膳式云、五月五日、山科園進早瓜一捧、又云、園神山科園一座、

○陶原家山階寺、舊跡、邊又追分道小野村ニ有橋、土人呼興福寺、橋、

帝王編年記云、齊明天皇二年丁巳、内臣中臣連於山階陶山城國宇治郡原家始立精舍、乃設齋會、是維摩會之濫觴也、扶桑畧記、○又云、山階寺大織冠於山背、國宇治郡小野郷山階、村陶原家建立、號山階寺、淡海公於奈良、都建立之時、改額號興福寺、東齋隨筆、諸社記等同之、○盛衰記云、興福寺ハ是淡海公ノ御願、藤氏累代ノ氏寺也、此寺ハ元天智天皇即位八年、嫡室鏡ノ女王、大織冠ノ御爲ニ、山城國宇治郡山階ノ郷ニ被建、山階寺ト名付、

○山階宅

日本後紀云、延曆二十年四月庚戌幸參議紀朝臣梶長、山階宅、

○山科殿

山槐記云、應保元年七月十七日戊子、大殿令渡山科殿給了、

○山階山庄山階左大臣實雄弟也實雄常盤井相國實氏弟後宇多院外祖父也

神無月の比、山志なの山庄に侍けるに、時雨し侍ける日、女房のもとに申をくり侍し、續古「あくれのみをとほの里の近けれと都の人のとつてもなし」左大臣

○山科新御所土人云、御所森在大宅村與大塚村間、又大宅村、氏神、山呼御所、山是謂舊跡也。

百鍊抄云、治承三年六月三日、上皇山科、新御所御移徙、本是雅實僧都領、進故、建春門院、依有飛泉、去比被造營、○山槐記云、治承四年五月廿三日、甲戌午、尅北山科燒亡、下人云、法皇御所云云、自園城寺燒之、武士等向寺之時、於彼所調陣仍燒之云云、

○白河寺後白河院御、在山科鄉東野村、寺內有後白河院石碑、故號白河寺、寬文中、影堂云云、關山派愚堂和上之徒無明再興之云云、號青龍山白河寺。

山科家、雜掌言上、文書云、山科家、雜掌重支謹言上、右子細者山科、郷之内□□之事、爲當家名字之地譜代知行之段勿論也、就中當郷之内、諸散在名田等、號後白河院御影堂領事、彼在所仁院、御所被置立、御自筆仁御影被遺之條、則爲御修理供料可致、知行之段、觀應三年八月三日同廿三日、等持院殿様御判兩通、并弘安又和其外到應仁歲中、仁數通被成下給旨云云、然於勝定院殿様御代、依三寶院殿御押領、御影堂御修理已下之事者不及申、既勅筆之御影及破滅之間、法住寺殿江預置申、先爲當家每月供料致下行者也、文龜二年十月日

○澤殿今大宅村、西有稱澤所、是舊跡歟。

東鑑云、文治三年四月一日壬申、洛邊可被建御亭之由、日來有沙汰、而當時無可然地之間、可給所之旨、被申帥、中納言、山科澤殿領有便宜、地所望云云、

○山科陵諸陵寮式云、近江大津宮、御宇天智天皇、在山城國宇治郡、城東四十四町、南北十四町、陵戶六烟、○江次第云、在北山階、○在日岡、東御廟野、陵側有小社、鳥居、額云、天智天皇云云、

日本紀云、天智天皇十年十二月三日、天皇崩于近江宮、○水鏡云、天智天皇十年十二月三日、御門御馬に奉りて山階へおひして、林の中に入てうせ給ひぬ、いつくにおひすといふ事をあらす、只御沓の落たりしを陵にのこめたりし、帝王編年記同之○神皇正統記云、天智此天皇中興の祖にまします、國忌の時にあたかひて改まれ共、是のなかくかひらぬ事になりなき、○榻嶋曉筆抄云、昔天智天皇天へアカラセ給シ時、落サセ玉ヒシ御沓ノ、石ニ成タル也トテ、今ノ山科ノ御陵ノ南ニ侍リ、

○鏡山藻鹽草云、天智天皇陵也、○詞林采葉抄云、鏡山ハ、三所にあり、山城近江豊前也。

從山科御陵退散之時、萬二長歌、やすみあるわか大きみのかしこみや御陵つかへる山科の鏡の山によるのもよ下畧、額田王○君かやとりそくつの跡ある、左梨葉、かけとをくまらふ鏡の山しなや

○安祥寺在御廟野東諸羽明神、西、號吉祥山、今高野山寶性院兼帶之。

寶性院宥快傳云、永和二年、謁興雅僧正、於安祥寺咨叩入唐、惠運僧都、一流之淵源、僧正喜其器宇、傾誠附與、故安祥之正統而歸寶性、○今有觀音堂、十一面、像長八尺、傳云、此堂元在如藏山、谷、是眞言傳、謂上寺乎、慶長年中遷此地云云、故至如意山、邊、當寺、境○文德實錄云、齊衡三年十月、紀朝臣興我業、以山城國宇治郡栗田山、施入安祥寺、○拾芥抄云、五大虚空藏太后順子、○藤中抄云、順子、先、五條、后、冬嗣、女、仁明、后、文德御母。○文德實錄云、齊衡二年六月戊寅朔、詔以安祥寺預定額、施稻一千束、以充燈油、類聚國史○三代實錄云、貞觀元年四月十八日癸卯、緣

皇太后、御願置安祥寺。年分度者二人、願文曰、去仁壽年中初建此伽藍云云、又每至八月、起二十一日、盡二十七日、令七箇寺殊奉爲田邑、天皇、令修尊勝法云云、此之勝緣是爲無量維時奉資、仁明天皇云云、開關以來登暇、聖靈灑薰修之雨、清三障之垢、後々代々有土之主、依持念之風、固萬代之基、殊別奉莊天智天皇山陵、兆域、近於道場、疎鐘覺長夜之眠、雅梵驚重昏之聽云云、凡厥度之事、令權律師位慧運、專一勾當、血脉相傳不關別人、其行事者一任寺記、○元亨釋書云、釋惠運洛城人、東寺實惠之徒也、承和五年、共圓仁師同船入唐、十四年、皈爲安祥寺第一世、○真言傳云、少僧都承和九年、大唐商客李處人等カ舟ヲ付テ、八月廿四日ニ入唐ス、是唐國會昌二年也云云、武宗佛法ヲ滅セシ時ニ值テ、青龍寺ノ鎮守青龍ノ御体ヲ取奉テ飯朝ス、仁明天皇ノ御宇嘉祥元年八月ニ、太皇太后ノ奉爲ニ、安祥上下兩寺ヲ建立シ、御願ヲ始行ス、此寺ニ唐朝ヨリ將來スル所ノ、青龍ノ御體ヲ安置シ奉テ、寺ノ鎮守トス、右鎮守在野山、傍文祿年中、高野山應其上人再興、○元亨釋書高向、公野山應其上人再興、讚州、刺史高、公輔、幼爲慈覺、徒、名湛慶、後反俗、俗號高大夫云云、都城多恠、敕太史卜、奏曰、王城、東南、古寺佛像亂階、故有此、怪、官使物色東山、安祥寺、大殿、安兩界、諸尊歲久傾斜差升、詔公輔整理、公輔向寺入殿、坐一席、以白杖指揮曰、其像移某處、諸像自起、隨杖、○今昔物語云、極樂寺、兩界云云、○真言傳云、其兩界ヲ安置ノ寺ハ、貞觀寺云云、○壺囊抄云、安祥寺木像、兩界ハ、惠運、造立也、○古文書云、安祥寺賢聖會、田、東一段者故、行賢法印、相副證狀四通、限、未來際、奉寄進御坊者也、寬正三、六月十五日、密乘院御房、○安祥寺に閑居して年をかきね侍りける時、續門葉「老か身に世のうきことのなくさむい今いく程と思ふはかりと、法印觀瑜○女御高子か

くれ侍て、安祥寺にて後のわさし侍けるに、人々のさ、けもの奉れるを見てよみ侍ける、
續後撰「山のみなうつりてけふにあふとい春の別れをとふとなるへし、業平、○三代實錄云、天安二四位下藤原朝臣多可幾子卒、右大臣從二位良相之第一女也、

○寶塔

延喜主稅寮式云、安祥寺寶塔料五千束、

○太后順子陵

三代實錄云、貞觀十三年九月廿八日辛丑、太皇太后園云云、太后姓藤原氏、諱順子、贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之女也、母、尙侍贈正二位藤原朝臣美都子、十月五日丁未、葬太皇太后於山城國宇治郡後山階山陵、

○業平谷土人云、在安祥寺北、

今昔物語云、右近中將在原業平ト云フ人、或人ノ娘ノ形、有様世ニ不知微妙シト聞ケルヲ、心ヲ盡シテ密ニ盜出シテケリ、其ヲ忽ニ可將隱キ所ノ无カリケレハ、思ヒ縲テ北山科ノ邊ニ舊キ山莊ノ、荒テ人モ不住ヌ有ケルニ、其家ノ内ニ大キナルアセ倉有ケリ、此内ニ女ヲ具シテ將行テ臥セタリケル程ニ、俄ニ雷電霹靂シテ惶デレハ、中將太刀ヲ袂テ女ヲハ後ノ方ニ押遣テ、起テヒラメシケル程ニ、雷モ漸ク鳴止夜モ暎ヌ、○按、業平谷此所歟、

○諸葉山在四宮河原北、土人呼柳山、(リウサント) 麓有諸羽明神社、○夫木集云、山城、

盛衰記云、粟田口、兩葉山、四宮河原ヲ打過テ、○平家物語云、長門本木曾もろは山の前、四の

宮河原に打出て、○六帖 夫木よみ人しらす「つらしとてもる葉の山にかくるとも我山彦になりてこたへん 喜撰

○四宮河原在安祥寺村、東南、按、四宮者仁明第四宮、舊跡ナリ故有此名

四のみこのうせたまへるつとめて風ふくに、家集「今朝よりはかなしの宮の山風やまた逢坂もあらしと思へい 小町○夫木 百首御歌」明わたる、四の宮河原霧はれて遠かた人の數をみえける 順徳院○井蛙抄云、龜山院の御時、山城國名所を賦する百韻御連歌侍りしに、よのつねのやさしき名所は大略過て、今は俗にいひつけたるからすきかはな、四の宮かはら、などやうの名所をもとるへしと、さたありしに、爲氏卿、ちきりしのみやかはらさるらん、と被付たりしに、「つらからすきかはなへてそたのまゝし 隆博

○四宮河原觀音堂

足利治亂記云、義滿公應永元年九月十一日、日吉へ御社參也云云、十四日、戸津河尻ヨリ御船ニ召サレテ、大津ヨリ御入洛成レテケルカ、關、明神、四宮河原ノ觀音ナトニモ、御領少々附ラレケル、○土人云、元諸葉山、麓有、小堂、本尊聖觀音、聖德太子作云云、此堂顛倒、後、安置民家、近世有僧結一字奉レ安云云、明曆年中、依、明正院勅額、今、堂御造營云云、今、十禪寺是也、○按、此本尊四宮河原觀音乎、

○人康親王山庄宮也、法名法性、禪寺、西北、泉石、跡少許殘云云、

三代實錄云、貞觀元年五月七日壬戌、四品守彈正尹兼行常陸太守人康親王出家 入道云云、人康親王者仁明天皇之第四子也、○愚見抄云、人康親王母女御藤原澤子、イエテヲコナシテ伊勢物語云、昔たかきこと申す女御おはしましけり、うせ給てな、七日のみわさ、安祥寺にてまけり、右大臣常行といふ

人、其みわさにまうて給うて、かへさに山科の禪師のみこおはします、その山しなの宮に、瀧をとし水はしらせなどして、おもしろくつくられたるにもうて給ふて、三條のおほみゆきせし時、きの國の千里の濱にありける、いとおもしろき石たてまつれりき、中畧島このみ給ふ君なり、この石を奉らんと給ひて、御隨身舍人してとりにつかはす、畧これをたゝにたてまつらは、すゝろなるへしとて、人々に歌よませたまふ、右のむまのかみなる人、「あかねとも岩にをかふる色見えて心をみせんよしのなけれは○草根集「山科の岩はふるくは殘るらん苔をささみし人の言の葉 正徹

○廻地藏堂在四宮河原十禪寺、側、西光法師所造立、七道、辻、一ッ也、

難太平記云、四宮河原ニ勢ヲ向ラレケルニ、先ッ坂口ニハ仁木右馬助義長三井路巡、地藏ニハ故殿向ヒ給ヒシ、

○小關道廻地藏堂ノ東ヨリ左ヘ行路也、三井寺又大津ノ北邊ヘ行ニ徑路、チカミチナリ、

明月記云、建仁三年四月廿七日、日吉社、還御自八王子直還御、於三井寺、前七條院御幸、由有其、聞云云、但彼院、令廻大關給、或記云、大關道逢坂、○平家物語云、寺は宮入せ給ひて後、大關小關堀切て云云、○源光行海道記云、四の宮河原のわたりは志のゝめに通りぬ、小關を打越て大津のうらをかしのゆへ、

○招月菴土人云、四宮村徳林菴之山際、有舊蹟云云、

草根集奥書云、釋、正徹、字清巖、俗姓紀氏、爲東福寺、書記、因號徹書記、詠諷世之和歌、故謫ニラル

山科、扁菴曰、松月、又曰、招月、今不知其所、有遺稿、名草根集、假名序後成恩寺殿、全部五冊、詳略有之、長祿二年五月九日寂、七十九歳○朝野藝苑高名集云、正徹書記字清岩、世稱山階之清岩、因名歌號招月菴、氏族、備中、國小田也、詠草名、草根集、兼良公製序、今川了俊、爲尹卿二人、門弟也、云云、門弟正廣、正般、正周等、口時遊敷島、道者無不問津、唯有雅世堯孝、忌妬徹、之才、故詠歌不入、新續古今云云、○招月庵にてよめる、草根集奥書「山の端に月をまねきて庵ふりぬ出るをまつと入をおしむと 正徹

○袖くらへ

宇治拾遺云、山科の道つらに、四の宮川原といふ所に、袖くらへとして、あき人あつまるどころあり、○盛衰記云、三條ヲ東へ賀茂川白川打越テ、粟田口松坂四ノ宮河原ヲ通ル、中畧東路ヤ袖クラへ畧行モ飯ルモ別テハ知モ知ラヌモ逢坂下畧○拾玉「哀なりこれも世わたる庵をかしその山科の袖くらめまで 慈鎮

○袖の河原和歌色葉云、
そて河山城、

老のねさめ云、袖の河原といへるは、山城日の岡のあなた也、○夫木「都をは今朝を立つる旅衣袖の河原の霧のまよひに 衣笠内府 ○和歌草山 曉千鳥「霜さゆる袖の河原のさよ千鳥たか歸るさの涙とふらん 心敬 ○月さひしとや千鳥なくらん、 新筑波「霜こほる袖の河原を歸る夜に 心敬

○山藤尾夫木集云、山城、六帖、
藻蘆草等作山吹尾、

夫木「山しろしちの山藤尾にふす鹿の朝ふしかねて人にあらる、 讀人不知 ○按に、此歌六帖に山まな句右に同じ、然も山吹尾といふ所今不見、山科に藤の尾といふ所あり、四の宮河原の東、天津道の北なり、今屬于近江國、○以呂波字類抄云、園城寺四至文云東限海棹立南限大關下道北限崇福寺四至

○藤尾寺

古事談云、天慶二年之比、粟田山之東山科之北有一仁祠、號藤尾寺、南邊有別道場、件、所有一、尼、自先年奉造石清水八幡大菩薩像、安置年尙矣、凡厥靈驗觸事多端、仍遠近僧尼、貴賤男女、歸依如林、輻湊成市、彼石清水宮寺、每至八月十五日必設法會、號之放生會、上下諸人莫不來會、而件尼同日更設此會、晝則迎俗人、盡音樂之妙曲、夜又屈名僧、傳菩薩之大戒、云飲食云布施、盡美盡善、因茲僧徒俗人等、不向本宮云云、法會頗以寂寥、爰本宮、道俗、相議設法會於同日、成障礙於本宮、今此所行爲之如何、仍自本宮牒新宮云、八月十五日、是本宮放生會日也、改他日行、新宮會云云、而件尼蔑如本宮之告、經年無所改定、爰八月十二日、本宮、神人等數千人、發向件山科、新宮、壞弄其神社、毆縛彼尼身、至于其靈像者奉移石清水、本宮云云、或說云、護國寺、御體者此、靈像云云、○扶桑畧記、今昔

○餘戸和名抄云、
宇治郡、
村是餘戸、
郷遺名乎、

安祥寺境内、古文書云、山城國宇治郡餘戸、郷石雲里、云云、

○神無森在、小山村與、
餘古木村、間大津路、
南道分村、東、今
無森有、於此地、諸羽明神祭禮、
日備神供也、

盛衰記云、逢坂ヨリ直ニ山科ヤ神ナシノ社ヲ南ニカ、リ、小野ノ里醍醐路ヲ行、又云、木曾

ハ此彼ヲ打破テ、東ヲ指テ落行ケリ、四ノ宮河原神無ノ森打過テ、

○ 鶺鴒坂 土人云、大津路道分、東也、今平地而無坂、只二町許、間道少高、神無ノ社、北也。

盛衰記云、會坂ヤ一村杉ノ木ノ本ヨリ、筧ノ清水絶々也、鶺鴒坂神無ノ社、醍醐路ニカ、リテ、木幡ノ里ヲ傳ツ、○日吉行幸記云、鶺鴒坂馱餉の御儲もうるはしくて、

○ 音羽山瀧川里

堀川院の御時、ひんかし山の花尋につかわしける時讀りける、新勅撰「けふこそすは音羽の櫻いかにそとみる人」とはまし物を 權中納言俊忠

○ 山 牛尾山、記云、宇治之北郡有山、曰音羽、凡縱横八九里。

僻案抄云、四雞祭東相坂 西山崎、關 南木幡關 北松か崎○夫木「鳥むたつ相坂山のさかひなる手向の神も我ないさめを 仲正○顯注密勘云、相坂關は山城と近江との境なり、音羽山は關の西南の山つゝきたり、關より西は山階也、○井蛙抄云、音羽西坂本山科どもに山城國也、瀧と川とは通兩所歟、をとい山は限山科歟、○石山にまうてける時、音羽山の紅葉を見てよめる、古今「秋風の吹にし日より音羽山嶺の梢も色つきにけり 貫之○後拾「逢坂の關をや春の越つらんをとりの山のけさ霞める 橘俊綱

○ 谷

家集「春やけさ峯たちくらし年波もかゝる音羽の谷の川風 道堅

○ 瀧 在牛尾山、坂中、又比叡山西坂本有同名。

新後撰「名にたてる音羽の瀧もをどのみきくより袖ぬるゝ物かゝ 有家○夫木「なる神の音羽の瀧やまさるらん關のこなたの夕たちの空 中務親王

○ 川 音羽、瀧、末也。

新後撰「瀧つせに落とふ水の音羽河せくかたもなき五月雨の比 爲氏

○ 里 牛尾山、麓小山村、西有音羽村、元、小山、音羽、一村也、云云。

永享年中寺社文書云、比留田佐渡、入道道音申、清閑寺領山城國音羽、庄公文職、事、中畧可、沙汰、付、道音之由所被、仰下也、 永享二年十二月廿六日 大和守 對馬守 ○名寄「郭公いかてきかまし音羽山ふもとの里にやとらさるせい 藤原成房○新後撰「秋ふかくなりゆくまゝに衣うつ音羽の里

や夜寒成らん 頼泰

○ 牛尾山 牛尾山記云、宇治、北郡有山、曰音羽、其一衆曰牛尾、○從此山出、江州膳所、堀川百首「嶺たかき牛の尾山にいる人は柴車にてくたるなりけり

の尾や春のくるまにかつ消てまたらにみゆる峰の白雪 修理大夫顯季 ○三井集「牛

○ 嚴法寺 本尊千手觀音在牛尾山、小山村、南半里許、其間坂路也、今曰十八町坂。

山城、州音羽、庄牛尾山嚴法寺、記云、洛之東宇治之北郡有山曰音羽、凡縱横八九里、脩嶺尖峰數十餘衆、其一衆曰牛尾、中有寺以嚴法額之、蓋千手大士之靈場也、故老相傳、昔此山爲教寺、像、即天智帝親、所製作、不動多聞侍立左右、然、開關者不知、誰某、園城、智證寓止、以勤、修如法之經會、韃、藏、墨汁之餘瀝於石窟、中、爾來其、徒修其、法者來就彼地、分執、以具、于染

翰、每歲爲例、中畧夫牛尾爲山也、西、隔斷村塢甚遠、而石山醍醐連於東南、其峰峻峻、達絕頂、則踏雲凌霄、其谷幽邃究徹底、則捫蘿攀藤矣、抑草木蕃茂、珍禽也異獸也所作、群竄跡、故芻蕘者往焉、雉兔者往焉、門外一條之溪流、衰々漉々日夜靡竭、匯而拖羅帶、瀦而開鏡匣、所謂清水飛瀑之根源也、壬子明應初元臘月日 野釋玄駿叟

○小山 音羽村、東有、小山村

將軍御元服記云、天文十五丙午年十二月十九壬寅日御元服、光源院御路淨土寺ヨリ南へ若王子ノ前ヲ南へ、南禪寺ノ内ヲ御下馬也、栗田口ヲ日ノ岡花山ヨリ本願寺屋敷、丑寅ヲ東小山、前ヲ大津へ御成云云、坂下樹、下成保宅へ御下着、佐々木家記云、左馬頭義藤御元服、御歲十一、後日被改義輝

○高水寺 在小山村、今西本願寺山莊之地是也

京華集云、高水寺、在山科音羽、鄉小山、蓋從一位大夫人、山莊、以西山玉巖座首、主住持、殿安、千手、像、與清水寺、大士同材同作、靈驗無比、去歲之秋、大夫人車駕入寺、乃登此山、詠和歌二篇、國人榮之、初、一篇、詠鹿、後、一篇、詠瀑也、曰、清水、曰、高水、以音羽川爲源矣、云云、大夫人、院號妙善、延德二年六月十日、高水寺殿三品花溪、日野贈内大臣政光、室、從一位富子、母、元號北小路殿 ○又云、延德三年六月廿一日、高水寺殿三品花溪大禪定尼、掩光於北、御所云云、夫高水寺者與清水同其源、自深山中、而流出、將來如銀河、落天、然、白衣、大士、高堂在焉、緇素來詣者絡繹於路也、按古記、曉待和尚挿草此山、洎乎一千歲也、尊靈以高水爲墳寺、北御所、洛陽北小路室町、西、 ○白石明神 小山村氏社也、東、山下有二、白、石、其側有社、是則白石明神也 ○白石菴 號、小廬山、在小山村

河東祇樹一源統禪師行狀云、禪師諱會統、字一源、肥後州人、生於菊池藤氏、云云、戊寅、春卜居小山、以爲終焉之許、居隣白石、神祠、因曰白石、

○十住心院 心敬僧都住菴

周桂、書、與書云、花落、東音羽山、十住心院、心敬僧都云云、亨祿元年八月、月上、 ○朝野藝苑高名集云、心敬僧都十住院通、教學儒學云云、和歌、師清巖、尤長、連歌、入新築波、文明七、四月十六日死、七十歲所著甚多、○和歌草山、述懷、音羽山なれし麓の宿あれて今廓に身をかくすかな、心敬○同庭紅葉「せきいる、水なき庭に紅葉々をなかつ音羽の山おろしの風、心敬○文明十四年の春、前十住心院心敬僧都の墓所にて、園塵「ちりにしも花の又さく此世かな、兼載

○山科本願寺 舊跡在東野村、西野村、間

蓮如上人傳記云、文明十年正月廿九日、河内、國茨田、郡中振、鄉山本之内出口村、中之番ト云所ヨリ上洛シテ、山城國宇治、郡小野、庄山科之内野村、西中路、住スヘキ分ニテ、暫當所ニ逗留シテ、塚ニ小坊ノアリケルヲ取登セテ作ラル、遺德記 ○遺德記云、文明十二年十月十四日、檜皮葺ノ御影堂造畢、五間四面、十一月十八日、近松ヨリ根本御影ヲ移入、同十三年四月廿八日、阿彌堂上棟、三間四面瓦葺、同十四年正月、大門ヲ建堀ヲ堀リ、兩所ニ橋ヲ渡サル、同年龜山院伏見院勅願ノ宣旨ヲ蒙ル、○九月十三夜、月おもしろかりけれ、東山を見て、傳記、大宅や山科つゝく小野山のひかりくまなき庭の月影、蓮如○二水記云、亨祿五年八月廿四日、山科本願寺早旦合戦、已刻許攻落之、抑本願寺者及四五代、尤寺中廣大無邊、嚴莊只如佛國、云云、在家又

不異洛中也、今日一時滅亡、長亭年後兵亂記同之○賀越鬪諍記云、山科本願寺ヲ、六角少弼方法花宗同事ニ被_レ攻ケレハ、聖人密ニ忍テ大坂ヘソ被_レ落ケル云云、山科ノ寺内一時ニ灰燼ト成ヌ、念佛三昧ノ阿彌陀堂ノ跡トテ、沙頭ニ露班々タル、○將軍御元服記云、天文十五年十二月十九日、御元服、御路粟田口ヲ日ノ岡、花山ヨリ本願寺屋敷丑寅ヲ東小山、前ヲ大津ヘ御成、

○蓮如上人墓明應八年三月廿五日遷化、今現山科古跡有墓、敷地、東表ニ有數株、松所也

傳記云、蓮如實如證如三上人、廟、山科、御房、邊ニマシマス、

○實如上人墓東野村、東惣土堤ヨリ巽六町餘ニアリ

奉贈_二日本山科實如老上人_一、上人、德行是問_レ何_レト、一箇、禪門大丈夫、心裏ニ要容_二天外_一善、

此生渾似_二竹中_一、虛、大明正德八年五月、杭州鉄冠道人詹仲和

○大明正德八年、當本朝永正十年、實如者蓮如、子也、光兼法印權大僧部、大永五年二月二日化、

○栗栖野從花山村、至勸修寺、邊、白栗栖野、今曰栗栖野、原、在花山南勸修寺、北、又愛宕郡、有同名也

花鳥餘情云、小野郷栗栖郷、山城愛宕郡又宇治郡にも小野栗栖野有、秘云、栗栖野、勸修寺之邊也○續古事談云、堀川

院の御時、内の女房花見に花山へむかひれけり、栗栖野の邊にて、東さまにはせうたれぬ、下畧○續古_レみわたせ_レ若なつむへく成にけりくるすの小野の萩の燒原 權中納言長方○草根

「栗栖野の草葉なみより笠取の山風ながら雨のふりきぬ 正徹

○田村磨墓土人云、在栗栖野、勸修寺、北五町許醍醐道、東林、中也云云、今此所ヲ曰馬背坂

田邑傳記云、弘仁二年五月廿三日丙辰、田村磨奄然而薨、于時年五十四贈從二位、同廿七日庚申戌、二尅、

葬於山城、國宇治、郡栗栖村、今俗呼爲馬背坂、マカカ于時有勅、調修甲冑兵杖、劍、鉾、弓、箭、備、監、令合葬、向城

東立_二窆之_一云云、其後若可有國家之非常天下之災難者、件、卿、塚内宛_モ如打鼓、或、雷電、但

往古來今得將軍號、而向坂東奧地者、先密參_二此墓所_一、深成_二祈禱_一、發向、賜_二本願將軍_一、墓地、官府、

在山城國宇治郡七條、昨甲里、西栗栖村、太政官府 民部省 四至東限六七條、間、畔、井公田、西南、限弘仁二年十月十七日

參議右大弁從四位上兼行右兵衛督備中守秋篠朝臣安人今繼右大史正六位上對七等坂上忌寸○日本後紀云、弘仁二年五月丙辰、大納言正三位兼右近衛、

大將兵部卿坂上、大宿禰田村麻呂薨、粟田、別業、時年五十四、田村麻呂者從三位左京大夫兼

右衛士、督苜田麻呂子、正四位上犬養之孫、身長五尺八寸胸、厚一尺二寸、目如蒼鶴、鬚編_二金

絲_一、有事而欲_二重身_一、則二百斤、欲_二輕_一、則六十四斤、隨_二心_一、所欲、怒目轉視、則禽獸懼伏、平居談笑

則老少馴親、毗沙門、化身、來護_二我國_一、相賀系圖ニ有嵯峨天皇宸筆贊同之○相賀系圖、苜田麻呂大耳、一男也、從三

位坂上大宿禰兵部卿右京大夫右衛門、督、

○馬背坂田村傳記云、宇治、郡栗栖野云云

ませさかを越けるに、蓮藏院の花盛なりければ讀侍ける、續門葉「櫻花たかいつはりの昔よ

り雲にあた名の立はしめけん 義淳法師

○勸修寺在小野村南、眞言門主東大寺寺務

拾芥抄云、醍醐四右大臣定方建立、云云、廿五大寺、一員也○密宗血脉抄云、勸修寺、承俊律師、建立也、

濟高大僧都勸修寺最初別當、承俊律師入室、○元亨釋書云、釋、承俊居東大寺、學_二唯識_一、兼_二眞言_一、

嘗建勸修寺、○勸修寺門跡次第云、醍醐天皇、御願所、或記云、延喜帝、母后胤子、贈太政大臣高藤公、女草創

也、中畧大僧都濟高聖寶尊師資權律師貞譽、承俊律師入室、資、延喜十年八月九日、任勸修寺長吏○扶桑略記云、延喜五年九月廿一日、

以勸修寺勅爲定願寺、○以呂波字類抄云、勸修寺格云、贈皇后在生之日令誓願天皇階下所建立也、有堂五宇、

○御願堂五大尊等身彩
色如意輪

件、堂、奉爲延喜天子、母后以外祖父宮内、少輔宮道、彌益所被造立也、

○本堂西院、東 本尊四天

件、堂、本施主、宮内少輔宮道氏建立云云、傳云、件、堂、彼、彌益朝臣、鷹屋之跡云云、去天喜年中、已以燒亡、仍故、大藏卿伏卿被造立、

○西堂

件、堂、康保元口七月廿一日、防中納言朝成故、右丞相定方府下奉爲之母尊靈、延喜年中所被建立也、天慶以來每及忌辰、期、刻、四日而開入講云云、○小世繼物語云、閑院の大臣冬嗣の御子、内舍人良門と申、其御子に高藤と申おはしけり、九月はかりに、小鷹狩に出給ひぬ、山科のないしやの岡をつかひぬ給ふに、今昔物語云、南山階、諸、山ノ程ヲ仕ヒ行大なる雨降り風吹神なりければ、人々やとりせんとて、むきたる方に皆はせちらしめていぬ、此君西の方に人の家のみゆるに、馬を走らせておはしぬ、御供に馬飼男一人なん侍ける、ちいさき門の内に入給ひぬ、雨風まさり神なりておそろしければ、歸給ふへき様もなし、日も暮ぬ、いかにせんと心ほそく覺してゐ給へるに、あをにふの狩衣袴きたる男の、年四十はかりなるかいてきて、こはなに人のかくておはしますそといへは、鷹仕タカツカヒに出たりつるに、かゝる雨にあひて行へきかたもなくて、

馬のむきたるにまかせてはしらせつるに、家の見えつればよろこひてきたるなり、いかせんとするとのたまへは、翁雨いたくふらん時は、かくておはしませかしといひて、馬飼の男のもどによりてたかおはしますそと問ければ、まかくの人のおはしますなりといひければ、その時にけいめいしてとりしつらひ、火ともしなすとすめり、とはかり有てあやしのやうにさふらへど、内へこそおはしませ、御をもいたくぬれさせ給ふてさふらふめり、ほしてこそ奉らめ、御馬に草かはていかに侍らはん、あのうしろのかたへひき入てなど申、あやしの家なれども、ゆへひておかしく住たれば、無下の者にはあらざりけりとおほして、又かくて有へきにもあらねは入給ひぬ、申畧ウツタカシはしはかりふして見給へは、ひさしのかたの遣戸ヤリドをあけて、十三四はかりなる女の、裏こきすわうの衣一重こき袴きたる、扇さしかくして、かた手にたかつきにおしきすへて、かはらけに箸を、きてもてきたりけり、はちちらひて遠くそはみてゐたるを見給へは、かしらつきほそやかに、髪のかゝりひたいつき、かやうの者の子ともおほえすいとおかしけ也、中畧日ウツタカシぬとねこうし給たるに、かくまいらせたればまいりぬ、夜も更ぬればふし給ぬ、此ありつる人こゝにきてあれとのたまへは、まいらせたり、とよれどひきよせてふし給ひぬ、ちかき氣はひ、よ所に見つるよりはこよなうけたかう、なつかしうらうたし、あはれに覺之給ければ、まめくしく行すゑまでのを契り給けり、中畧夜も明ぬれば出給とて、はき給へる太刀を形見に置たれとて、ゆめく親心あさく人あはすとも、人見る事すなといひつゝけて、いてもやらす、返く契りをきて出給ひぬ、馬に乗て四五十

町かはりおはする程になん、御供の人々爰かしてより尋奉りて、きあひてあさましかり悦ひける、さて殿に歸り給ひぬ、ち、殿きのふ出させ給ひしまゝに、見え給はす成ぬれば、いかにしつる事にかとおほしあかして、あくるをそきと、人いたしたて、尋給ふほどに、おはしたれは、嬉しとおほして、中畧今よりかゝるありきなせとて、鷹つかひ給はすなりぬ、御ともの人々もこの家を見す成にしかは尋ぬへきやうもれし、舍人男はいとま申ての中へいぬ、わりなく戀しく思はせ給へど、人やるへきやうもなし、中畧此見し人の戀しく覺え給へは、めもまうけですごし給ふ程に、六とせはかりに成ぬ、此御ともにも有し舍人男、お中よりのほりて参りたるに、此男一とせ雨やとりしたりし家は覺ゆやと問給へは、おほへさふらふと申ければ、うれしと覺して、御供にはたちわきなるものゝ、むつまじく召仕けるを具して、阿彌陀の嶺越におはしぬ、中畧ありし門に打入て、家主の男召出せば、思はずにおはしましたるか嬉しさに、手まといをして参りたり、有し人のありやと、はせ給へは、さふらふよし申悦ひながら、おはせし所に入給へれば、木丁の内にはたかくれてゐたり、中畧かたわらにいつゝ六ばかりの、をんな子のえもいはすめてたきわたり、是はたそとのたまへい、うちうつふしてなくにやあらむとみゆれば、はかくしういらふる事もなければ、心えすおほえて、此家なる人やあるとめせは、父をのこ参りて、膝にゐたり、此兒のあるは誰をと問給へは、一年おはしましたりしものち、人のあたりにまかりよる事もさふらはす、おはしまして後よりたゝならずなりて、生れてさふらふ也といふまゝに、いみしくいよく哀に成にたり、枕かみを見れば置し

太刀あり、さはかく深き契なりけりと思ふも、いよくあはれにおはす事かきりなし、中畧此家あるし何人にかあらんと覺して、尋とひ給へは、此郡の大領宮道の彌益といひ侍る、かゝるあやしき者のむすめなれと、さるへき前の世の契こそあらめと覺して、又の日むしる計の車に下簾かけて、侍二三人はかりくしておはしぬ、車よせてこの女をのせ給、中畧殿におりして西の對まつらひおろし給、又人の方にめも見やらせ給ひすみ給ふ程に、打つゝきおのこ二人うみつ、やむとなくおはする人なれば、たゝ成になりあかり給ふ、大納言になり給ひぬ、此姫君の宇多院位にねはしますに、女御にまいらせ給、さていくはくもなく、醍醐の御門をいうみ奉り給へる也けり、男二人の、泉の大將と申、其弟三條、右大臣となん申ける、此おほちの大領いやますの四位に成て、刑都大輔に成りける、たいこの御門位につかせ給ければ、大納言の内大臣に成給にけり、彌益か家の今の勸修寺也、向ひの東の山つらにむはの家に入たうを立たり、其寺をい大やけ寺となんいふ、此いやますか家のあたりを、あはれとおほすにやありけん、醍醐の御門の御さゝきい、ちかくせられたりとなん、今昔物語ニ其妻ノ堂ヲ起タリ、名同、○新六帖「ふる雨にくるすの小野の小鷹狩ぬれしを家のはしめ也けり 光俊 言塵抄云、此歌の高藤の栗栖野、鷹狩の心也、光俊此子孫也、○縁起云、三條右大臣定方公勸修寺草創、程なく薨、ハイツク佛閣の敦實親王の御沙汰云々、又、この寺いまた造はしめさるけるとき、渤海の使裴瑒といふ人この國に渡りけるか、越州つるかの津に付て、山科をめぐりて羅城門へ行て、南山のかけ道をとりけるか、馬よりおらて北に向ひて拜して通りけるを、人その心を

あらず、あやしひて問ければ、渤海客申けるい、この所にちかく伽藍出來侍へし、地形龜の甲のごとし、佛法の命長久にして、貴人たふへからず、この故に拜する也とを申ける云々、○延喜八年正月勅海國使裴瑋來朝○又云、五大明王を安置せらる、又寛平法皇の御ために、多寶の大塔をたてらる云々、此寺の東寺の眞言を旨として、三論宗をかぬ、始に廣澤流、後に小野の風を傳へける、雅慶大僧正の敦實王の御子、此寺の主也、御弟子濟信大僧正と申り、同じ親王御孫左大臣雅信の御子也、延喜の聖代の勅願なるうへ、三條右大臣一堂を建立せられたり、成風すてになりて、程なく隠れ給にければ、朝成朝忠など申御子たち、佛閣の莊嚴を添て、八月一日より同じき四日、丞相の御忌日にいたるまで、南北の碩才をまねきて、一乘八座の講肆をはしめをこなはる、○延喜主稅寮式云、勸修寺五大尊、燈油一石八升、供料白米卅三斛六斗、○元長卿記云、永正九年五月四日、勸修寺縁起出來、繪光信、○古文書云、城州山科、東西、庄、内散在分、事、任、當知行之旨、南者限、樵繩手、上者至、黒石、可被、全、所務之段、被、成、奉書、文龜三十一年六月松田丹後守 長秀判 勸修寺 松田豊前守 賴亮判、殿分、勸修寺領、寺邊散在八幡田、同新八幡田、號寛尊 法印跡、并末寺安祥寺、大宅寺、新御領、御所、内等、事、任、繪旨御教書保元、保安帳等之旨、御管領所不可有相違也、嘉慶二年九月二日 左衛門佐 當寺政所、○保延二年勸修寺にて、三十講をこなひ侍けるつゝ、民部卿顯頼○貞應の心を、玉葉、ひとりのみ尋ねいるさの山深み實の道をこゝろにそとふ、家集を二年三月十七日、前右少辨光俊、勸修寺に詩歌合し侍しに、花開古寺中といふことを、家集をのつから花やあるしととりるらん古き野寺のすむ人もなし、光經○勸修寺僧正、成實池邊に

水閣をかまへて、管絃あるへきよし、先日對面のとときかたられ侍しを、その後心にかゝるよし申侍し次てに、同「思ひやる池の汀の松風にたくひやすらういと竹の聲 同○後拾遺往生記云、參議從三位左大辨勸 解由、長官藤原爲隆、名山靈寺、安、四天王、像、令、修、不斷供養、法、所謂鞍馬、法輪、江文、信、貴、高野、粉河、勸修寺等是也、又勸修寺、裏、建、二蓋、華堂并僧房、奉、安、丈六延命菩薩、像、○千手堂、在勸修寺、寺說云古記云、本尊千手、延喜帝規、ハカツテ聖躬之量所、刻彫、五尺三寸等身也、

○鐘樓 ○經藏 ○廻廓 ○西中門

吉記云、元曆二年七月九日午刻、大地震、勸修寺鐘樓經藏廻廓少間許西、中門顛倒、土人云、當寺境内主、御在所、八幡宮、南也、御所屋敷、云田地、在于今、池、毛、古、ハ、南山際迄アリシヲ、秀吉公深草、谷口ヨリ、大津へ新道ヲ開キ給ヒシ時、路筋ハカリテ參ラセ給フト也、南ノ山限ニ池水、未殘テ今猶アリ、

○宮道二所大明神、鎮守坐、南邊、勸修寺縁起云、彌益の大領の四品に叙して宮内大輔に成にける、その正しき跡の今の二所大明神と申是也、宮道の明神とも申とかや、○宮道明神によみてたてまつりし歌の中に、家集「霜枯も春のみとりのあしを山ちかひの霞みせぬころ哉 光經○同」もらすなよわか古寺に契りある宮道の神の廣き恵に 同

○山科神社、按、宮道二所、明神同社歟

神祇式云、山科神社二座、山城國宇治郡、○諸社根元記云、新國史云、延喜十一正六、宣旨、山科、神二前、右依、宮道、氏入内藏少允宮道、良連等去年八月七日、解、初付、官帳四度、幣、併、件、

氏、神、依去寛平十年三月七日奉勅 宣旨、初預^リ享公家春秋、祭禮、又預^リ四度、官幣、○扶桑略記云、延長六年十一月九日庚辰、山科、大神奉授正四位下也、○公事根源云、山科祭、四月十一日、巳、日此社ハ宮道氏の祖神也、

○勸修寺八幡坐寺、南二町許、號吉利俱(キリク)八幡、九月廿一日祭、或云、仁壽二年九月廿一日出現云云、杉、板彌陀梵字アリ、

二水記云、享祿五年二月廿一日、罷^リ向勸修寺、西林院廿二日早旦行水參八幡、一寺、鎮守、古老、云、石清水已前之勸請、云云、○宣胤卿記云、永正十四年十月十九日、中納言參詣勸修寺、八幡、

○慈尊院

季瓊日錄云、文正元丙戌二月三日、毘沙門谷并勸修寺慈尊院梅花上覽、又云、勸修寺、梅花尤美^{ナル}由御談、

○西林院

○普門院

○密乘院

二水記云、享祿五年二月廿一日、罷^リ向勸修寺、西林院歸路、日慈尊院坊^ニ有齋、云云、慈尊院普門院密乘院此三院、故、草創也、

○大宅郷今道分道小野村與大塚村間、有大宅村、

親長卿記云、文明十二年十一月七日、先年山科申請院宣^{宅、名、地、之内、大宅、}

○大宅寺舊跡在大宅村、南土人呼堂、○近年曹洞宗月坡、大宅村東岩屋、

小世繼云、勸修寺むかひの東の山つらにむはの家には建一寺、號大宅寺、たうを立たり、其寺をは大やけてらとなんといふ、

○妙見寺大宅村、東、岩屋明神、山ニ有、妙見堂、按、東方、妙見寺乎、

拾芥抄云、妙見寺在、山城、四方、號靈巖寺、歟、

○松影土人云、西、山村、西、岩屋明神、南、山也、麓有池、曰松影、池、

最須敬重繪詞云、勸修寺ノ奥松影ト云フ所ニ、アヤシノ草菴アリ、

○小野郷和名抄云、宇治郡、○今小野村、在、醍醐村、北、勸修寺、東、

花鳥餘情云、山城國に小野里と云所ニ有、宇治郡に小野有、

○曼茶羅寺小野村隨心院東傍ニ有、藥師堂、是曼茶羅寺、金堂云云、土俗呼曼茶羅藥師、

眞言傳云、僧正仁海曼茶羅寺ヲ小野ニ建立ス、○密宗血脉抄云、仁海號小野、僧正、住小野曼茶羅寺、或記曰、宮道惟平、息、○眞俗雜記云、小野、兩僧正夢想、我母某國成^レ牛有之由示之、彼牛ヲ尋得、一期養育、死、後彼皮ヲ剥畫、兩界、曼茶羅、安置彼寺、依之號曼茶羅寺、○元亨釋書云、釋、仁海事、元昊閣梨、稟密學、博錯綜衆流、醒醐之側小野之地、海啓、密講之席、四來受業之者多、世號小野、密派、○一流のとおもひて讀侍りける、新後撰、夏草のとおき世にまよひても猶未頼むをの、古道 權少僧都道順

○隨心院

諸門跡系譜云、小野曼茶羅寺、隨心院、增俊阿闍梨、中納言國俊卿、男、當門跡始自是云云、○隨心院前大僧正の房にて當座よみ侍しに、古寺花、黄葉果、けふとみる浮世を虚のよ所にして花もいくへのをの、古寺 光廣

○大乘院

密宗血脉抄云、源導阿闍梨小野、大乘院建立、

○後山階在隨心院、東醜醜寺、北九月廿九日、醜醜寺僧徒詣御陵、

拾芥抄云、醜醜天皇在醜醜寺、北曼多羅堂、丑寅、○日本紀略云、延長八年九月廿九日、己丑未一刻、太上皇崩、給、法名寶金剛、見重明記、十月十日庚子、奉葬大行皇帝於山城國宇治郡山科、陵、醜醜寺、北笠取山、西小野寺下、○山槐記云、醜醜、北小野、○帝王編年記云、御年四十六、十月十日庚子、奉葬山科、山陵、號醜醜天皇、○著聞集云、延長七年九月廿九日、延喜聖主崩御、十月十日、醜醜寺、北、山陵に渡し奉けるに、御硯御書三卷、黒漆莒一合、琴青眼箏秋風和琴、御笛など入られけり、○先帝おはしまさて、世中思侘てつかひしける、後撰「はかなくて世に經んより」山科の宮の草木とならましものを、三條右大臣 返し「山科の宮の草木と君ならぬ我の栗にぬるはかりなり 兼輔

○小野陵諸陵寮式云、贈皇太后藤原氏、在山城國宇治郡小野、鄉陵、月五烟、四至東限百姓口、贈皇太后胤子、宇

分并勤修寺、山、南限、小栗栖寺、山井道、西限、權尾山、北限、松尾山、尾井百姓口分、多天皇、女御、醜

○後小野墓諸陵寮式云、贈正一位宮道氏、在山城國宇治郡小野、鄉、土人云、勤修寺村、巽カリヤウ寺、南小野村、西、櫻墓ト云

扶桑略紀云、延喜七年十月廿八日、從三位宮道列子墓、是帝之外祖母、故、内大臣之室家也、

○定方公墓今在勤修寺南、山際八幡、西、

日本紀略云、承平二年八月四日、右大臣兼行左近衛大將藤原定方薨、年六十

○小栗卿和名抄云、宇治郡、○今勤修寺、小栗栖二村之間、有出深草、坂路、土人云、天正十一年明智光秀、逃、勝龍寺、城赴坂本、城、時過、此路、爲、此、里人被害、故、云、明智越、

保元物語云、京師、本、平城太子、高岳、親王、嵯峨天皇ニ位ヲ超ラレテ、御恨ノ餘リニ畧御出家アリテ、醜醜山ノ邊小栗栖ト云所ニ暫ク住セ給ヒキ、○小栗栖といふ所に、ちやうかん法しとして、世捨人の侍りける、畧まかきに朝かほの花うるいしく咲わたるを見て、家集「世の中のはかなきと」朝かほのた、一時の花とあらすや、櫻井基佐

○法琳寺土人云、北小栗栖村、西山半腹、有小堂、安昆沙門天、像、此地法琳寺、舊跡也、

扶桑略記云、法琳寺、字、小栗、○拾芥抄云、太元堂是也、文德、御時、常曉律師入唐之後造之、在小栗栖、○舊記云、孝德天皇御願、昔時堂塔有四字、

三重塔 彌勒堂 藥師堂

齊明天皇、御願、定惠和尚造立、

太元堂

仁明天皇御願、承和七年常曉和尚、經奏聞、建立御願堂、被移、渡、清涼殿、始而蒙阿闍梨之宣下、寺務執行云云、已上法琳寺、別當舊記、○續日本後紀云、承和七年六月丁未、入唐請益僧傳燈大法師位常曉言、山城國宇治郡法琳寺、地勢閑燥足修大法、望請、今般自大唐奉請、太元師、靈像秘法、安置此處、爲修法院、保護國家、申畧許之、○太元師法緣起云、仁明天皇御宇常曉大和國秋篠寺關伽井に現する尊形を寫し、承和六年に入唐を企て、大唐栖靈寺文瑤和尚に、此法の深秘を悉く傳へ、歸朝の後奏聞あり、則唐朝王宮の儀式を寫され、國公安穩五穀成就の御願として、毎年正月八日より一七ケ日行ひる、秋篠寺緣、元亨釋書云、文瑤者不空、三藏弟子、惠應之徒、○法琳寺別當舊記云、太元、法

爲御齋會御修法、元由、承和七年常曉和尚始而於宮中修此法、重有宣下、已載新式、以爲國典云云、自爾已來于今不闕之御願也、此法醍醐寺理性院代々可爲譜代職旨、賜宣旨、今於理性院、每年自正月八日一七箇日被行之、又和州秋篠寺、役汲御香水、太元影現之關伽井取塗壇土、進阿闍梨之坊、如舊式、衛士之所役也、

○施涼寺 勸修寺村、巽、櫃川、東、小野村西、カカリヤウ寺ト云所アリ、按此所歟、

古文書云、報恩院僧正雜掌申右院家領小栗栖之内、號施涼寺分田地之事、既當院爲知行及七十年、無相違之地也、文明十八年九月日

○栢森 在言寺、南、土人云、一言寺北、傍障句亭、地有小池、常曉和尚此池水葬スト、申傳云云、近年此池中ヨリ銅像觀音出現ス、仍一言寺内ニ建小堂安置スト云云、

密宗血脉抄云、栢森、邊名、唐歟、小栗栖、常曉、御唐歟、實運僧都勝俱被住彼邊之故、名、廟僧都、

○笠取山 醍醐山、本名也、笠取村在此山、東南麓

醍醐寺東谷鐘銘云、山容、本叟之笠取而所見云云、○古今「雨ふれハ笠取山の紅葉ハ、行かふ人の袖さへそてる 忠岑」○六帖「雨降に道のまといぬ山科のかさ取山やいつこなるらむ 喜撰

○醍醐 山、山上山下有寺院、從麓至山上、行程三十七町、標石ニ有梵字、權僧正成賢筆跡云云、自山腹瀧カ種、不動堂以上、不許女人登山、

李部王、記云、醍醐寺、東、者石間マ寺、東、西者櫃河、南者桂御房、堀北者高岡川、西南者布豆田、

里、十二坪、東行河、東杜道、西北者大藪、里、廿坪、西繩手行河、醍醐寺舊記同之○以呂波字類抄云、醍醐寺

在山城國宇治郡在、山城國宇治郡、件、寺故、僧正法印大和尚位聖寶所建立也、先師昔振飛錫遍遊名山、翠嵐吹衣

何、巖不蹈、白雲拂、首何、岫不探、伎那遁世長法之蹤、未應、令法久住之地、適以真觀末、攀昇此峰、欣然如歸、故鄉、嘿爾、思、建精舍、椽樹暮居拂石上、苔專安置尊像、地勢相應云云、○醍醐寺緣起云、在山城國宇治郡笠取山右當寺者根本尊師、尋遁世長往之蹤、未得、令法久住、地、爰於普明寺七箇日之間、祈念佛法相應之靈地、答彼祈請、五色雲聳、當山之峰、因茲攀昇此峰、欣然如飯、故鄉、嘿爾、欲建精舍、而谿有、獨老翁嘗泉水、褒醍醐味、爰尊師問、老翁曰、此處建精舍、欲令弘佛法、永可久住哉、老翁答曰、此山者是古佛練行之洞、諸天衛護之砌、前佛之遊處、名神之所居也、如意寶生之嶺、功德聚集之林、法燈續而及龍花之開、僧侶不絕至、雞足之朝、我、是此所之地主也、横尾、明神是也、永獻和尚、便弘佛法、廣利群類、我俱衛護云云、然而不見矣、而稍、鳥唱三寶尊師彌流、感淚、其後上奏此由、延喜上皇殊有、歡感、奉爲除病延命、造營根本、堂舍、與書云承平七年九月十一日○又云、根本尊師聖寶者東京、人、姓王氏、田原天皇諱白壁王第一、皇子、正四位下春日、親王、後五世恒蔭、王也、父兵部大丞葛聲、王、○元亨釋書聖寶傳云、貞觀之末、關醍醐寺、延喜九年賜醍醐爲官寺、○帝王編年記云、延長四年十二月廿八日、供養醍醐寺、山城國宇治郡○日本紀略云、天曆元年四月廿四日戊子、朱雀院幸醍醐寺、○無題詩、於醍醐寺、即事、菅原時登古寺年深傳在、今、醍醐、形勝得追尋、山雲從步往來、路、水月催、觀禪定心、○翰林五鳳集、洛陽、郊外六七里、巽位有山寺、名醍醐、蓋以大乘妙典爲宗之僧乎、一方、佳境千古、名山也、詞略聞說醍醐多勝涯、名蓋舊院在、令邪、如時似、錦雲林、景、秋樹染、楓春樹花、○醍醐の山にのほりて、延喜の御願寺をおかみて讀侍ける、新勅「名をとむるよ、は昔にたえねともすくれし跡をみるもかしこき 中原師季」○上醍醐にて

よめる、續門葉「まきみつむ山の往來の道かへて春は櫻の花やたつねん 法眼顯惠

○藥師堂在准貳堂上方、像、會理僧

緣起云、延喜奉上皇為除病延命造營根本堂舍、被安置藥師如來像、惠利僧

○准貳堂在清瀧社上方、

拾芥抄云、准貳堂三十三所、内三尺聖寶僧正、○緣起云、延喜奉上皇為繼體御願、尊師造營准貳堂、奉安置七俱胝佛母、○密宗血脉抄云、尊師貞觀十六年六月一日、准貳如意輪二像奉彫始、同十八年六月十八日開眼、給上皇、准貳自起入内陣、虛壇ニ立玉フ、如意輪、自立、東三町步、岩上ニ立玉フ、彼岩上ニ御堂ヲ造リ掛ク、今、如意輪堂是也、

○如意輪堂在開山堂西、拾芥抄云等身、

緣起云、貞觀十八年六月十八日、刻彫准貳如意輪終功畢、而准貳者起立步行入于内陣、而如意輪、自登東峰、御座于石上之間、若レ菩提、堂、○或云、總幅三十三所觀音畫像、花山院辰輪、納此堂云云、

○五大堂

緣起云、延喜上皇奉上皇為朝敵降伏造營五大堂、○寛正癸未緣起云、五大堂、不動尊聖寶餘、四尊、會理僧都、作、

○延命院

緣起云、延命院、大納言元方卿、造營、元方鎮西下向之時、惡風吹來之間、祈念彼堂、如意輪之處、彼堂、四天、中毘沙門天現于船上、止風畢、依延壽改本名、勝行院始號延命院、○密宗血脉

抄云、本尊如意輪三軀、西、尊師、作、東、觀賢、作、中間、元杲、作、四天王、尊師、作、

○念覺院

緣起云、延喜、御本、如意輪奉安置之、

○觀音堂于手已上、山上根本、 ○關伽井在西谷清瀧社、傍、

緣起云、惣以當寺號醍醐寺者、老翁嘗ナメテ泉水號醍醐味、故貴為寺號、以此、水亦為關伽井、○上醍醐に籠りて行ひ侍けるに、雪ふかく降ける曉、あかぬの水をとるとて、根本尊師のむかしを思ひ出て、續門葉、雪ふかき谷の清水もわか山のふりにしあを尋てそくむ 權少僧都道順

○清瀧社坐西谷關伽井、傍、

東谷鐘銘云、谷有西東、谷西、鎮守謂之清瀧權現、谷東、鎮守謂之白山權現、○緣起云、延喜二年二月七日、神如神女、降臨三密上乘之壇、語尊師曰、我、是娑竭羅龍王之皇女、准貳如意輪、化身也、昔在大唐之時、名我為青龍、吾住彼寺守佛法、故彼寺名青龍寺、是惠果常住之寺也、弘法大師歸朝之時、同船守護、漸遷日域之剋、垂跡於此、山施惠於當國、始休南山、石巖、有老翁示我云、此處顯露也、從是東有高嶺、實可為所居、云云、然遷彼峰、永所住也、大唐、本名、青龍、隨水號清瀧、密宗血脉抄同之、 ○諸社、根元記云、清瀧社、沙竭羅龍王第、 ○諸神記云、清瀧社醍醐寺、 素盞雄尊、弘法大師歸朝之時、有御同船、降臨醍醐、山上巽方、窟上給、小野、僧正仁海之時、依祈雨、効驗、被叙一位、寛治二年託勝覺、三寶院權僧正、俊房公子、 自本宮奉遷上、醍醐、初立神殿、同三年四月四日奉遷宮、

承德元年四月十七日、同僧正下、醍醐立社奉遷、以上三箇所本宮、自_上醍醐辰、方大盤石、御座云云、○清瀧社事見于應永十三御記密宗血脉抄云、元永元年三月十六日、清瀧會被始行、是櫻會、根元也、○醍醐の清瀧の社に、歌合し侍ける時よめる、千載「ふる雪に軒端の竹も埋れて友こそなけれ冬の山さと 讀人不知」拾玉 醍醐「雨そ、くゑるしそ空にあらはる、笠取山の清瀧の宮 慈鎮」○醍醐にまかりたりけるに、清瀧に花のちりかゝりたりけるか、峰には雪のやうにつもりて、水にはつもらさりけるをみてよめる、金葉異本「ちる花の流るゝ水につもらぬもそれさへ雪の心ちこそすれ 瞻西上人」

○中院 縁起云、安置五大尊

舊記云、願主安房守源、親元、中院、地藏堂、本佛、延喜、御本尊、等身六体云云、○密宗血脉抄云、觀賢僧正上醍醐中院建立、

○持明院同上

寺家説云、長和二年建立、峰、上人廣壽、開基、賴義義家遁世之舊跡也、

○圓光院 舊記云、西御堂

寺家説云、永保年中中宮賢子御建立、○百練抄云、應徳元年九月廿二日、賢子崩于三條、皇居、廿八同二年八月廿九日、奉為前、中宮職、賢子供養醍醐圓光院、件、堂佛閣内奉納、前、中宮、御骨、扶桑畧記、續世、○又云、承德元年八月、奉為郁芳門院、供養圓光院、○朝野群載、爰此、寺院者奉為前、中宮職、御願證菩提、宮臣同心、昔年之間、卜醍醐之山上營、土木於寺中、永定六口

之禪徒、鎮修兩界之秘法、紹隆之勤欲、傳萬代云云、就中、茲、寺者累聖之御願、真言之名區也、

醍醐寺圓光院、應徳二年九月十三日、檢校阿闍梨權少僧都法眼某、申請、阿闍梨職此院之狀

○金剛輪寺 聖寶、本坊也、今有、德僧輪番居之、 ○御影堂 尊師、在如意輪堂、東中、聖寶、左右弘法觀賢、

醍醐の花見けるに、聖寶臺の前にやすらひして、黄葉集「めにあかぬ花の所となかめまし心ちらすな春の山風 光廣」

○直谷 在醍醐山西谷麓、從上醍醐行炭山道也、

寺家説云、號直谷、清瀧權現始遷坐此谷、自此地依飛移、本宮給也、

○南禪寺 在直谷、土人呼直カ堂、本尊彌陀坐像、春日、作、成賢僧正隱迹、地也、

寺家説云、宜陽門院御願、成賢僧正草創、○密宗血脉抄云、成賢櫻町中納言息上醍醐、南、山麓、號南禪寺、御堂ヲ作り、朝夕念佛シ住給ヘリ、彼僧正ノ手迹、壁板ニ殘テ于今有リトカヤ、○上醍醐すくか谷の別所に、孝賢律師權僧正成賢の影をつくりおきたてまつりけるを見て、僧正すまれける比よみて、張の戸ひらにおされける歌、續門葉「すむ人の心のそこいすくか谷おちくる水もなかれ清瀧 前僧正成賢」

○宜陽門院墓 或云、在直谷、○後白河院皇女、建長四年六月十八日薨、

○圓明院 在直谷、俊乘房重源、住院也、重源於醍醐山、而創四所、阿彌陀堂云云、今東谷阿彌陀堂其一也、其餘頽破、 盛衰記云、東大寺大勸進事源空堅ク辞シ申サル、重タル院宣ニハ、門徒ノ僧中ニ器量ノ仁アリヤ、舉シ申ヘシト仰下ス、法然房暫ク案ノ、上ノ醍醐ニオハシケル、俊乘房重源ヲ招寄セテ、院宣ノ趣

キ申合メ給、

○圓明房 圓明院所乎、

感身學正記云、建保五年十七歲十二月中旬、以圓明房爲和尚、剃髮染衣成沙門、形修學眞言、又云、承久三年自二月廿三日、於圓明房遂金剛界初行畢、

○釋迦院 在西谷、號水本、今云報恩院

密宗血脉抄云、憲淳、徒隆勝聖教等ノ眼肝ヲ拔取テ、上ノ醍醐釋迦院ニ被移、彼聖教等其後ハ、水本ノ御經藏ニ移シテ于今住持セリ、

○惠心院

法印俊譽身まかりければ、やかてその日出家して、上醍醐惠心院に住侍りけるか、よみ侍ける、續門葉さひしさにたへぬ心の身にそは、いく山里かすみうからまし 俊紹法印

○盛琳院

上醍醐盛琳院に住侍りけるか、法印覺雅此所を興隆し侍りける、昔も思ひいてられければ、同なれしよの人たにあらひいにしへを語りても又なくさみなしま 法印隆勝

○法幢院 在西谷、寺家説云、當院第二世、興正菩薩也、所持拂子并袈裟與等存于今

五鳳集 冬日遊醍醐宿寶幢院而 寺藏岩底世塵稀、翠竹青松半掩扉、昨夜雨聲還不雨、草鞋只踏落紅飯、

○安養院 舊跡在戒光院境内、號松本山、寺僧云、安養院一名云松本坊、故名云云

感身學正記云、建保二年十四歲、移住醍醐山安養院築實禪密房、室蒙彼眷顧、元仁元年、自九月廿三日於安養院、遂胎藏界初行、

○寂靜院谷 在關山堂東

醍醐山寂靜谷といふ所の花見侍りしとき、竹林抄「ちる花のをときくほとどの深山かな 心敬

○横尾明神 坐醍醐山、巽笠取村、本地毘沙門

醍醐寺縁起云、横尾神無始ヨリ、以來此山ノ地主ハ毘沙門也、聖寶初登山時出現、老翁横尾明神是也 聖寶向地主、神

云、日比山ニ住シ玉ハ、富貴衆ノ意ニ叶ヒ、佛法定メテ退轉スヘシ、永ク未來世ヲ盡サン様ヲ、計ヒ玉ヘト被申ケレハ、サラハ可然居ヲシメテ、當山ヲ護セント思召ケルニヤ、一夜ニ山上ノ辰巳ノ方ニ當リ、山生へ出ツ、則彼山ニ住シ、永ク佛法ヲ守リ玉フト也、土人云、在醍醐山、東南、此山方一町許山廻リ水流、勝景地ナリ

○山下寺院 下醍醐、小野村ノ南也、土人云、醍醐寺ノ總門、元ト南郷ノ西小栗栖、行道ニアリ、今所名ヲ總門ト云、昔下醍醐寺ニ四十九院アリ

○釋迦堂 舊記云、五延喜御願

釋迦像一 文殊師利像一 彌勒像一 以下金色

四天王像各一 賓頭盧像一 以上彩色

著聞集云、增圓法眼醍醐寺の櫻會見物の時、舞の最中に見物はせずして、釋迦堂の前の櫻の本にて鞠をける、

○禮堂 舊記云、七廻廊間

扶桑略記云、延長四年十二月廿八日、行醍醐寺新堂釋迦佛、像並四天王、像開眼、事御記

○鐘樓舊記云、銀鐘也、銘者天皇御製宸筆云云、

拾要集云、延喜聖主專皈真宗御、醍醐、本願以聖寶僧正爲御師範、御貴敬之餘、第二御子、自朱雀院以十六人、王子准十六大菩薩、奉踏鑄屋、吹鐵、調治銀鐘、有御施入、于今醍醐寺、重寶也、其鐘、銘、天子、御製作、同御宸筆也、其銘云、曉驚雪印之老眠、夕促日沒之梵唱、保胤匡衡等、奉嘆希代、御秀句云云、

○一切經藏

○八足中門多聞持國

○八足南大門金剛力士

○四足東大門

○講堂

○御影堂

○清涼堂普賢三尺、○緣起、清涼堂作三昧堂、

朱雀院御願

日本紀略云、天曆三年三月今日、醍醐寺建法華三昧堂、運清涼殿、材木作之、元亨釋書同之、

○灌頂院大日藥師釋迦各三尺、兩界曼荼羅、

○八幡宮

○五重塔婆已上見于舊記、

本朝文粹、後江相公向醍醐之寺、重拂寶塔之下、先朝御願留在此、場、悅五層之漸成、整八音而期會、

○金堂延喜御願、○寺家說云、下醍醐寺亂後伽藍悉破壞、纒五重塔、清瀧社、二王門、許殘、今金堂并本尊堂前石灯笼等、根來寺所有也、後寺破滅後、豐臣秀吉公壞渡、被寄當寺爲金堂、

藥師坐像脇士日光月光各一体四天王像各一体

○五重塔在金堂東南村上天皇御願

○八足西大門

著聞集云、延喜の聖衆醍醐寺を御建立の時、道風朝臣に額書進へきよし仰られて、額二枚を

給ひせけり、一枚南大門、一枚西門の料なり、眞草兩様に書て奉るへきよし勅定あり、

○清瀧宮讀守在金堂南、三寶院權僧正勝覺建立、承徳元年四月十七日遷宮、

○長尾天神宮在金堂北、寺家說云、天慶三年二月廿五日勸請、

寺家說云、長尾、地名也、傳云、菅丞相遊覽時、聖寶尊師語云、吾薨去、後墓可築此地云云、於宰府薨、後觀賢僧正先師、幽契不忘、墓被築此、地云云、天慶中北野垂跡、後改營社壇云云、○承元三年長尾社歌合社頭櫻花、夫木、手向して春や行らしちはやふる長尾の宮の花のゆふして、定家○建曆元年長尾社の歌合に、社頭花といへるとを、續門葉「百敷の花の匂ひもかゝりきと惜みなれてや神もみるらん 權少僧都喜嚴

○三寶院醍醐寺座主在西門前、○織田信長公爲將軍義昭二條御所造營時、細川亭二有シ被引進藤戸石疊水石其外所々名石ヲ聚ト云云、秀吉公時彼石ヲ被寄當院云云、

密宗血脉抄云、灌頂堂并經藏勝覺被造之、中門額面眞裏草、堀川左府俊房筆、○三寶院列祖次第云、元祖權僧正勝覺、左大臣俊房公息、○密宗血脉抄云、三寶院、院號、此僧正勝覺ノ時ヨリ始レリ、其故ハ義範、義俊、定賢三師、隨分大事ヲ、此僧正ノ時一處ニ相承シ玉フ故ニ云也、○元亨釋書云、聖寶傳好、修練、經、歷名山靈地、金峰之嶮徑、役君之後、榛塞無行路、寶援葛藟而踏開、自是苦行之者相繼不絕、○今有修驗道二派、本山司、聖護院、當山、司三寶院、○三寶院僧正坊泉殿つくりて、歌讀侍し祝の心を、草庵集「せき入て千世を心にまかせつる宿とはあるし松の下水 頓阿

○理性院在三寶院北、眞言宗之本寺一流之法統也、元院内有太元堂、每歲自正月八日、祖法眼賢覺、太元阿闍梨法琳寺、別院云云、迄十四日七箇日被行御修法、親長卿、記、文明七年正月八日雪下、御持僧參賀云云、自今日太元法護摩始行、舊冬理性院僧正公嚴來々、次、式日始行之由仰之、○理性院の花さかりなりける比、讀てをくり侍りける、

續門葉「いかはかり花のあるしの詠むらんよ所にもあかぬ宿の梢を 座主僧正親玄

○金剛王院 在三寶院南、兼帶西賀茂神光院

金剛王院院務次第云、始祖聖賢、○密宗血脉抄云、勝覺三寶院權僧正乳母子賢覺聖賢ト云有二人、法匠賢覺、理性院始也、聖賢、金剛王院始也、仍三寶院加理性金剛王、二流云醍醐三流、○延德三年八月廿四日僧正隆海大慈院僧都空濟附屬之狀云、神光院并嵯峨之中院、事代々相承無相違者也、次於金剛王院門跡者、就法流之由緒、當代經歷之事、先師代々本望、當斯時令満足者也、

○報恩院 號極樂坊、在下醍醐深沙橋邊、今日釋迦院

門跡次第云、憲深報恩院檢校僧正自法身如來廿四代祖、○密宗血脉抄云、報恩院者下醍醐炎魔堂、向也、本號極樂坊、被安彌陀、三尊故歟、○先師僧正成賢にをくれて後、かの跡報恩院に籠りて、年月をかさねておこなはれける比、人のもとよりをとつれ侍りける、返事にそへ侍りける、續門葉「柴の戸に人めをいとふ身なれともとふはさすがに嬉しかりけり 前權僧正憲深

○無量光院 舊記云、堀川院、母代都芳門院、圓光院中宮、御願、白川院御建立、慈氏丸童に、三井寺なりける僧清瀧の社のうしろ、無量光院の池の邊にて物申たりける後、ほとなくさまかへぬと聞て、彼僧申おくり侍る、 續門葉「今は又見てややみなん清瀧のかみのうしろにありし姿を 讀人不知

○蓮藏院 舊記云、愛染王(半丈六)額法性寺關白、○土人云、舊跡在赤間、東南山麓、其邊有川、土俗曰蓮藏川 續門葉「櫻花たか偽のむかしよりませさかを越けるに、蓮藏院の花盛なりければ讀侍ける、

雲にわた名の立はしめけん 義淳法師

○無量壽院 號松橋、在金剛王院東、元在山上寂靜院谷云云

無量壽院々務次第云、元海松橋本願大僧都、自法身如來廿代祖、○密宗血脉抄云、松橋元海僧都阿彌陀堂ヲ造リ、後戸ノ兩方ヲ經藏ニ構フ、阿彌陀堂ト院家ノ間ニ履形ノ池有之、松ノ木ノ橋渡之、仍號松橋也、○無量壽院の坊に久しく住て、讀侍りける歌とものの中に、 續門葉「住なれし山の霞ようたてなど我身の春を立へたつらん 法印公紹

○遍智院 舊記云、義範僧都創

中尊大日 不動 愛染三尺彌陀三尊

遍智院の十樂の詩歌の中に、坊中寂靜樂といへる心を、 續門葉「苔の洞松の戸はそいあまたあれと久しく成ぬ風もならさて 前權僧正憲深

○阿彌陀院 今在六坊内、東側南端

あみた院つくりたて、住れけるか、弟子とものの中へなからん跡までも、おなし心にとふへきよしなど、序の言葉をそへて讀てつかいされける、 同「契りをく言の葉なくと露の身の消なん後も跡を尋ねよ 前僧正成賢

○觀心院

觀心院の孫清丸身まかりて、又うちつゝき同院の福壽なくなり侍しに、その春三月盡の月讀て、かの坊へつかはしける、 同「いろくの花の姿の別れまでかさねておしき春のくれかな

權律師賴驗

○寶池院 在金剛王院南寺家説云、文永年中、大僧正定濟建立、文明中燒失、寛文年中前大僧正高賢再興、大僧正定濟寶池院つくりたて、門徒あつめて歌讀ける中に、同「二葉なる緑の松の行末も君か千とせもおなし久しさ 法印玄慶

○西南院 密宗血脉抄云、西院南實勝、

花のころ、西南院にすみてよみ侍りける、同「まつにすぎ惜むに暮て春はた、花の爲なる日數なりけり 權少僧都道順

○清淨光院 密宗血脉抄云、在醍醐、土人云、舊跡赤間、西南在、

吉部秘訓云、藏人頭中宮亮宗頼朝臣向勝賢坊、伊紀二位堂故、紀伊、二位堂光院、供養、炎上之後、爲上皇、御沙汰造營也、○院の二位の局身まかりける跡に、とをの歌讀けるに、山家集、舟岡のすを野の塚の數をへて昔の人に君をなしつる 西行○跡のことも果て、ちりくりに成にけるに、まけのり(成範)なかのり(脩範)など、涙をなかりしてけふにさへ又と申けるほどに、南西の櫻に鶯の鳴けるを聞てよみける、山家「櫻花ちりくになるこの本に名残をおしむうひすの聲 西行

○一言寺 在菩提寺坤、舊記云、南郷(ミナミサト)保一言觀音堂、願主阿波内侍、號眞阿禪尼、或記云、禪那院後稱一言寺、

寺家説云、僧都珍海、住禪那院、能畫、舊記其師三寶院定海、欲令珍海畫曼荼羅圖、珍辭之、一夜山神入珍夢、責其不肯畫、而自橋上蹴倒、珍醒而則寫曼荼羅圖、

○大智院 舊記云、堀川左大臣俊房、建立、本佛聖觀音等身、

○妙法院 舊記云、願主正四位下藤原惟信朝臣、關白殿下忠通公、

○土人云、舊跡今爲山林、二王門南一町許、五智院、傍也、

○寶塔院 野守常行建、願主上

○東院 舊記云、朱雀院、御願、

○勝俱胫院 舊記云、實運僧都建立、

○中院 舊記云、阿彌陀院半丈六像、願主安房守親元、又

○成身院 六坊内、

○金剛輪院

○普賢院 號西坊、在理院北、

○地藏院 舊跡在理院、東蓮藏院、西、

密宗血脉抄云、親玄與覺雄、附法、狀云、讓與地藏、并北、經藏、清淨光院、并寶蓮院、於地藏院南、經藏者、應長元年令讓與房玄大僧都畢、○管見記云、永正九年二月五日、三寶院大僧正入來、地藏院坊人眞如院法印、民部卿法眼等來、○西園寺右大臣公藤公管見記、永正三年正月十一日、地藏院坊官民部卿法眼備中來、愚息(六才門主也)

○中性院 密宗血脉抄云、中性院聖増、

○岳西院

○光明院

○西往院

○大慈院

○密嚴院

○安樂院

○寶篋院

○悉地院

○西方院

○豐財園院

○安養院

○無量院

○中堂院

○正覺院

○稱名院

○西院

○眞如院

○寶蓮院 舊跡在南門前、爲山林、理院領、

○勝正院

○聖塔院

○正寶院

○法成就院

○蓮華院 願主、四條殿女、

三寶院已下下、醍醐四十九院

○深沙寺 舊記云、願主江家、氏寺也、○按、醍醐山、麓有河呼、深沙川、坂口有橋、稱深沙堂、傍有深沙大王、小堂、此邊歟、

○大王堂 舊記云、深沙大王堂云云、○在湖山堂、東二町許、深沙川、端、安置大王畫像、土人云、古此堂、寶頭盧尊者、木像アリ、洪水之時、此堂流没、像適漂流而止、久世、郡横、島、土人取、得之、置草堂、至于今、在彼地、

○琰魔堂 元在深沙橋、邊開加井、傍、曰、炎魔堂、屋敷、今遷、越智、西、

宗家の十住心論の心を讀て、當寺琰魔堂におしける中に異生羶羊心を、續門葉「むつの道ま

よふ心のひとつにてうくる姿をわまたにはなる 読人不知

○東安寺 舊記云、本者號小野寺、願主新羅松名、(宇治郡司云云)

中尊大日 藥師 釋迦

○西大智院 舊記云、願主美濃、內侍彌陀像等身、

密宗血脉抄云、大谷持法院云云、

○法蓮院 舊記云、丈六彌陀、額左大臣有仁、公

○定水寺 舊記云、伊豫親王御願、本佛千手觀音等身、

○清水寺 舊記云、淳和院御願、本佛彌陀像等身如意輪不動、

密宗血脉抄云、慶盛號清住寺

○亭子院 舊記云、寬平法皇御願、彌陀等身、

○菩提寺 在寶池院、東律宗泉涌寺、末、舊記云、虛空藏一標手牛、願主准后云云、故號菩提寺、僧正房、

宗長日記云、醍醐に北村兵庫助招請誘引せられ、中畧菩提院一見、古准持佛やうに忍ひ給ひける也、九山八海といふ石、淺茅の中に在、聞しよりはみるのともいふへし、宗長師匠の宰相とて、此院家に宮つかへせし人也、常に物語せられしにかはらす、寺僧云、九山八海石今在三寶院被引用、在池、西縁前海石是也、又當寺ニ有絲櫻、文祿三年三月、豊臣秀吉公當山遊覽之時、於樹陰有詠

れん花の面影 秀吉公

○櫻町十齋堂 舊記云、願主大炊殿、權中納言源家賢女、

○越智堂 舊記云、本願正三位藤原、基隆、彌陀九体丈六、像、釋迦堂、地藏堂三重塔、鐘樓、廊、蹟也、又有珠魔堂、比、珠魔像今在此、地、

○大谷塔 舊記云、多寶院、西、有呼大谷所、塔、亡、

○地藏堂 舊記云、三尺立、像、善興寺、

○實相房 舊記云、願主大藏卿正、四位上源師行朝臣、

○大藏卿堂 舊記云、願主大藏卿正、四位上源師行朝臣、

○實相房 舊記云、願主大藏卿正、四位上源師行朝臣、

源持房大館行狀云、持房并嫡孫政重、携妻子老弱安下、醍醐教寺、以實相房爲行臺、

○五智院 自二王門、在、一町許南、

密宗血脉抄云、親惠 師傳云、號五智院、延文五年五月十四日入滅、

○小坂 在郷南、言寺門前、

感身學正記云、金剛佛子觀尊建仁元年五月、於大和國添上、郡箕田、里託生、父、興福寺、學侶慶玄、承元二年八歳、父家貧、三人、小兒、難養育、故予、送遣醍醐寺、西大道小坂御子之家、崇養過常

篇、

○羯磨山 在金堂東八町許、土人云、羯磨明神祭、西宮、夷社也、今舊社、地有古松一株、社、移、長尾天神、傍、九月九日、祭、二座、一座、長尾、天神、一座、清瀧、與、羯磨兩神也、祭、隔年、

密宗血脉抄云、憲深實深、付法、聖教ヲ、密ニ其夜以下人、羯磨山ト云山越、閑道ヨリ被、越之

畢、

○樹下谷 菩提寺僧說云、在當寺、東六七町許、

黑谷上人傳云、醍醐、乘願房宗源號竹谷、醍醐、菩提寺、奥樹下、谷ト云所ニ隱居ス、多年、後清水寺、竹谷ト云所へ移リ住レケル、砂石集、醍醐、竹谷云云、謬說乎、

○朱雀院陵 在醍醐寺、北陵町人家、東、延喜帝陵、南三町許也、

歷代編年集成云、朱雀院天曆六年八月十五日崩、御年三十、大鏡云、三十七同廿日癸卯、葬來定寺、或記云、

葬法性寺、東中尾山、南、原、陵、置御骨於醍醐、山陵、傍、扶桑畧記云、依遺詔、不、建山陵、不入國忌、

○桂御房 醍醐寺、四至云、南、桂御房堀、北云云、

新加通記第十八 山城名勝志卷十七

の御時、實綱に給たるなり、○長興宿禰記云、文明十年十月廿一日、是日室町殿渡御日野、法界寺、○轉法輪抄關白家北政所云、當寺本尊者即是十二上願醫王薄伽也、側聞昔傳教大師、手自刻此尊像、弘仁、丞相精誠草創當伽藍、

○阿彌陀堂

兵範記云、保元二年四月廿二日、殿下密々令向日野給、丈六堂、阿彌陀佛、依定朝造可下令拜見給之故也、

○惠福寺在日野村、今淨土宗一心院派、

宣胤卿記云、永正十四年八月九日、惠福寺額書、在所日野、

○平重衡卿墓法界寺、北五町許在茶園内、

平家物語云、重衡卿北方鳥羽中納言、これされの女、五條大納言邦綱の養子云云、舊里にかへ重衡卿、木津川の端にて首を討、北のかたこのよしを聞給ひて、首をは大佛の聖俊乗坊にかくと宣へは、大衆に乞うけて、やかて日野へを送られける云云、さてしもあるへき事ならねは、其邊近き法界寺といふ山寺に入たてまつり、墓をば日野にせられける、

○外山方丈石鴨長明、菴室、舊跡也、在日野村、東山中、當村氏神、社堂尾明神、傍ヨリ東へ山中、入事六七町許、

方丈記云、その家の有さまよのつねならず、廣さは纔に方丈、高さは七尺かうち也、土居をくみうちおほひをふきて、つきめとに懸金をかけたりし、積所わつかに二兩なり、車の力をむくふ外はさらに用途いらす、今日野山の奥に跡を隠して、南に假の日かくしをさし出して、

竹のすのこをしき、其西にあか棚をつくり、中には西の垣に添て、あみたの畫像を安置し奉りて、南に懸樋あり、石をたゝみて水をためたり、林のきに近ければ、妻木を拾ふにともしからす、名を外山といふ、于時建曆二年彌生晦日比、桑門蓮胤、外山の庵にて記之云々、○心敬僧都私語云、鴨長明か石床には、二度御幸後鳥ありしとなり、或云、外山有石床、俗名方丈石、或云千人、或云、方丈石にて、雪玉、かるき身は車ひとつのぬしなれとちひき石に名は残りつゝ、逍遙院○日野といふ所にまかりける次に、長明といひし人、浮世をはなれて住居せしよし申傳へ侍るに、大きな石の上に松のねふりて、水の流いさきよき、心の底さこそとおしはかられ侍る、むかしのとなど思ひ出て、衆妙集、岩かねになかるゝ水も琴の音の昔おほゆるあらへにはして、玄旨法印、

○石田森石田村、在下、醍醐、西南森、在村、西櫃川、東、

日吉社行幸記云、松坂檜岡ヒノカをこえ、五位墓四宮河原になりぬれば、鴨長明か述懐せし外山はるかに見え渡り、籬は山と詠めて、遍昭僧正のすみけん花山もとをからて、けさはかすめる音羽山、山科如意嶽安祥寺松の戸ふりてまかくし、岩田森鴫坂駄餉の御儲もうるはしくて云々、萬九山科の石田の杜にふみ越はけたし吾妹にたゝにあはんかも、式部卿宇合

小野

萬九山ウツしなのいはたの小野の柞原みつゝや君か山ちこゆらん、宇合○夫木、冬のくる石田の小野の木からしには、そまくるゝ山しなの里、津守國基

岡按、石田村、東有岡山、土人

夫木「山城の石田の岡の岩つゝしはまはまはしき花のいろかな 匡房○新續歌撰「かり金も今やこゆらん山しろの岩田の岡に月かたふきぬ 九條内大臣基家

○田中明神坐石田、森、石田村、兵神也、(社家説云)神二座、天照皇太神、一座、猿田彦、神云云、

萬十三「千早振うちわたり、瀧の屋のあこにの原を、千とせにもかくるとなく、萬代にありかよはんと、山科の石田の杜の、すめ(皇神)神にぬさともむけて、我はこえゆく相坂山を、云々、

○田中杜田中明神、森敷、

方輿集「山きはの田中の杜にあめはへてけふ里人の神まつはらん 爲家○草根「みしめ繩ひくは早苗のためならて田中の杜の神もうくらん 正徹

○石田殿

古事談云、石田殿、泰憲民部卿近江、任之時、撰勝地所ニ構造之別庄也、而宇治殿、仰云、子息、少僧在園城、可然者坊舎一、可求出云云、依之以石田之別業奉覺圓僧正之後、爲園城寺平等院領云云、續世繼○大僧正覺圓宇治殿、三男、號平等院僧正師主明尊、○續世繼云、泰憲か館につかうまつる石田と申家こそ、寺もちかくて、おはしまさんにも、つれくなくさみぬへき所々さふらへ、堂なども侍て、ひんよき所なり、○又云、白河院、一におもしろき所は、いつこかあると、はせ給ければ、一にはいしだこそ侍れ、次にはと仰られければ、高陽院を候らんと申に、第三に鳥羽ありな

んやとおほせられければ、とは殿は君のかくまなさせ給たればこそ侍れ、地形眺望いとなき所也、第三には俊綱かふしみや候らんとそ申されける云々、

○實境菴在石田村、

海印和尚善権行狀云、和尚城州石田有塔、曰實境、

○櫃河橋、櫃河自北山科流出、而經勸修寺、東醍醐、西木幡、西ニ而流、合宇治川、末ニ也、櫃河、今在六地藏町、中橋乎、○土人云、昔自伏見通、大津、渡六地藏町、橋行也、

醍醐寺舊記云、醍醐、西限櫃川云云、○承久記云、宇治軍破レケレハ、皆々落行ク處ヲ、櫃川ノ橋、木幡山、伏見、岡ノ屋、日野、勸修寺ニ至ル迄、所々ニテ組落々々、是ヲ討ツ、○春日社に百

首歌よみてたてまつりけるに、橋歌、五社百首 新勸撰「都出て伏見をこゆる明かたはまつらちわたす櫃川の橋 俊成 五社百首注云、ひつ河は伏見と木幡との間也、○新六帖「ひつ河の

岸に匂へるかはさくらちるこそ花のとちめなけれ 衣笠内府○夫木懷中「日くれなは岡の屋にこそ伏見なれ明て渡らん櫃川のはし 讀人不知

○木幡六地藏在六地藏町、櫃川、西、本天台宗、近世爲淨土宗、

百練抄云、承安三年三月十日、西光法師供養木幡堂、月卿雲客向訪、有舞樂、世稱過差、○西光俗

左衛門、○盛衰記云、西光法師當初難有願ヲ發セリ、七道ノ辻コトニ六體ノ地藏菩薩ヲ造奉リ、

卒都婆ノ上ニ道場ヲ構ヘテ、大悲ノ尊像ヲ居奉リ、廻地藏ト名テ、七箇所ニ安置云云、四宮河

原、木幡、里、造道、西、七條、蓮臺野、ミソコ池、西坂本、是也、○四宮河原大津路在、○木幡里宇治路在、

○造道攝津路在、○西七條丹波路在、○蓮臺野長坂路今絶拜、○美曾呂池鞍馬、○西坂本龍華越、今此一所絶、

日向神社 ヒムカヒ 土人云、佛國寺、南有木幡峠、右方伏見、城山、左方關東山云、其續有松林云、日向山、此所乎、

神名帳云、日向神社 (ヒムカヒノカンヤシロ) 宇治郡

岡屋、郷和名抄云、宇治郡、岡屋、或云、古近衛關白兼經公居之、故號岡屋、關白此地累世近衛殿御領云云、

類聚國史云、延曆十二年十二月癸亥、遊獵岡屋野、左大辨從三位紀朝臣古佐美、右兵衛督從四位下紀朝臣木津、魚奉獻、

善隣國寶記云、日本古記云、建治元年正月十八日、蒙古人二人、高麗人一人、明州人一人、自鎮西送之、皆不入洛中、自山崎經岡屋醍醐赴關東、昔自山崎、今岡屋、非海道、

方丈記云、岡の屋に行かふ舟を見て、滿沙彌か風情を盗む、○山家、伏見過ぬ岡の屋に猶と、まらて日野まで行て駒心みん、西行、夫木懷中、日くれなは岡の屋にこそふしみなれあけてわたらん櫃川の橋、讀人不知

二子陵 按、岡屋村、東西方寺、(彌陀次郎ト呼) 西有陵、圓丘二、相並是二子陵歟、

台記云、久安六年九月廿六日、雞鳴、後參西殿、禪閣、居所、頃之乘、輿出御、余乘車從之、兼長、棹船渡河、於東岸、禪閣移車、余連車、此間降雨、比至二子陵邊、天曙、過此陵、未至櫃川、見禪閣、御車、右邊有一鹿、再見之、忽然不見、奇問僕從、各答不見、疑春日明神守禪閣歟、辰時入洛、○千種云、俊秘抄、連歌部 二子つか、おに柳、伏見、宇治殿、俊賴體、おほつかなたれとかたらんふたこのか、きんすけ、は、その杜やあらは祈るらん、さかみ

廣芝 宇治路木幡村、與大和田村、間有廣芝村、五ヶ庄、一也、

宣胤卿記云、永正八年二月廿七日、戊申、今日春日祭也、申、斜到南都云云、廿八日歸京、遅々、間

典侍已前行云云、於宇治、廣芝追付、木幡山上落、時、每度歩行之間、下輿之、

木幡 ○土人云、今佛國寺前南、下ル坂口ヲ木幡峠ト云、但是新道歟、昔ハ伏見山内ニ道有シトカヤ、今、伏見城山ハ木幡山也、

小世繼云、はくかの三位といひける人は、えもいはぬひわの上手也、木幡とかやに、目つふれたる法師の世にあやしけなるにひわは習給ひけり、

里 宇治、北、伏見、東、

拾遺、山しるのこはたの里に馬はあれとかちよりそくる君を思へは、人丸

平治物語云、右衛門尉成景馬ニ打乗テ馳行程ニ、小幡峠ニテ入道ノ舍人武澤ト云者ニ行逢、

新六帖、木幡山あるいさなから口なしの宿かるとてもこたへやいせん、知家○新後拾遺、遠からぬふしみの里の關守のこいたの峰に君をすへける、家隆○御堂關白御記云、寛弘三年七月十二日、興福寺、大衆愁狀、前、解文ニ相違、仍返送云云、寺、侍法師等只今來申云、大衆參上木幡山大谷ト云所、二千許參着云云、

關 或云、在、矢島峠、與、城山、間、

川 今木幡村、南五ヶ庄、内、有、川、此、川、歟、

家集、よそにみてふしみもあらぬ木いた川こいたかゆへにぬる、杖を、寂蓮

森 藻鹽草云、山しなの、木はたの森と讀り、 野 三代實錄云、紀伊、郡、木幡野云云、

○木幡神社

神名帳云、許波多神社三座、○神書疏云、山城國風土記云、宇治郡木幡社、名天、忍穗根命、○三代實錄云、貞觀元年正月廿七日、奉授從五位下許波多、神從五位上、○釋日本紀云、於天、忍穗耳、陵歟、本緣自昔若無存知之人歟、如風土記者宗唐之神、尊崇可異他、弘長三諸祭、興行之時、當社祈年月次祭幣帛神主講取之由、載本官史生散狀、當時見在、カ歟、

○五箇庄

長亨年後兵亂記云、永祿三年十月八日、香西越後守於宇治五箇庄出張、九日木幡燒、●五箇庄、廣芝南、岡屋在廣芝、上村在岡、岡本在岡、屋大和田在廣芝、

○柳山

信長記云、元龜三年七月朔日、室町殿眞木マキ島へッ楯籠給フ、又云、十六日信長槇島へ向ヒ、五ヶ庄柳山ニ旗ヲ立ラル、

○柳大明神坐五ヶ庄額云、正二位柳大明神、九月廿六日祭之、

「わはれみをとる、柳のかみなれのぬるをうしとおもひさらめや、近衛應山公○土人云、此」
此村に牛のわつらふ事有て、日毎におほくうせければ、郷民神ノ祈念しければ、志るしなかりし程に、近衛殿へま
いりて此事をなげき申ければ、仰に云、所の神を何ささいふご御尋あり、柳明神ましますと答へ侍れば、此歌を讀てまいら
せられしと、神殿に捧申てより、たちまち
わさはひやみて侍るこなん申傳へたる、

○巨幡コハタ、諸陵寮式云、贈一品伊豫親王、在山城國宇治郡、城東一町、西一町、南二町五段北三町、守丁一人、

○木幡別庄六條攝政基實公、第

百練抄云、寛喜二年十二月廿八日、中山入道關白於木幡別庄入滅春秋八十六

○木幡殿

康安二年春のころ、木幡に住侍て歌合しけるに、花、新續古かへるへき家路思ひて山さく

らことしの宿の軒端にそみる、二品法親王覺譽○花のころ木幡殿へまいりて侍し後、聖護院宮より仰られ侍し、續草庵「我ためと思ふいかりに山里の花より後も人のとへかし」

○淨妙寺土人云、木幡村、東北、山麓有大門、跡塔、壇等、村、内有葬所、名淨妙寺、是皆舊跡也、又村、内行願寺、彌陀、像、古淨妙寺、古佛、申傳云、

榮花物語云、このたといふ所の太政大臣もとつね（基經）のおと、てんしをかせ給へりし處也、藤氏の御はかとおほしをきてたりける所に、殿（道長）おまへ若くおひしましける時、故殿の御ともにおはしまして、おほしけるやう、わかせんをよりはしめ、またしきうときわかすちの御身を、おさめられ給へる、此山に只あるし斗の、石とて一本はかりたてたれば、また参りよる人もなし、是いとほいなき事なりと覺して、此山のいたゝきをたいらげさせ給て、高き所をいけつり、みしかき所をい土をいき（うめさせ給）などさせ給なとして、やかて三味堂をたてさせ給、なかにめんたうをわけさせ給て、さうに僧坊をたてさせ給ひて、（別當所司を定め）供をあてさせ給、やかてそのあたりのむらひとつ、さとゝなさせ給て、このたよりを給はせて、はくゝふかへり見させ給ふ、御堂供養寛弘二年十月十九日、御願文式部大輔匡衡朝臣、此寺の名を淨妙寺とつけられたる、○御堂關白御記云、寛弘二年十月十七日壬辰、遣額二面左大辨許淨妙寺、○又云、十九日淨妙寺供養云云、大會儀如常無樂、式部彈正著南大門、内東西、幄、座、次諸僧入堂、外記行事、證者覺慶前、大僧正、導師前、大僧正觀修、呪願大僧正定證、唄大僧都濟信、前、大僧都嚴久、散花少僧都院源律師、明肇引頭、慶命、尋光等律師、堂達林壞、莊命等也云云、人々還出、後始三味、以院源僧都令申事、由、此前打火可付香、

者余取「火打」白佛言、此願非爲現世榮耀壽命福祿、只座此山、先考先妣及奉始昭宣公、諸亡靈爲無上菩提、從今後來、々、一門、人々爲引導極樂也、心中清淨願、釋迦大師、普賢菩薩、自證明給、打火、是爲用清淨火也、早付爲悅、晚付不爲恨、祈請、打火、不及二度、一度得火、感涙數行云云、別當大僧正觀修、寺名觀修付也、左大辨願文咒願等書、廿二日戊戌、作木幡佛、康淨賜祿物、○野府記云、寬弘二年十月十九日甲午、今日木幡寺供養也、額、銘書、淨妙寺、用御齊會儀、堂只造普賢一體、自今夜可始三昧云云、○元亨釋書觀修傳云、初永延元年、藤道長陰語云、我不得法力、難受大拜、願師加意焉、修諾云云、寬弘二年、藤相國建淨妙寺屬修、門葉酬持念之德也、扶桑書記、百練抄等同之 ○本朝文粹、養淨妙寺願文、江匡衡昔弱冠著緋之時、從先考大相國、屬詣木幡墓所、仰三重瞻四礫、古塚累累、幽邃寂寂、佛儀不見、云云、竊作斯念、我若向後至大位、心事相諧者、爭於茲山、脚造一堂、修三昧、福助過去、恢弘方來、思以涉歲、云云、仍自長保六年三月一日、結花構、償初心、不材之所、企造普賢而爲刻、木拜、貌之志、云云、

○塔 本朝文粹、淨妙寺塔供養咒願文云、釋迦多寶、普賢、文殊、觀音、勢至、

百練抄云、寬弘四年十二月二日、左大臣供養木幡塔、本朝文粹供養淨妙寺塔、願文同之、 ○中右記云、寬治八年三月二日、殿下令參詣木幡山陵、給云云、此間人々徘徊南門前、少時自山陵下還御、次入御淨妙寺中、暫御三昧堂、南底、有御諷誦事、次堂、西渡殿、有御儲、○後近衛關白身まかりて、淨妙寺にをくり侍ける時、常に日野山庄にかよひ侍けるを思ひいて、

新後拾遺「こいた山君のゆき、いなれにしをかちよる旅を悲しき 高階宗成

○竹原里

古文書云、木幡淨妙寺田之事、合貳段者、在山城國宇治郡竹原里十三坪、右、田地者爲七觀音院、領當知行無相違地也、應永卅三年八月八日 住持比丘妙徳

○定惠和尚墳

大織冠記兼良公撰云、定惠和尚、中臣、連、一男、實、天、萬、豐、日、天皇、々々子、御墳所、在山城、國木幡寺、邊云云、

○道隆公墓

榮花物語云、長徳、四年、四月内大臣殿故殿道隆墓木幡にまゐり給る、中暑卒都婆くきぬきいとおほかる中に、これこそ此比のこととかし、されりすこしあうみゆ、

○道長公墓

榮花物語云、萬壽四年十二月四日、うせさせ給、御年六十二、七日の夜御葬送、御骨ひろはせ給て、瓶にいれて、右中辨章信かけ奉りて、定基僧都もろとも、木幡にゐて奉り、

○頼通公墓

中右記云、寬治八年三月二日、殿下令參詣木幡山陵、給、先公宇治殿陵也、○百練抄云、文曆元年十月廿六日、今夕戌刻、當巽方有鳴動、事後日宇治殿、御墓震動之由申上、云云、○後愚昧記云、應安二月二十五日、近衛前關白、參詣宇治大相國頼通公墓、

○觀音寺 從淨妙寺舊地、南八町許當木幡村、巽有呼觀音寺所

密宗血脉抄云、真空廻心上人畏私云、木幡觀音院歟、或號木幡上人、○廻心上人傳云、泊居木幡、觀音院、大弘法化、名光輝々、○中性院賴瑜傳云、釋賴瑜字俊音紀州那賀郡人、姓源氏云云、文應初寓木幡觀音院、○空花集、木幡山、麓觀音寺、三月來游、與頗濃、憑仗詩人煩、記取、八株、花映一株松、

○永明寺

空花集、觀音永明、觀音寺、北永明寺、幽徑春深少客、過一樹空庭花似雪、驚人春色不消多、

○宇治墓

宇治墓、諸陵寮式云、鬼道ウチノ、稚郎シラノ、皇子在山城國、日本紀云、稚郎與宮屋於菟道而居、猶由讓位於大鷦鷯、尊、以久不即皇位、爰皇位、空之既經二載、云云、太子曰、我知不可奪、兄王之志、豈久生之煩、天下乎、乃自死焉、時

大鷦鷯尊聞太子、薨、以驚之、從難波馳之到菟道、宮、爰太子薨、經三日、時大鷦鷯尊標、擗ヒキ、哭、不知所如、乃解髮、跨屍、以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、爰大鷦鷯尊語太子曰、悲、兮、惜、兮、何所以歟、自逝之、若死者有知、先帝何謂、我乎、乃太子啓、兄、王曰、天命也、誰能留、云云、乃且伏棺而薨、於是大鷦鷯尊、素服爲之發、哀哭甚、勸、仍葬於菟道、山上、古來風俗、

○後、宇治墓

諸陵寮式云、贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣、文德天皇、外祖、日本後記云、天長三年七月己丑、左大臣正二位藤原朝臣冬嗣薨、年五十二、辛卯遣使就大、臣、深草、別業、詔云云、贈正一位葬于山城、國、口、郡、深草山、云云、按、深草山今、屬、紀伊郡、昔、

○次宇治墓

諸陵寮式云、贈正一位藤原氏、文德天皇、外祖、母、在山城國宇治、郡、贈太政大臣、墓、內、

文德實錄云、嘉祥三年七月壬辰、追崇外祖父正一位藤原朝臣冬嗣爲太政大臣、外祖母尙侍從三位藤原朝臣美都子贈正一位、

○次宇治墓

諸陵寮式云、贈正一位太政大臣越前公藤原朝臣基經、在山城國宇治郡、墓、一、烟、

○又宇治墓

諸陵寮式云、贈太政大臣正一位藤原朝臣時平、在山城國宇治郡、墓、一、烟、

○中宮中宇治陵

拾芥抄云、贈皇太后宮藤原安子、宇治三所於木幡、日本紀略云、康保元年四月廿九日甲戌、中宮藤原安子崩、年卅八、皇太后、母也、五月七日壬午、皇后葬送、

○院母后今

後、宇治陵、拾芥抄云、贈皇太后宮茂子云云、後三條院、左經記云、寬仁二年十二月十九日丁未、今日荷前使、宇治三所、待從宰相、

○後宇治陵

拾芥抄云、贈皇太后宮茂子云云、後三條院、中右記云、天仁元年二月廿七日、今日御即位、由、被、告、申請諸山陵云云、宇治、母后墓、

○後宇治故實季卿墓

思坂、今宇治彼方町、北有小坂、盛衰記云、高綱渡、宇治、根井大彌太行親、暫ク息ヲ繼ントテ、思坂邊ニ磬ヘタリ、中畧去ラハ都ニ上木會殿ト一所ニテ待奉ント、旬掛テ木幡ノ庄ヘ入ルトハ見エケル、

○宇治鄉

和名抄云、宇治、郡、又在久世、續日本紀云、天平十三年九月丁丑、行幸宇治及山科、○三代實錄第一云、令山城、國司警護宇

治興、渡山崎、道、以東南西、三方通路街要也、○拾玉「うちに来てた、にいかて山城の思ひけるこそ哀よの空 慈鎮○花鳥餘情云、宇治といふ名は、山城國の郡の名也、やかて里をも宇治といへり、○堀川百首「河霧の都の南ふかければそことも見えぬ宇治の山里 匡房

○路

家集「宇治路ゆく末こそ見えぬ山城の本幡の里を霞こめつゝ、頼政

○大鳳寺 在三室戸寺西北、今寺廢而爲村、名

仁和寺院家記云、自性院、院管領、大鳳寺同

○三室戸山 在宇治橋、東、北牛里許、葉第二、見圓山、歌續古今三有之、美武呂土山ト書テ入之云云、

萬「玉くしけみ室戸山のさねかつらさねすは終に有とみましや 大職冠○名寄「暮はつる秋

のかたみにゑいしみん紅葉ちらすや三室戸の山 西行

○御室戸寺 拾芥抄云、千手堂二尺一、號明星山、或云、智證開基三井、隆明、中興本尊千手、像ハ公文所宗淵者、自此山東岩淵、中取出之云云、鎮守新羅明神、

岩倉山大雲寺縁起云、覺仙僧都、寶生房御室、御室、在山城國宇治郡、光仁天皇御願寛空

上人建立云云、○百練抄云、嘉祿元年十二月十七日、園城寺大師、御影爲長吏口覺實僧正之沙

汰入、御室戸、本寺、堂舎、閉門戸、斷絶恒例、佛事了、○聖護院門跡相承曰、隆明、承徳二、治二、御室

○洞院家記云、寶治二年十月廿一日甲午、今日太上天皇初御幸宇治、平等院云云、於御室戸、

鳥居、北邊、被立行列、人々乗晴、馬、河岸儲御船寄、○土人云、古三室戸寺鎮守新羅明神、鳥居在下、

曰浮舟、宮、新羅明神御旅所也

○頓阿法師菴室

世の中あつかならす侍し比、三室の庵室にて、草庵「さひしさひ忍ひこそせめいとひきて世をうち山の峰の松風 頓阿

○宇治山 又云宇治間山、

持統天皇吉野宮にみゆきし給ける時讀侍ける、萬續古今「宇治間山朝風さむし旅にして衣

かすへき妹もあらずに 佐保大臣 或抄云、右、歌持統天皇幸于吉野、宮時、佐保、左大臣、歌也、類聚云、宇治間山、大和國之名所云云、一説、則是宇治山也、

○喜撰嶽 或云喜撰洞、○在池尾村、西、山、半腹有大岩、嶽、是舊跡也、

長明無名抄云、三室戸の奥廿餘町はかり山中へ入て、宇治山の喜撰か住ける跡あり、家いな

けれど室の石すへなどさたかにあり、これらかならず尋て見るへき事也、○土人云、三室戸寺最初

山中、從是喜撰、舊跡、途有廿五町許、其後三室戸ヲ遷、志津川村與炭山村間、舊跡在、ハ在志津川村、東北、

兩所、今三室戸寺、第三轉、地也、今三室戸ヨリ喜撰、舊跡マテハ五十町餘アリ、○元亨釋書云、釋、窺仙居、宇

治山、持密咒、求長生、辟穀服餌、一旦乘雲而去、○古今「我庵、都のたつみかそすむ世を

うち山と人いふなり 喜撰○袋草子云、喜撰か住所宇治にとりて、東のはてと云、尤可

當異方、○宇治山の喜撰の跡などいふ所にて、人々歌讀ける秋の事也、家集「嵐ふく昔の庵

の跡さえて月のみとすむ宇治の山もと 寂蓮

○池尾 今在池、尾村、三室戸寺、東 宇治拾遺云、池の尾に善禪、珍内供といふ人住ける、身淨く眞言などよく習て、年久しく行

ひて貴かりけれ、

○宇治都

あすかかいらの御時、あふみにみゆき侍けるに、讀侍ける、新勅 萬秋の野に尾花かりふきや
とれりし兎道の都のかりほしと思ふ 額田王 詞林采葉云、日本紀云、皇極天皇五年春三月、
戊寅朔、幸吉野宮、而肆宴、為庚辰幸近江浦焉、以之吉野宮ヨリ幸比良宮、中途ニ宇治
ノ故宮ニ借庵ヲ結ヒ、御座ケリト見タリ、此御製ノ文字遣モ兎道ト書リ、日本紀令府合、山城
風土記云、兎道、者輕島明宮、御宇天皇、御子、兎道、稚即子造桐原、日桁宮、以為宮、室、因
之御名號、兎道、本名曰許乃國、矣、彼是宇治、都無相違者、○新六帖、村雨にちりや過なん山
しろの宇治の都のあきはさの花 衣笠内大臣○草根 古寺鐘、鐘の聲むかひの寺とき、しよの
宮も跡なき宇治の川岸 正徹

○宇治花園

新勅「昔みし人のなみたや露ならん世を宇治山の秋の花園 慈鎮 ○詞林采葉云、右、歌稚郎子崩御ノ
ハ、昔住シ
ゴアリ、

○宇治河

諸社根元記云、平安の帝都ハ天上の名跡をあらはせる國也、中畧辰巳に八十うち川あり、天上
の八十川是也、○神古、武士の八十うち川のあしる木にいさよふ浪のよるへあらすも 人麿
○日本紀云、神功皇后元年三月丙申、朔庚子、命武内宿禰和珥、臣祖 武振熊、卒數 萬 衆、令
擊忍熊王、爰武内宿禰等、選精兵、從山背出之、至兎道、以屯河北、忍熊王出營欲戰、中畧

曳兵退、武内宿禰出精兵而追之、適遇于逢坂、以破、故號其處曰逢坂、中畧忍熊王逃無所入、
中畧則共沈瀨田、濟死之、中畧於是探其屍而不得也、然後數日之出於兎道、阿武内宿禰歌
曰、「あふみのやせたのわたりにかつくとりたなかみ過てうちにとらへつ

○渡

萬十二「千早人うちの渡のはやし瀨にわいつのありとも後も我妻 人麿

○津

木工寮式云、凡山城國宇治、津、雜材、運賃錢、自同津、至前瀧津、樽一材、功一文半、

○橋

拾芥抄大橋部云、
○土人云、昔、宇治川流、出巨椋、故古橋亦在于西云云、
○明衡往來云、東望、橋、小島、西顧、宇治之長橋云云、
續日本後記云、文武天皇四年三月己未、道昭和尙物化、
署於後周遊天下、路、傍穿井、諸津、津濟、處儲船造橋、乃山背、國宇治、橋、和尙之所創造者
也、○枝葉抄云、宇治川橋、大化二季、道登道昭初掛橋云云、○日本靈異記云、高麗、學生道登、
者元興寺、沙門也、自山背惠滿之家、而往、大化二季丙午、營宇治椅、
○三間水、和名集落外名水、部云、宇治橋自北當三、
帝王編年記云、孝德天皇大化二年丙午、元興寺、道登道昭奉勅始造宇治川橋、石上、銘、沉々

橫流 其疾如矢、脩々征人 停騎成市 欲赴重深 人馬亡命 從古至今 莫知杭
葦 世有釋子 名曰道登 出自山尻 惠滿之家 大化二季 丙午之歲 構立此橋
濟度人畜 即因微善 爰發大願 結因此橋 成果彼岸 法界衆生 普同此願

夢裏空中 導其昔緣 ○扶桑畧記云件橋 北岸石銘云云 ○帝王編年記云、弘安九年十月十八日、關白殿下兼平公御出宇治、依橋供養也、十九日橋供養御導思圓上人、諱觀尊件、橋、天萬豐日天皇、御宇、元興寺、道登道昭奉勅建立之、其後東大寺、觀理道慶修造之、始自大化二年丙午、終至弘安九年丙戌、六百四十一年、造營七箇度也、皆南都之合力、知前事之不忘、○翰林五鳳集、宇橋偶作 月舟水遠山園地亦清翠楊挾、岸白沙明、碧瑠璃上畫橋、影多少、遊人波底行、○千五百番、ものゝふの八十八ち川の橋柱のどかにおとせ榎の島ふぬ 宮内卿 ○感身學正記、弘安四年四月廿五日、又此間自供僧中、此、宇治橋、南都元興寺、道登道昭始造立之、東大寺、觀理道慶後修造之、代々如此、可渡之頻被勤、○弘安九年宇治橋供養の日、龜山院御幸ありけるに、雪いとふかくふり侍ければ、續後拾遺「行末も道はまとはしたためしなきけふのみゆきの跡を残して 圓光院入道前關白

○橋寺 在宇治橋東西、號放生院常光寺、開基觀尊西大寺、末

感身學正記云、弘安四年四月廿日、依平等院、僧等、請著宇治、廿一日開講梵網經、今日橋寺堂供養、○親長卿記云、長亨二年二月廿三日、早旦起南都、宿坊宇治、橋寺地藏院申一獻、○康富記云、應永廿七年十月十九日、甲才宇治下向、橋寺放生院宿客坊、云光於宇治詠和歌、○ふけゆけは夢うちさます河波の宇治の泊や旅ぬなるらん 妙秀 ○嵐ふく田上山のもみちはもうちのいせきにかゝる川浪 康富 ○宇治の橋寺にて、圓葵集「こはらめや山は朝日のふもと川 兼載 ○大系圖、信順宇治放生院長老尙覺坊、從五位上秀弘男、

○橋姫社 坐宇治橋西南、號姫大明神、六月十日祭之

河海抄云、橋姫は宇治橋の神也、○花鳥餘情云、宇治の橋姫は橋下の姫大明神と申神也、○古今「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らん宇治の橋姫 住吉御歌 顯注密勘云、宇治の橋姫とは、姫大明神とて、宇治橋の下におはする神也、その御許へ、宇治橋の北におはする離宮と申神、夜毎に通ひ給ふとて、曉毎におひた、しく、浪のたつ音のするとなん、彼邊に侍る土民等申侍し、而隆縁伯耆と申歌讀は、住吉明神の宇治の橋姫と申、その神の許へ通ひ給ふ間の歌なり、袖中抄 同之 又六帖家持歌に、「むは玉のよむへはかへるこよひさへ我をかへすな宇治の玉姫 詞林采葉云、彼橋姫の物語は、昔妻二人もたりける男、本の妻つはりして、七磯の和布をねかひけるに、伊勢の海つらにて尋とて、龍王に召れてうせぬ、彼妻たつぬ行てあへりけるに、さむしろに衣かたしきといふ歌を詠して、消失にけり、又今の妻も尋ゆきてあへりければ、同歌を詠けりと云々、和歌色葉 同之 ○古今爲家抄云、宇治の橋姫といふ事、嵯峨天皇の御とき、有女依嫉妬、夫被弃ける、其後あまりねたさに、百夜の間かの河邊に行て、髪を水にひたして、願くは我成鬼神、我夫の今の妻をとらむとちかひて、水をた、き水神にちかひければ、百夜に満するとき、則成鬼、今女、口「取カ」仍此鬼を土人こゝに祝といへり、又云、橋守明神ともいへり、又云、昔宇治川の邊に、夫婦すみけるか、男龍宮へ財もとめんとて、行て不返けるを、女戀悲しみて、於彼橋邊死て成神、仍曰橋守明神といへり、○橋姫の昔の妻、伊勢の浦にあこかれしと思ひ出て、康富記「伊勢の海やみるめも波に袖ぬれし哀かけに宇

治の橋姫 康富

○網代

侍中群要云、山城國宇治、御網代、毎日進鮎魚、○花鳥餘情云、内膳式云、山城國近江國氷魚網代各一所、其氷魚始九月迄十二月三十日貢之、今案、近江の田上の網代にもれたる氷魚を、山城國宇治にてとるといへり、一説、あしろとは、網代守人のみにあらず、宇治に網代と云所あり、そこを栖にして、網代をつかさどる也、○山槐記云、永曆元年十一月一日、乙亥博陸内相府相共命向宇治、網代給、云云、○洞院家記御幸云、寶治二年十月廿二日乙未、今日上皇御逗留宇治也、云云、御舟被下網代、御覽氷魚、○感身學正記云、弘安七年正月廿一日、永可、停止網代之由、被下院宣畢、廿八日、宇治、網代始破却、二月廿七日、網代停止、官符宣被下、帝王編年記同之、○うちのあしろにゐれる人の侍ければまかりて、後撰「宇治川の浪にみなれし君ませは我も網代によりぬへき哉 大江興俊○拾玉」にはてるや櫻谷より落たきつ波も花さくうちの網代木 慈鎮

○山吹瀬 八雲御抄云、山城宇治川也、又云、やまふきの崎こしまの崎也、源氏うち也、

萬葉仙覺抄云、宇治川にありと云云、又大和吉野川山吹の瀬ともよめり、○新拾遺「散はつる山吹の瀬に行春の花にさほさすうちの川長 西園寺入道

○塔島 在宇治橋川上三町許、立石大塔、高五丈也、

帝王編年記云、弘安九年十月十六日、思圓上人宇治橋、南孤島起立高五丈十三重、石塔、彫付

網代停止、官符於石、南面、太政官符山城國司、應且限未來際、修造同河、橋事、右得、叡尊今日廿四

日奏狀、稱、謹檢内外典籍、尺尊之出世、以利樂有情、爲心、聖人治邦、以勝殘去殺、爲德、天上天下之寶有直于身命、五流五刑之罪無過于奪命、我自惜命、彼亦如是、與我何異、是以轉輪王之十善不殺、爲其首、孔宣父之五常以仁爲其先、仁與不殺名異義同、於是長楊羽獵之蹤、嚴陵渭陽之釣、畋遊有時、擒殺非多、於宇治河網代者、不論晝夜不分時節、構之者念々蓄不善之業、守之者步々增造惡之思、網代數箇所漁客數百人、造次所殺獲不知幾千萬、罪業之甚以何加旃、于時平等院、供僧等、來告曰、去久安三年七月、始降綸綍於寺院、雖停漁獵於山河、驪翰惟移鳳詔如忘、早任先符之旨、宜立後代之制、抑河上有一橋、自大化元年、至建保、末年、造營及六ヶ度、涼燠餘六百廻、頃年以來、頽破已甚、往還不輒、最初元興寺、道登道昭建立之、其後東大寺、觀理道慶修造之、皆南都之合力、知前事之不忘、畧修理右宮城使正四位下左中辨平朝臣 修理東大寺大佛長官正五位上左大史兼備前介小槻宿禰 弘安七年二月廿七日

○槇雄山 八雲御抄云、宇治、○土人云、在朝日山、東池、尾村、邊、

源氏物語惟か本、卷云、音羽の山ちかく風の音もいとひや、かに、槇の山邊もはつかに色つきて、○玉葉「朝朝まきの尾山の霧こめて宇治の川長舟よのふなり 土御門内府○新拾遺「橋姫のまつ夜ふけてや郭公槇のお山に初音なくらん 中納言有光

○朝日山 八雲御抄云、朝日山宇治也、○土人云、興聖寺、東山云云、或記云、近江國有同名并朝日、里朝日、野邊等、皆近江云云、玉葉「麓をのうちの河霧たちこめて雲むにみゆる朝日山かな 權大納言公實○宇治御所にて

御會に山風、月清、末とをき朝日の山の嶺におふる松にの風もときいななりけり 後京極

○興聖寺 在朝日山、麓宇治川、東北、號

佛徳山、曹洞道元和尚、開基、此寺始、生、榮草、中絶年、正保年中、淀、城主永井信濃守大江朝臣尙政再興于此、地、中興、祖萬安、額者青蓮院尊純親王、土人云、此寺地、元離宮、神地也云云、

道元和尚行狀曰、相攸於洛之東南宇治、縣、或深草極樂、建立、號、觀音導利院興聖寶林禪寺、嘉禎二年十月十五日開堂、云云、○寺記云、開基道元禪師諱、希元、字道元、號、佛法禪師、姓源氏、洛陽、人、入、宋、從、洞山良价之流、師、天童、如淨禪師、附、以、曹洞宗、歸朝開、法於城南、深草郷、經營於一字、嘉禎二年十月十五日、開堂號、觀音導利院興聖寶林禪寺、建長五年、示寂云云、寺退轉、近年再興宇治朝日山、土人云、深草郷道元禪師、舊蹟者、藤、杜、東與、谷口之間云云、○元亨釋書云、釋道元、姓源氏、京兆人、入、宋、受、菩薩戒、元、入、宋、時、從、天童、淨和尚相傳之血脉也、元、乃、永平、開山佛法上人也、○宇治興聖禪寺、記源通村云、城州宇治縣之興聖寶林禪寺、本朝曹洞の初祖、道元師の草創として、宗門相續せしか、いつの比よりか、寺院破壊して、いまいかたもなくなりしを、永升信濃守大江尙政朝臣、ちかきあたりあるよしあて、靈佛勝槩周覽のつゐてに、此寺の廢れたる事をおしみて、忽再興の志をはこひ、不日の經營をなし、すてに落成す、あかるに件の練若、當昔の佛什物等紛失せり、爰に或人告ていはく、彼師手自刻むところの釋迦牟尼尊ありと、是を聞隨喜感悅して、則こひとて安置す、師作の佛像世希、有物也云々、今此時にあたりて、はからざるに尊像出現せる事、精舎の興隆に往契あるかとし、希代の機縁末世の不思議といふへきか、あかのみならず、

師の法語に眞蹟の一ちく、興聖寶林寺沙門、洛陽に所持の人ありて寄附す、云云、慶安三の年冬

十二月これを記す○城州宇治、郡興聖寶林禪寺鐘之銘云、寺之境致東有朝日山之除、暗返、照也、西有八幡宮之和光同塵也、巨川在坤長橋如虹、而送者望崖而返、離宮在乾與橋姬、如神遊者、其靈不可測焉、東北有喜撰菴、所謂洛之異、而此寺、良也、其餘對平等院、則憶博陸之舊事、向、惠心院、則尋僧都之遺蹤、云云、

○離宮明神 宇治橋、北二座、五月八日祭之、○按、皇極天皇、宇治離宮之地祭此神乎、故稱離宮明神乎、

諸社根元記云、舊記云、此神者廢太子云云、又忠文民部卿二人爲彼、地主、位記、治曆三年十月七日正三位、○扶桑略記云、治曆三年十月五日庚戌、天皇車駕幸臨宇治、平等院、七日壬子、離宮明神授其位記、○百練抄云、治曆三年十月七日、遠幸離宮明神、授一階、○盛衰記云、民部卿忠文ヲ神ト祝奉、宇治ニ離宮明神ト申ハ是也、○兵範記云、仁平三年四月十五日、去八日離宮御輿迎以後、平等院、三綱以下、田樂爲本、散樂爲先、風流云云、村々競營、每日出立、先參御輿、旅所、次參入道殿、御所、○又云、保元二年五月八日壬申、宇治離宮、祭不被奉幣乘尻神馬等、依、亮暗、年也、

○宇治神社 神名帳云、宇治郡、宇治神社二座、末社三室戸村二座、大風寺村一座祭之、是云宇治神社二座、彼方、神社一座乎、

○東雲軒

宗長日記云、大永六年六月、伏見津田聚情軒同道、宇治川舟さしのはせ、橋の本よりをりて、東雲軒二三献ありて、橋をわたる薪へ罷下云云、八月十二日、東雲軒兼日より有増連歌「霧

の朝け川音くらき晴まかな 宗長

○彼方アチカガ在宇治橋東北今曰アチカガ

増鏡云、かのうはそくの宮の、へたて、みゆるとのたまひけんをちの志ら浪も、えんなるを
とをそへたも、○日本紀「をちかたのあら、まつはらまつはらに云云、○源氏浮舟卷「水まざるお
ちの里人いかならん晴ぬなかめにかきくらす比○五社百首」をちかたや都のたつみ誰すみて
まきの炭かま烟たつらん 俊成○中務内侍日記云、うちなるをちといふ所をみれば、いつれ
昔の跡ならんと、色々のもみちとも見えたるに、「おはつかないつれ昔のあとならんをち
かた人にとやとはまし

○彼方神社土人云、今坐大鳳寺村竹林中

神名帳云、宇治郡宇治彼方アチカガ神社社

○阿古尼原

萬十三長歌「千早振うちのわたりの、瀧の屋のあこにの原を、千とせにもかへるとなく萬代に、

○瀧屋川三十八帖歌枕ニ未勘云々、按ニ萬葉集に、ウ

卅八帖歌枕「落たさつたさやの川の岩にふれくたる心はなにのためそは 光俊

○葛野

日本紀云、應神天皇六年二月至兔道之葛野、○古事紀云、一時天皇赴幸近淡海國之時、御立
宇遲野上望葛野、中畧坐木幡村之時、麗美孃子遇其道、衢下畧

○下田野

三代實錄云、元慶六年五月廿一日、山城國宇治郡下田野、樵夫牧豎之外、莫聽放鷹追兔、

○天穗日命神社神名帳云、宇治郡

三代實錄云、貞觀四年六月十八日乙卯、授山城國正六位上天穗日命、神從五位下、

○大國郷和名抄云、宇治郡

承久記云、武藏守供御瀬ヲ下リニ、宇治橋へ被向ケルカ、其夜ハ岩橋ニ陣ヲ取、

○賀美郷和名抄云、宇治郡

山城名勝志卷第十七附錄 宇治郡部

○黃檗山萬福寺在五箇庄大和田村

隱元和尚年譜云、師福州福清東林林氏子ナリ、寬文元年辛丑五月初八日、大和開創、仍以黃檗
山福禪寺、二年仲春建法堂、廣十一間、深十間、師自入國所見梵像不甚如法ナリ、適閩南有
苑道生者、善造命、眉監院督造、觀音韋駄伽藍祖師監齋等像、八年二月廿五日、大殿上梁
既、而天王殿、應供堂、鐘鼓樓等、次第告峻、或云、開山初祖諱隆琦、字隱元、大明福清之人也、性林氏、承應
地、起、師爲開山初祖、寬文元年秋九月、草創移錫居焉、名
曰黃師、十三年四月初二日、上皇特賜大光普照國師之號、

○惣門放生池在

○左 天王殿前布盛、後草駄天、左右四天王、大雄寶殿中釋迦、左右迦葉、阿羅漢、左右羅漢、法堂、妙高峰

○天眞院 鐘樓 伽藍祠竹林精舎 五雲峰 東方丈 柳大明神祠從寺道八町

○右 萬壽院 水庵和尚塔院 松隱堂 開山堂 舍利殿 中和井 中和門院渡御時掘之云云 壽藏 開山全 萬松岡 鼓樓 祖師堂 禪堂 祠堂 地藏西方丈 雙鶴亭 開祖別莊

○黃檗十二景

妙高峰 寺之 大吉峰 案山也、長峯也、見西 五雲峰 在妙高 白牛巖 在柳宮 青龍淵 在寺 雙鶴亭 在寺右 三級池 在元 山門道左 龍目井 在惣門前左 松隱堂 開山堂 在 萬松岡 北邊 中和井 在開山 東林菴 在寺左

○天王山佛國寺 在木幡山矢島峠、從古此地有

或云、開山和尚諱性激、字高泉、大明福州府福清縣人也、承應三年、甲午夏、黃檗隱元老和尚、命座元惠門和尚補其席、乃應請東渡、延寶六年戊午夏、伏陽御香宮、道官捨勝地、申官創伽藍、號天王山佛國禪寺、云云、太上法皇賜宸書額曰大圓覺、○佛國詩偈輯要云、佛國十 延寶戊午 六季、御香宮右京大夫、以古寺地捨、徒子雷州亭、請予重開、蓋百季廢地也、

○寫二六景

千秋嶺 嶺不甚高、在山門外、即進京師之大道也 金涌水 在寺右、松下、僅三尺許、雖元旱不竭、昔有王者、性嗜茶、嘗用此泉 御香宮 居寺右、與本寺並坐、蓋道宮也、今已頽毀、惟宮前一石坊、儼然如新 觀音巖 居本山左、臂千佛臺上 慈照院 在方丈東、延寶戊午冬、京兆田中隱者、爲雷洲力建、半月池 在方丈左 將軍山 在嶺南、爲寺近案、參天、古木在夏、如秋、前關白嘗鎮于此、城關莊嚴今廢 千佛臺 在寺左、其上、廣、若千 梅花塢 在寺外、左偏、古來所植、傲雪凌霜、有孤山風致 袈裟洋 在寺前、殺稼秋、豐、青黃滿目、如袈裟 仙子 在寺前一里許、有桃花數萬株、居民以耕種爲業、宛有武陵風致 碁盤石 在千佛臺上

○惠心院 在宇治興聖寺北、本尊藥師、額、持明院基時、離宮明神神宮寺、其一也、云云

鐘銘云、宇治、惠心院者、在昔源信僧都卓錫、遺趾也、

○毘沙門堂 元在洛北出雲路、寬文中、門主公宗僧正、於山科安祥寺、東被再興也 ○精大明神 在二尾村、鞠神、勸請、藤田彦、命云云

○願行寺 本幡慈心上人開基、淨土宗、木幡流、慈心、真忠弟子也

山城名勝志卷第十七

山城名勝志卷第十八

久世郡部

山城國久世郡風土記云、東西十三里、南北十里、東限長野川、西限藤岡、南限百舌鳥原、北限小川、當郡川多、山少、民家富有、而出竹木奇砂、

○宇治鄉 和名抄云、久世郡又在宇治郡、久世郡、風土記同之

井蛙抄云、川の南北をうちといふ歟、

○宇治院

岷江入楚云、李部王記云、天曆元年十一月三日、太上天皇陽成院御宇治院遊獵、山野、○又云、天慶八年十月十八日、朱雀院宇多帝庄牧勘物云、宇治院萱原、庄被留後院、○花鳥餘情云、河原左大臣融公の別業宇治郷にあり、陽成天皇まはらく此所においしましけり、宇治院と云所也、宇多天皇朱雀院と申も領し給ける所也、承平の御門こゝにて御遊獵ありける事、李都

王記に見えたり、其後六條左大臣雅信公の所領たりしを、長徳四年十月の比、御堂關白此院を買取て、同五年人々宇治の家に向ひて、乗舟の遊などありき、宇治の關白の代になりて、永承七年に寺になされて、法花三昧を修せられ、平等院と名付侍り、治暦三年に行幸ありき、今藤氏の長者の知所也、○さらしなの日記、初瀬詣宇治の渡につきぬ、中暑からうして渡りて、殿のさふらう所の、うち殿をいりて見るにも、うき舟の女君の、かゝる所にや有けんなど、まつ思ひ出らる、○明衡往來云、宇治院、自然之得、傍疊畫屏之山、橫翠帶之河、東望橋、小島、西顧、宇治之長橋、云云、○本朝文粹、宇治別業、即事、江以言雍州、上腴洛城、南面有一、勝境、蓋乃左相府之別業矣、長河經其前、洩湖尾分漸海口、四山廻其畔、疊西葱分峙、東萊、云云、○本朝麗藻、暮秋宇治別業、藤原道長、別業號傳宇治、名、暮雲路僻隔、華京、柴門月靜眠、霜色、旅店風寒、宿浪聲、排戶遙看、去、卷、簾斜望、雁橋、橫、勝遊此地猶雖、盡、秋興將、移潘令、情、

○平等院在宇治、橋南、○土人云、此院元、天台、寺務、三井圓滿院御門主也、然宇治關白御家人等、結草房爲菩提所、寄衣料於心譽上人、令住于此、地、于今天台淨土兩流守、此院、鎮守、離宮、明神、菟道稚部子皇子是也、

歷代編年集成云、永承七年三月廿八日、關白左大臣以宇治、別業爲佛寺、平等院奉供養、扶桑、花物語、○緣起云、慶導天台座主三井明尊僧正、○夜鶴庭訓抄云、額、源左房、○土記云、治暦四年四月三日、平等院、額以今日未刻懸之、西門北門等也、内大臣所、令書給也、○青蓮院門跡系譜云、尊圓法親王、平等院額題、○著聞集云、爲成一日からうちに、宇治殿の扉の繪を書たり、○以呂波字類抄云、永承七年三月廿八日、供養、五間四面、東、面中尊大日、○東齋隨筆云、宇治殿平等院を建立し給

ふ時、地形の事など合せられん爲に、土御門右府を相伴なはせ給ふ、宇治殿被仰て云、大門の便宜北面にあらずんばよりなかるへし、北向に大門ある寺侍りや、右府申されて云、覺悟せしめず、時に匡房卿いまた無官にて、江冠者としてありけるを、後車にのせて具せられたるを召出されて、かれこそ加様の事うるせく覺えて候へきとて問るゝ處に、匡房申て云、北面に門ある寺の天竺にて、那蘭陀寺、唐に西明寺、本朝に六波羅密寺なりと申す、宇治殿大に感せしめ給、古事談、○續世繼云、治暦三年十月十五日に、宇治の平等院にみゆきあり、中暑十七日ふみなとつくらせ給ふ、そのたひの御製とて、うけ給ひ侍し、新撰則詠入、忽看鳥瑟三明、影暫駐鸞輿一日、蹤、後冷泉院御製○無題詩、平等院前誰發榮、傳斯重代感循成、法性寺入道○宇治平等院の寺主になりて、宇治に住つきて、ひ之の山のかたをなかめて、金葉、うち川の底のみくつとなりなから猶雲かゝる山を戀しき、忠快法師○宇治平等院にて一切經會に、夫木、法の水やそうち川にせきとめて花の友とや春を待けん、後京極

○阿彌陀堂

寺説云、此堂、移漢、例、兩樓爲翅、後廊爲尾、棟、鍮金、鳳凰、雌雄居之、隨風舞、故曰鳳凰堂、○按、昆古、宮製ヲ摸セルニヤ、豊樂殿ニモ左右ニ、栖霞、舞臺ノ兩樓アリ、洛邊無双、堂ツクリナリ、○緣起云、本尊、定朝、圓光、中、梵字、醍醐寺、成尊僧都、色紙形堀川左府俊房、四壁并扉淨土九品、圖、繪所、長者爲成、○以呂波字類抄云、阿彌陀堂、天喜元年三月四日、甲辰、供養僧正眞範、奈具本堂供養、○扶桑略記云、永承八年癸巳三月四日甲辰、關白左大臣平等院、内、建立大堂、安置文六、彌陀佛像、云云、莊嚴古今無雙、云云、百練抄云、准、○増鏡云、

寶治二年十月廿日ころ、宇治に御幸し給ふ云云、平等院の釣殿に御舟よせおろさせ給ふ、本堂にて御誦經あり、御たうしはて、後、阿彌陀堂御經藏、せむはう堂まで御覽しわたす、○百練抄云、承保三年十二月十二日、關白供養平等院、内、阿彌陀堂、○洞院家記云、御幸寶治二年十月廿一日甲午、今日太上皇初御幸宇治平等院云云、出御本堂正面御座、有御誦經、事、次有諸堂御巡禮、渡御阿彌陀堂之時、被用御車、

○法花堂 寺説云、今阿彌陀堂、後有法花三昧堂。

以呂波字類抄云、法花堂天喜四年十月廿二日、手才供養之導師權大僧都長守、

○塔

以呂波字類抄云、御塔康平四年十月廿五日、供養宇治殿、女、皇后宮、御願、○扶桑略記云、康平四年十月廿五日、供養宇治平等院之塔、皇后宮職、寛子造立件、多寶塔一基、奉安置金色摩訶毘盧遮那如來像一体、阿闍如來像一体、寶生如來像一体、无量壽如來像一体、不空成就如來像一体、百練抄、康平記、等同之。○康平記云、御塔五智如來、佛師阿闍梨前大僧正明尊、御願文美作守實綱、内匠頭兼行清書、○増鏡云、寶治二年十月廿日、宇治に御幸し給ふ、後嵯峨院廿三日還御云云、院よりもあるしのおと、に、御馬たてまつり給ふ、寶塔の庭に引出たれば、下界

○五大堂 以呂波字類抄云、大殿、御願御佛五大尊。

扶桑略記云、治曆二年十月十三日、右大臣藤原、師實、平等院、内、建五大堂、供養之、百練抄、同之。

○不動堂

以呂波字類抄云、不動堂延久□□供養、申請件、不動、土御門右大臣師房、奉爲宇治殿御惱消除、造立之、

○御經藏 一切經藏、舊跡、在南、山際、

以呂波字類抄云、御經藏永久元年五月廿九日、始修一切經會、○兵範記云、仁平三年三月三日、平等院一也、禪定自今朝、御座本堂、御所也云云、午、刻移御棧敷、透御車云云、其道添池邊、切經會阿彌陀堂、北廊、北、自山路、經圓堂、南五大堂、後、自西大門、更東行、○山槐記云、治承三年三月三日、今日宇治一切經會也、云云、予午刻著宿所、大湯屋經藏西門、對カキ也。參經藏御所、○宇治の御經藏の沉ありと聞て人のもとより、兼好家集かつきせぬ浮世のあまもほしやらぬ鹽たれ衣やりてみせいや

○寶藏 土人云、本堂、南有舊跡。

或記云、治曆三年、上皇臨幸、寶藏納三國傳來、佛像經論并天下、名器、○明月記云、元久二年三月廿二日、今日有被開、宇治寶藏事、云云、仍大納言殿令向宇治、○東齋隨筆云、平等院寶藏に水龍と云笛あり、宇治殿件の笛をかひ取給て、寶藏にこめられたり、○又云、葉二宇治殿平等院を作らせ給ける時、御經藏に納られけり、此笛に葉二あり、一の赤し、一の青し、○太平記云、建武三年正月宇治へ、楠判官正成向ラル云云、橘、小島楨、島、平等院ノアタリヲ、一字モ殘サス、燒拂ケル程ニ、魔風大厦ニ吹懸テ、宇治ノ平等院ノ佛閣寶藏、忽ニ燒ケル事、コソ淺猿ケレ、云云、

○圓堂 以呂波字類抄云、大治元年八月九日供養、兵範記云、仁平三年正月廿七日丙戌、平等院圓堂供養、

○釣殿 土人云、舊跡在河邊、爲漁人、栖、今俗云、島新出、

增鏡云、平等院のつり殿に、御舟よせておりさせ給ふ、○默雲稿云、是日遊釣月菴借舟以泝急灘、云云、及昏黑繫纜於平等院釣臺之下、

○觀音堂 號最勝院、十一面定朝作、在芝、傍土人云、釣殿、觀音、

○鐘樓 本朝三鐘之一也、

諺云、銘神護寺、音園城寺、形平等院、

○扇芝 在平等院內、

帝王編年記云、治承四年五月廿六日、賴政入道奉具宮、欲赴南都之間、遣官軍於宇治合戰、宮以下遂以誅之、宮、御頸入洛、於院、御所、觀覽、賴政卿親子於平等院釣殿、自害訖、○宇治平等院にて、賴政卿か扇の芝とかやの花をみて、雪玉集「咲匂ふ梢をとへは苔の下のその名も花にあらはれにけり」

○南泉房 舊跡在平等院、方丈、南土俗其地ヲナイセン坊ト云、

宇治拾遺序云、世に宇治大納言物語といふ物あり、此大納言は隆國といふ人なり、西宮殿の孫、俊賢大納言第二の男也、年たかうなりては、あつさを侘て暇を申て、五月より八月までは、平等院一切經の南の山際に、南泉坊といふ所に籠りゐられけり、扱宇治大納言とは聞えけり、

○泉房 南泉房同所歟、

扶桑略記云、寛治二年三月一日午刻、御宇治、先是攝政、於大僧正泉房儲饗饌、奉待上皇、

○新堂

百練抄云、康治元年六月廿九日、入道大相國、供養宇治、新堂、法皇高陽院臨幸、

○櫻町 在平等院、大門北二町、大

洞院家記 御幸云、寶治二年十月廿一日甲午、今日太上皇初御幸宇治、平等院、中畧於御室戸、鳥居北邊、被立行列、人々乗晴馬、河岸儲御船寄、中畧上皇下御、々乗船、中畧次寄公卿、舟、土御門大納言以下乗之、寄櫻町、入北門、參會、

○法定院

榮花物語云、寛治二年、四條宮寛子も、宇治に此堂たて、かよひすませ給、○百練抄云、寛治三年二月廿九日、太皇太后寛子、四條宮、供養宇治、法定院、内、堂、中右記、同之、

○勝安樂院

以呂波字類抄云、勝安樂院宇治一條殿、御堂、

○別應

感身學正記云、安四年四月廿五日、於平等院、別院丈六堂、八百四人授菩薩戒、此時網三十帖、釜十五燒之、生鯉三十隻放之、

○西御堂

兵範記云、仁平二年十二月十四日、故、北、政所、御忌日、云云、高陽院御經一部、於、宇治西、御堂、被、供養、請僧六口、平等院 供僧

○成樂院

兵範記云、仁安二年四月十一日、今日上皇爲御方違、可幸、宇治、仍下官爲御儲、早旦向、宇治、成樂院、御所、

○宇治別業 宇治關白賴通公、○平等院、元宇治院ト號ス、融大臣ヨリ宇治ノ關白ノ時ニ至ル迄、高貴ノ別館ナリ、西ノ方、四町許ニアリ、其内ニ池殿、岩橋、御園、御倉町、公文所、等、名今ニ殘テ有リ、無題詩、秋、日、宇治別業、法性寺入道殿下長安城外十餘里、宇治、佳名今古同、秋水月沈沙岸白、暮山日落洞雲紅、

○池殿堂 土人云、池殿町ト云、所アリ、此地平、

以呂波字類抄云、池殿本願巨倉御堂供養、○百練抄云、永久四年六月廿日、四條、宮供養、宇治、池殿、堂、○又云、大治二年四月十四日、太皇太后寬子崩、宇治、別業、九十二、宇治殿女、後、冷泉院、后四條、宮、

○泉殿 土人云、從、宇治、至、巨橋、中路ニ有、泉、殿、名、此地、至、于、今、有、清泉、云云、

後二條關白記云、應德三年十月十六日雨降、曉、宇治殿、泉殿、殿下御參也、○東鑑云、永保三年十一月十二日、宇治、泉殿、舍屋等被造加、後、殿下京極殿渡御、○中右記云、寬治八年五月廿二日、大殿大將殿太后北、政所、從、宇治、令、還給云云、日者於、宇治、泉殿、有、種々、雜遊云云、

○遠羅殿

後二條關白記云、寬治七年五月十日、宇治遠羅殿有觸穢、事、問、明法博士國任之處、不可有

穢由所、令、言上、

○小松殿 土人云、有、稱、小、松、所、爲、茶、畑、

百練抄云、保延元年十月十一日、上皇臨幸前大相國、宇治、別業、號、小、松、殿、新、造、○兵範記云、保元三年三月二日、早旦右府并若君等、入、給、宇治、已、刻著御小松殿、

○西殿

台記云、久安六年九月二十六日、雞鳴、後參、西殿、禪、閣、シ、ハ、ラ、ク、ア、リ、テ、御、所、頃之乘、輿出御、余乘、車從之、棹、船渡、河、於、東岸、禪閣移、車、余連、車、

○宇治新御所

百練抄云、建仁三年十二月四日、御移、徙、宇治、新御所、又云、元久二年閏七月三日、宇治、上皇、御所燒亡、

○小川 山城國久世郡、風土記、○土人云、橫島南、入口ニ古川ト云所、云、北限、小川、云云、アリ、埋、テ、爲、田、地、此、所、カ、ト、云、リ、

拾玉 宇治百首、夜もすから我こそいみれ飛螢うちの小川の松の梢を、 慈鎮

○小川御所

兵範記云、仁安二年四月十一日、今日上皇爲御方違、可幸、宇治、云云、御儲高倉殿、御沙汰云云、小川、宿所可有御覽、由、左衛門佐内々奉、仰、每事經營、○山槐記云、治承三年三月三日、今日宇治、一切經會也、殿下并北政所入給云云、今日殿下不飯給、大相國同令留給云云、秉燭以前飯、小河、御所給、前、相國同令參給、○拾玉集云、建久元年十月十九日、東大寺棟上御幸云云、法皇